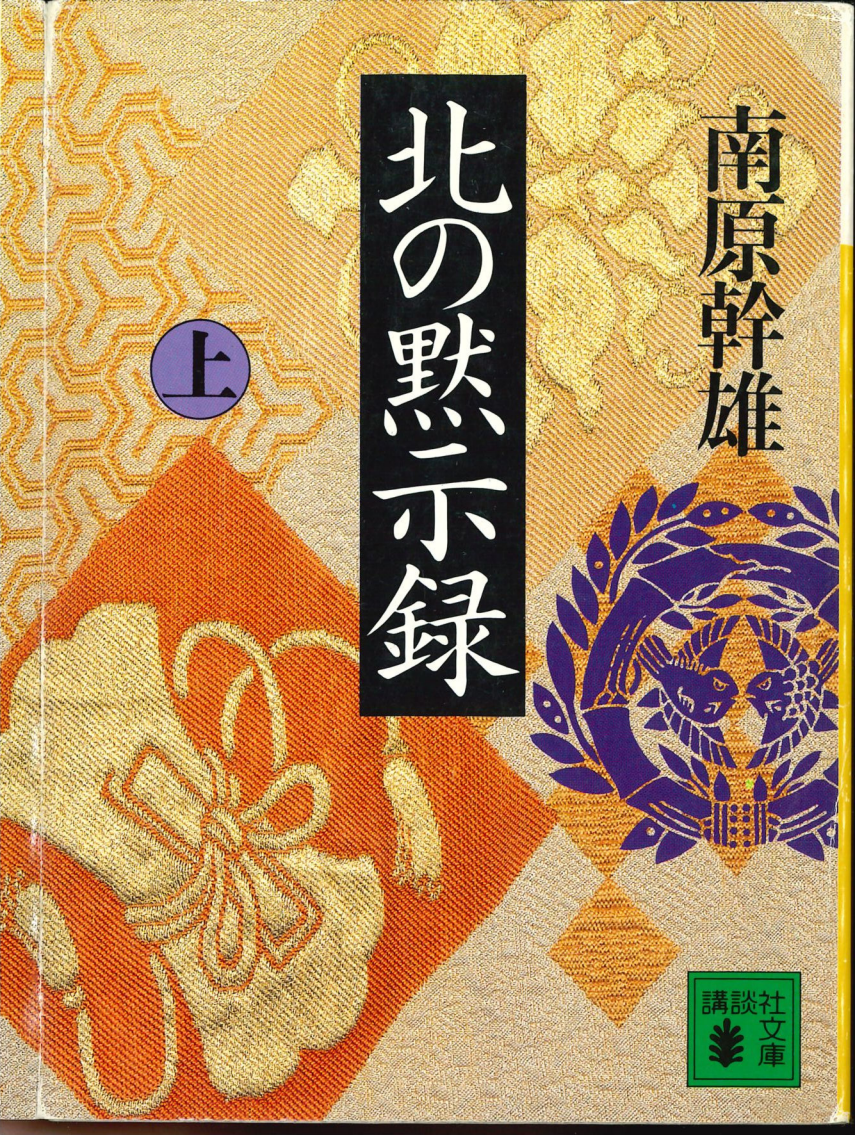
北の黙示録

上

南原幹雄



講談社文庫

カバーデザイン　安彦勝博

な23-3

南原幹雄

な23 3

北の黙示録(上)

講談社文庫
¥400

北の黙示録(上)
南原幹雄
定価400円

な23 3

伊達政宗が百五十年前に抱いた奥州独立の理想と野望。その実現に、伊達を盟主として南部・津軽・上杉・佐竹・二本松の六藩が起った。寛政四年、北海道根室にロシアの軍船エカテリーナ号が寄港した。伊達藩は密かに使者を送り、貿易による経済力の強化、ライフル銃の大量輸入、六藩同盟の確立を急いだ。

ISBN4-06-184103-3 C0193 ¥400E (O)

講談社文庫
南原幹雄 作品

首一万両
修羅の絵師
北の黙示録(上)
北の黙示録(下)

北の黙示録(上)

南原幹雄

講談社文庫

講談社文庫

北の黙示録(上)

南原幹雄

講談社

北の黙示録 上 目次

エカテリーナ号 9
仙台城 16
中町奉行 25
伊達の要塞 41
入り鉄砲、出女 53
仙台河岸 65
襲　撃 82
手　弓 95
女ごころ 111
後の月 124

大年寺山の公子 139
伊達山岳党 153
伊達の陰謀 169
米戦争 184
浪華の決闘 198
夜の雨 217
浜御殿二重櫓 228
北国の狙撃者 245
離れ座敷 267
浮世三斎 274

北の黙示録 上

エカテリーナ号

オホーツクの海はゆるやかにうねり、にぶい鉛色にしずんでいる。おもくるしい海の起伏のなかで、時折波頭が白くくだけ、音をたてて散っていく。

空は灰色の雲が幾層にもおおって、太陽の光をさえぎっている。風はやんでいるが、水平線には濃い霧がかかっていて、遠方までのぞむことはできない。

寛政四年――。

九月初頭といえば、内地では晩秋だが、蝦夷地根室ではもう荒涼たる雪の季節になる。吹雪にでもなれば、オホーツクはこのようにおだやかなものではない。一時の間に海ははげしく変幻し、巨浪が白い牙をむき、地鳴りのような唸りをあげて荒れくるい、海風が咆哮をともなっておそいかかる。

だが、海は今、不気味なほど平穏さをみせている。根室湾内は打ち寄せる波の音さえしずかであった。

湾内や沖には、地元の漁師たちの船がでていた。蝦夷地をとりまく海域は、親潮がはこぶ寒流系魚群の大漁場である。とりわけ、鮭、鮭、鱒の宝庫であった。

そのとき、沖にでている一隻の船の漁師が、洋上に異様なものをみとめて、奇声をあげた。

「ややっ、あれは？」

巨大な帆柱のようなものが、乳色の厚い霧の層をつらぬいて天にむかって佇立しているのだ。

「帆柱か」

「いや、ちがう」

乗組んだ仲間の漁師もそれをみとめたが、帆柱というには巨大すぎた。彼等がかんがえている帆柱の何倍も、十何倍もの高さと太さである。

両人はおどろきと不審のいりまじった目でそれをながめた。形はまちがいなく帆柱である。先端には見たことのない旗が風にはためいている。

「帆柱でなくて、なんだ」

一人がそういったとき、霧の流れの中から大きな船首がぬうっとあらわれてきた。漁師二人は仰天し、呼吸もとまらんばかりの恐怖におそわれた。

「こんな大きな船があろうか……」

「船の化け物だ！」

やがて、黒く塗られたとてつもなく巨大な船体が徐々に霧をはらって姿をあらわし、ついに全容をさらした。

二本の長大な帆柱を高々と上空へ突きあげ、何枚もの帆をいっぱいに張り、丸太を胴切りにしたような煙突から大量の黒煙を空へ噴きあげている。想像を絶した巨大船であった。甲板から海

へむかって突きだしている数門の大砲の筒先も不気味である。

漁師たちは息をのみ、声をおさえた。そして巨大船をみつめてがたがたと震えだした。

彼等からすこしはなれた海上で魚の群を追っていた船の漁師たちも、この黒船をみて肝をつぶした。船をあやつるのもわすれて、呆然とみとれた。

『海にうかぶ城郭』

といっていいほどの威容であった。見あげるばかりに高い甲板にうごいている人間がまるで石ころのようにちいさくみえた。

漁師たちは恐れをなして漁をやめ、一散に港めざして船を漕ぎだした。あわてて櫓櫂を海へながしてしまう船もあった。

沖にでていた漁船がすべて港にもどったころ、根室全域におどろきと衝撃がひろがった。根室は蝦夷地でも有数の場所（漁場）である。松前藩の陣屋があり、地元民のほかに藩から派遣された武士もいれば、内地からきている場所請負人もいる。

こうした住人たちは手に手に武器を用意して港にあつまった。恐怖と狼狽が港をおしつつみ、異様な雰囲気がたかまった。

黒い巨大船は悠々と港にちかづいてきた。

港から陣屋の小船がくりだされ、巨大船にちかづいていって停船を命じたが、それを無視するように巨体をゆるがして港に入ってくる。

「オロシアの軍船だ！」

帆柱に高々とかかげた国旗を見て、そうさけんだ者がいた。根室ではじめて見る外国の軍船であった。

十数年まえ、やはりオロシア船が根室の西南の漁港厚岸に来航し、松前藩をとおして幕府に開国と通商をもとめてきたことがある。そのころからオロシアは千島列島づたいに南下をつづけ、千島第三島ウルップ島に植民地を建設しはじめていた。第一島のクナシリはすでに松前藩が支配していたので、第二島のエトロフを境にして、目下日本とオロシアはとなり合っているのである。

衆人の見まもる中で、オロシアの軍船から小船が二隻おろされた。その二隻に乗った十人前後の人影はためらいもみせず港の桟橋にむかって漕ぎ寄せてきた。

陣屋から駆けつけてきた松前藩士がおそるおそるオロシア人をむかえた。

「われわれはオロシア皇帝エカテリーナから日本に向けてつかわされた使節であり、わが名は陸軍中尉アダム・ラックスマンである」

黒い軍服につつんだ長身、白い肌、茶色の髪、青い目の夷狄特有の風貌をした男がおだやかにオロシア語を口にすると、かたわらについていた下士官らしい兵がたどたどしい日本語に通訳した。ラックスマンと名乗った男は六尺はゆうにある大男だが、容貌や態度に荒々しいものはすこしもない。敵意のないことが見てとれて、応対する藩士の顔に安堵がひろがった。年齢はよくわからないが、三十代くらいに見えた。ほかの兵士たちもラックスマンにおとらぬ大男ぞろいだが、態度はいずれもおだやかである。

しかも、一行の中に日本語をはなせる者がいるとわかって、港にあつまった者たちは一様におどろきの声をあげた。

「どうして日本語がわかるのか」

松前藩士熊谷富太郎がたずねた。

「わが船の中に、日本人が二人いる。コーダユーとイソキチという者だ。二人は十年まえ十数人の船乗りとともに漂流して、アリューシャン列島の端にあるアムチトカ島に流れついたのである。それから四年後カムチャツカに上陸し、コーダユーとイソキチはさらにわがオロシアの首都ペテルブルグにおいてエカテリーナ皇帝に拝謁した。このたび女帝の好意によって、わたしがこの二人を日本へおくりとどけにきたしだいである」

ラックスマンは根室来航の意図をそうつげた。説明の筋道は整然としていた。

熊谷らの松前藩士はことの重大さに驚愕したが、さらにその確証をもとめた。

「オロシア皇帝の公の使節であるならば、皇帝からの国書があるはずだが」

「いかにも国書は船に持参してきている。日本皇帝ショウグンへの献上物も託されてきた」

十数年まえ厚岸に来航したオロシア使節はこうした公式の訪礼をいっさいしなかった。このとき幕府は開国と通商の要請をことわり、長崎へ廻航するようつたえると、オロシア船はどうした理由か目的を断念して帰国してしまった。幕府老中らは断固としてオロシア使節の要請をはねつけたのではなかった。オロシアの強大な武力におびえながら及び腰で祖法鎖国をもちだしたところ、意外にあっけなくひきあげていったのが真相であった。

「貴殿がオロシアの公使だとするならば、拙者どもは一存でもって貴殿がたの処遇をきめることはできない。さっそく藩庁へ連絡をとるので、ひとまず船にもどって、藩庁の返事を待ってもらいたい」

松前藩根室駐在士といえども陪臣の下級役人にすぎないのだから、それは当然の返答であった。国書や献上物については無論のこと、コーダユー、イソキチの身柄にしても簡単にうけとるわけにはいかないのだった。たとえ漂流者を好意でおくりとどけてくれたにせよ、鎖国という国の掟がある以上、その定めにしたがわなければならなかった。

「それではわれわれは一応本船へひきあげよう。できるだけはやく返事がききたい」

日本側は、外海からの脅威に対する守りを何一つそなえていないのが現状であった。けれどもラックスマンはオロシア軍艦の武力を背景にして高圧的態度をとるようなことはなかった。

「コーダユー、イソキチの二人も一日も早く故国の土を踏みたいといっている。いい返事を待っている」

といってラックスマンはひとまず部下たちとともに本船へもどっていった。

松前藩士工藤庄右衛門が藩命をうけてラックスマン応接のために根室に到着したのは、一ヵ月後の寛政四年十月三日であった。

ラックスマンは工藤に漂流者の引きわたしとエカテリーナ皇帝からの国書と献上物を日本皇帝へわたしたい旨をあらためて申しのべた。国書の趣旨は十数年まえとおなじく、開国と通商の要請である。

工藤は藩主松前道広にかわって、漂流者を手厚く世話してくれたうえ、わざわざ船を仕立ておくりとどけてくれた皇帝の好意へ感謝をのべると同時に、ラックスマン一行のながい航海にたいしてもねぎらいの言葉をおくった。

だが、松前藩主といえども、江戸幕府によって統轄される一大名にすぎず、国法にかかわるような事柄については幕府の許可なしには何一つおこなえぬ旨をこたえた。したがって漂流者をうけとることも、幕府の指示を待ってからにしていただきたいと丁重に申し入れた。

ラックスマンはあるていどはその答を予期していたようだった。前回の使節が厚岸へおもむいたときの状況と経過を十分知っていたからである。

けれども前回どおりの手順をふんで幕府と折衝しても、いたずらに月日をついやし、そのあげく言を左右にされて、結局むなしい努力におわって帰国する羽目におちいることをラックスマンはおそれていた。

そのため、これから江戸へ廻航し、直接幕府の当局者と交渉したいという内容の親書を藩主松前道広に手わたしてほしいと工藤に申し入れた。松前藩をとおして幕府と交渉していたらとても埒があかぬとみたのだ。

工藤は、藩主への親書は一応おあずかりするが、江戸への廻航は断じておやめねがいたいと強硬に談じ入れた。松前藩が責任をもってオロシア使節の意図を幕府へおつたえするから、その返事が到着するまで根室でお待ちねがいたい、これが松前藩主の意向であるとしてラックスマン一行に釘をさしたのである。

応酬をかさねた末、ラックスマンはやむなく根室で待つことに同意した。いたずらに日本を刺激し、感情を硬化させ、甲羅の中にとじこめてしまうことをおそれたためである。

桁ちがいに強大な武力を擁していながら、オロシア使節があくまでも松前藩の意向を尊重したのは、彼等の日本への開国、通商の熱意が高かったからである。

オロシアがこれほど日本との通商に執着したのは、北太平洋の開発をいそいでいたせいである。このころオロシアはベーリング海を中心とした広大な海域における毛皮獣狩猟業からあがる巨大な利益に、国運を賭けていた。その際に必要な物資をヨーロッパから遠路はこぶのは輸送上も経済上も困難であり、それを日本からもとめようとしたのである。まさに否応なく日本は列強の牙にさらされる歴史的転換期にあった。

仙台城

白衣長身の侍が、なだらかな坂道をゆっくりとのぼっていく。

前方に仙台城大手門が見える。坂の右手は高い石垣、反対側には五色沼と呼ばれるふかい堀が横たわっている。

夏の日差しをうけ、長身の侍はまぶしそうに一度空を見上げて、悠然たる足どりで坂道をのぼっていった。いでたちは着流しである。

容貌には高貴な血筋をおもわせる彫りのふかさがきざまれており、おかしがたい気品が全体をつつんでいる。

正面に大手門の巨大な影がせまった。奥州最大の雄藩伊達六十二万石を象徴する堂々たる入母屋づくり、本瓦葺きの楼門である。大柱と大貫に打った塗金の菊桐章が日の光に燦然とかがやいており、門の脇には総塗りごめの二層の隅櫓が近寄る者を威圧するように睥睨している。

侍の視線は大手門のむこうにある二の丸へそそがれた。

仙台城は青葉山山頂ちかくに本丸をいただく平山城である。本丸は平地より三十数間高い位置にあり、南面は『人馬叶わず』といわれる竜の口の谷がせまり、東は断崖絶壁で広瀬川の急流にのぞんでいる。西と北は深い山林につらなり、もとは戦国名残りの山城として築城された。政治の府としての城にはふさわしくなく、二代藩主伊達忠宗のとき、山腹をきりひらいて二の丸がつくられた。その後山裾に三の丸ができ、最終的に現在の平山城として完成したのである。

大手門の西側にある二の丸が、藩主の居館であり、政庁になっている。

長身の侍が門をくぐるとき、

「これはこれは、最上さま」

門番が丁寧な挨拶をおくった。

藩庁へでむくというのに、その侍は若党一人したがえていない。ふだんから近習や若党をつれあるかないのが彼のならわしなのである。

その侍の風姿風貌も政庁の雰囲気とはいささかそぐわぬ孤高なものがあった。彼が政庁へおもむくことなどここ数年一度もなかった。

最上左近義季――。戦国の奥州が生んだ驍雄出羽五十七万石の藩祖最上義光の血筋を今につたえる人物である。

最上家は義光の死後、家臣たちのはげしい御家騒動によって元和八年八月、あえなく断絶してしまった。わずかに藩主義俊（義光の二男の子）が近江において五千石を給せられて滅亡はまぬがれたが、一族家臣らはちりぢりになった。

伊達藩では政宗が名流最上家の血筋をおしんで、義俊の従兄弟で義光の三男の子義勝を二千石の家禄で召しかかえたのである。左近義季は、その義勝からかぞえて九代目の二十九歳であった。

左近は政庁の玄関を入り、ほかへは目もくれず奉行（他藩における執政）の用部屋へむかった。

用部屋では奉行寒河江兵部が用務を一段落させて、左近のおとずれを待っていた。

寒河江兵部は九年まえ、伊達藩の重鎮である白石城主片倉小十郎の強力な推挙によって三十五歳で奉行の地位につき、藩政をきりまわしてきた。その実績と自信が今の兵部をつくりあげている。内高百万石とも百五十万石ともいわれる奥州の大藩を双肩になった自負が彼をささえている。

三十代のころまではむしろ痩軀であったが、近年はおいおい体に肉がつき、外見にも重職にふさわしい重厚さがみられるようになった。容貌にもかつてのするどさにかわって知謀の影と人間の奥行きを感じさせるゆったりとしたものがあらわれている。年齢も今が男のはたらきざかりである。複雑多岐におよぶ大藩の政治をとりさばいて、財政をきりまわしてゆく才腕と決断にも近年ますますみがきがかかっていた。

兵部が最上左近から手紙をうけとったのは一昨日のことであった。折り入って要談いたしたい旨があるので、時間をいただきたい……というのが手紙の内容であった。

兵部は左近と昵懇であったわけではない。職務の上でもほとんどかかわりはなかった。というよりも兵部は左近にたいして、今まで取りたてていうほどの興味を持ったことはないのである。

左近は名流の血筋にたいして家禄をあたえられているが、その二千石はまったくの捨扶持といっていい。むろん無役である。だから藩士としての役務もない。あるのは由緒と格式だけである。兵部はふだん左近の存在についてさえわすれていた。

ともかく兵部は左近の手紙にたいして『諾』の返事をおくった。

用部屋の廊下は二の丸の庭に面している。その庭のむこうには、城西方のふかい山林がはるかにつらなって見える。

近習が左近の来訪をつげにきた。

やがて、白衣の長身が兵部のまえにしずかにあらわれた。左近の着流し姿をかくべつ意に介さなかったのは、それが彼独自のならわしであることを知っていたからである。

左近は着座して一礼した。

兵部は形式的な挨拶の言葉をはぶいて、
「ご要談とは？」
手みじかに用件をきりあげ、つぎの用務にとりかかるつもりだったのである。
兵部は刈田郡岩岡に要害をもつ五千石の宿老である。これは役職ではなく、代々の身分であるから、奉行職をべつとしても左近にひけをとるような立場ではない。
「では早速ながら」
左近はそういって、懐へ手を入れた。
「お奉行に是非ともご覧になっていただきたい品が我が家の蔵からでてまいりました」
左近は妙なことをいいだし、おもむろに取りだした。
「これでございます」
一軸の巻物である。しかも変哲もないつくりであった。
兵部は手にとるまえにいぶかしんだ。巻物の表面はすでに薄茶色に変色し、上端の部分にかなり虫の食ったあとがあり、中央にもシミが何ヵ所かひろがっている。長い年代をへてきた代物であることが一見してわかる。
「拝見いたそう」
兵部は巻物を受けとり、紐をといた。そしてくるくるとひらいていった。
その中の文字を兵部は目で追った。
読みすすむにしたがい、兵部の目が食い入るように文字に吸いこまれていった。

兵部の顔にははじめ戸惑いの色が浮き、やがて真剣なけわしさにかわっていった。
左近は兵部の態度にじっと視線をそそぎ、読みおわるのを待った。
「この巻物は一体……」
兵部はおもむろに口を切ったが、その声はこころなしかふるえていた。
「わが最上家に先祖重代つたわります品々の中にこれがふくまれておりました。今まではまったく気づきませんでしたが、先日虫干しをいたしましたときに目にとまりました。手にとってひろげましたところ、容易ならざる文字がつらねてあるのにおどろき入ったしだいです。ともかくお奉行にご覧になっていただくべきかとかんがえ、念のために持参いたしました」
左近はおちつきはらってこたえたが、その言葉のとおり、巻物にしたためられている文字の意味は尋常一様のものではなかったのである。
「やくたいもない。何者かのいたずらではあるまいか」
兵部が息苦しさをおし隠してまずそういったのは、できるならば冗談ごとですませたかったからにほかならぬ。だが闇の中へ簡単に葬り去れるほど容易な代物ではないことを、兵部はすぐさまさとった。またそうできぬ理由があることにも気づいていた。
「……」
「最上家に代々つたわってきた物にまちがいはござるまいな」
兵部はあらためてきただした。
「まちがいなく先祖最上義光の孫源五郎義俊のころのものでございます。署名も花押も義俊自身

のものにちがいありません」

「左様か……」

左近の自信にみちた言葉に圧迫され、兵部は太い吐息をもらした。

「義俊の自筆をあらため、筆蹟をたしかめました」

「もしこの内容が真実だとするならば、いやおうなく伊達藩にもかかわりがおよんでこよう。いや、伊達藩の浮沈を左右する大事になるやもしれぬ。さらにわが藩ばかりではなく……」

兵部がその後の言葉をつづけられぬほど、事柄は重大だった。

「おそらく、この巻物は神文誓紙の写しでございましょう。それが代々最上家につたわったものとおもわれます。これによりますれば、同様のものが伊達家にもほかの四家にもつたわっているはずでございます」

「ううむ……」

兵部は絶句して、息ぐるしい沈黙に入った。

両者の沈黙がしばしつづいた。いつも自信にあふれ、決断のはやい兵部の顔にじわじわと脂汗が浮きはじめ、額が蒼黒くひかってきた。

左近は冷やかにそれを見つめた。兵部の体には伊達六十二万石を裁量している男の苦悩がにじんでいるのだ。

「お奉行、この巻物をどうおもわれまするか。ここに書かれておりますことがもし本当だといたしましたら……」

左近は矢で射るような言葉をはなった。それは兵部にとって遠まわしな脅迫となんらかわりなかった。

「本当であろうはずがない。こんなことがおこなわれようわけがない。わしは知らん」

兵部はみなまでいわせず、左近の言葉を断ちきった。

「これが事実無根のことだといたしますと、どうやらわたしは余計なものを持ちこんで、お奉行をおなやませしたようで。申しわけございません」

いいながら左近は巻物をとりあげ、丁寧に紐をまいて自分の懐中におさめた。

「いらざる騒ぎをおこすおそれのある巻物じゃ。とりあつかいについては後日、沙汰いたす。それまで保管には十分注意いたすよう」

義俊いらい最上家につたわるものだけに、ただちに召し上げるには遠慮があった。兵部はそういうだけが精いっぱいであった。

「十分に留意いたします。沙汰をお待ちいたしております。ではお奉行、本日はこれにてご免くだされ」

そう挨拶をのこし、一礼して左近は用部屋を退出した。

左近が政庁の建物をでるとすぐ、

「早見」

兵部はもっとも信頼している近習の早見清右衛門を呼んだ。

「今からすぐに片倉様のところへゆけ。できるだけすみやかにご登城ねがうのだ。火急の事態が

出来いたしたとおつたえしろ」

「ははっ」

早見はうけたまわって用部屋をでていった。

片倉小十郎といえば、伊達藩において代々、家臣筆頭の地位にある重臣中の重臣である。大名級の一万八千石の家禄を食み、藩の南方の押えである白石城主に任じている。初代小十郎景綱が藩祖政宗を薫陶し、奥州の覇者に守りたてていらい、片倉家は藩主家の〈一家〉の地位、格式をもつ伊達藩における別格の家柄なのである。

片倉家の屋敷は大手門の外、広瀬川の淵にのぞんで広大な敷地を占めているが、小十郎は一年のうちおよそ半分くらいしかその屋敷にいない。

これは小十郎だけにかぎらない。伊達藩の重臣はみな自分の領地と、仙台城下にあたえられた屋敷とのあいだを参勤交代している。これは現在では伊達藩においてのみおこなわれている中世の遺風ともいうべき領内統治の形式である。

この藩の重臣たちは、城下の屋敷のほかに領内の各地に要害、館をあたえられ、軍事指揮権もふくめて、その領内の政治を藩主にまかされている。重臣たちは直属の家臣をもっており、彼等に給地をあたえ、年貢は直接領民から徴収する。伊達藩ではこの地方知行を『四十八館制』と呼んでいる。藩内にもう一つの大名制というべきものがもうけられているのである。

早見清右衛門は、片倉小十郎の領地刈田郡白石をめざして馬をとばした。寛政五年五月である——。

中町奉行

江戸は夏だというのに、肌ざむいばかりな天候がもう半月以上つづいている。霖雨のきれ目がほとんどない。

七月に入ってから、晴天は一日もなかった。たまに雨のきれるときはあっても、朝方やんでいるかとおもうと、もう昼ごろから降りだし、夕方あがっていても、翌朝また降りだすといった按配である。

昔から、夏の霖雨は世に凶事のおこる前兆だといいつたえられていた。それでなくてもこの時期に長雨がつづけば、稲作に痛手をこうむることは目にみえている。天明の大飢饉がおこった十年まえと、今年の夏後半に入ってからの気象がよく似ていた。

盂蘭盆会の一夜だけ、ほんの一時、月が顔をのぞかせた。血がしたたりおちるような赤みをおびた月であった。死者の魂をむかえる夜だけに、空の一角にかかった赤い月を見た人々はなんともいえぬ不気味さと恐ろしさにおそわれたものだ。

「これも、世に禍のおこる兆だろう」

「無事にこの年がすぎてくれればいいが」

身分の別なく、人々は会えば大概そのような言葉をささやきかわした。

駿河台稲荷小路にある天地一心流の剣道場の母屋では、赤石百次郎が今朝も朝寝をむさぼりながら、しずかな雨の音をきいていた。眠りからはちょっと前にさめていた。だが、起きあがるにはまだいくらか惜しい気がしていたのである。

雨音にまじって、兄嫁のおなみが朝の掃除をしている物音がきこえる。百次郎はこころよい気分でその音に耳をかたむけながら、おなみの姿態を瞼の裏に妄想していた。ちかごろでは、それが朝おきるときの癖になっている。

目がさめると自然に意識がそちらへうつっていく。今までいく度妄想の中でおなみを我がものにしたかわからない。

現実においても、百次郎さえその気になれば、実現できぬことではなかった。おなみは、手をのばせばもぎ取ることのできる熟れた果実である。それをとがめる者はこの屋敷にいない。

おなみ自身も、内心ではひそかにそれを待っているのかもしれなかった。

兄の千太郎が死んでから、今年で十年たっている。兄が死んだために、百次郎がこの道場をひきついだのだ。そのころ、

『おなみと一緒になっては……』

という声も親類や知人たちの中にあったが、とかくしているうちに時機がすぎ去り、年月がながれてしまった。

初々しい若妻からいきなり未亡人になったおなみも、今年で三十路に入った。けれども兄の嫁

だったころよりも、昨今のほうがずっと体に脂がのってうつくしくなっている。おもいがけぬときに色気を感じて当惑するときがしばしばあった。

兄が死んだ当時、百次郎は道楽ざかりで、放蕩無頼のかぎりをつくしていた。一人の女と切れると、すぐつぎができるといったころだったから、兄嫁をかくべつ女として意識したことはなかった。

そんなに身持ちのわるかった百次郎だけに、

『腕だけよくても、道場主には……』

とあやぶむ声が親類や門人たちの中にもあった。外であそびほうけていたころも、剣術の腕前は兄より上……、だと噂されていたのである。

ところが道場主になって年月をへてみると、いつのまにか自然とそれらしさが身にそなわってきた。しだいにあそんでいる時間がすくなくなり、道場にでる間がながくなっていった。しかも稽古をつけるときの真剣さがかわってきた。

軽さが影をひそめ、年齢と立場相応の風格がそれにともなってでてきた。人あたりのよさは持ち前のものだったので、道場の評判はおちるどころか、数年のうちに兄のころよりも門人がふえだし、今では駿河台近辺で一番の道場になっている。

しずかな足音がちかづいてきた。かすかなときめきをおぼえながら、百次郎はそれをきいた。

足音は部屋の前でとまった。

「百次郎さま」

兄嫁でも百次郎のほうが三つ年上なのである。

毎朝、おなみの声で百次郎はおきあがる。おこしにくるまでは床から立たないのである。彼女はいつも部屋の外から襖ごしに声をかけてくる。寝入ったふりをして返事をしないでいると、襖をあけて入ってくるときもある。

それなりの抵抗は予想されるところだが、おなみを夜具の中に引きずりこむことは簡単である。

「遠藤さまがおもどりになりましたよ」

おなみがつげた。

「なんだ、源之助か」

遠藤源之助は住みこみの門人であるが、この三日ばかり麻布狸穴にある実家にもどっていた。源之助がもどってきたからといって、尋常ならばわざわざ知らせにくる必要はないのである。

「百次郎さまにお話があるそうです」

「妙なやつだな……。すぐにいこう」

こたえてから、百次郎も源之助に話があることをおもいだした。

源之助は大柄な青年である。彼は玄関の脇にあたえられた部屋で、正座をして待っていた。

「只今もどりました」

ふだんはきびきびした若者だが、源之助の様子がいつになくかたい。今はかくべつだが、いつも折り目ただしく、責任感がつよく、几帳面な性格である。稽古もおどろくほど熱心であり、も

ともと筋がいいので、若いながら道場の師範代をつとめているのだ。駿河台近辺の道場で彼を打ちやぶる腕前の者はいなかった。

「源之助、どうした。じつはおれも話があるんだ」

「先におっしゃってくださいませ。赤石様のお話を先にうかがいます」

百次郎は気楽にきりだすつもりだったが、源之助の様子には切迫した雰囲気がある。

「いや、おまえ先にいえ」

百次郎の用件は私事であり、急を要さない。

「では、先に申しあげます。いそいでお耳に入れておきたいことがもちあがりました。松平越中守様が、昨夕、辞任をなさったそうでございます」

「なにっ、越中守様が……」

その声の大きさが百次郎のおどろきを物語っていた。松平越中守といえば老中筆頭松平定信のことだ。

「実家のちかくに、お城のご本丸につとめるお坊主が住んでおります。実家とは懇意にしており、その者の口からききましたので、まちがいありません」

「ううむ……」

「辞任なされましたのは昨夕だそうです。今日のうちに江戸中に知れわたるでしょう」

「信じられぬ」

「わたしも、はじめは信じられませんでした。お城では、ほかのご老中や若年寄も寝耳に水だっ

たとか」

源之助が早朝駆けつけてきて報告するだけの価値は十分あることだった。

「どうしてそんなことに……。理由がわからん」

「ご本丸でも、誰しもわからぬと噂しておったそうですよ」

「辞任なさる理由がないではないか」

「さようでございます。今越中守様がお辞めになられては、幕閣は屋台骨をうしなうことになるでしょう。ほかのご老中は今まで飾りものにすぎませんでしたから」

「解せぬ……」

「江戸中がびっくりいたしましょうなあ」

定信は老中筆頭の地位にあるばかりでなく、将軍補佐というかくべつの立場にある。幕府でかつてこの地位についたのは保科正之だけである。

今の幕閣は定信一人にささえられているといってもいい。定信は八代将軍吉宗を祖父にもち、御三卿田安宗武の子に生まれた。六年まえに将軍になった家斉とはもっともちかい親類である。

しかも幼少のころから頭脳明晰、意志強固と評され、養子に入った先の奥州白河十一万石松平家で藩政にめざましい治績をのこし、若くして名君と呼ばれた。それを買われて、六年まえ老中に推され、前代の老中田沼意次によってみだされた幕府政治の立てなおしをはかり、強力な改革を推進してきた。放漫財政を緊縮し、頽廃した世の風紀をただし、文武の奨励をおこなって、政治を享保年間の吉宗時代へもどそうと必死のはたらきをつづけてきた。崩壊の兆がみえてきた武

家政治の再建をはかるために、ほとんど全権をあたえられて登場したのが定信だったのである。

定信が推しすすめてきた改革は着々と効果をあらわしていたが、いまだ途上にある。完成させるには、まだ数年はかかるものとみられていた。

「越中守様は今年まだ三十六歳のはずだ。これからというご年齢ではないか。隠退すべきお年ではない」

「越中守様には責めを負って辞めなければならぬような失政はありませんし、幕閣の中に政敵すらみあたりません。病におかされたのでもないそうです。まったくご自分のおかんがえからお辞めになったんでしょう」

「おかしいな、源之助……」

百次郎でなくても、不審をいだくところである。

「いずれ真相はわかるでしょうが……、越中守様のあとは松平伊豆守様が引きつがれるとか……」

「そうか……」

百次郎はこれから世の中がどううごいていくかについてかんがえた。

定信の後をうけるという松平伊豆守信明は三河吉田藩主で、定信に抜擢されて老中になった人物である。そのほか松平和泉守乗完、本多弾正少弼忠籌、戸田采女正氏教、太田備中守資愛の老中たちはいずれも定信党であり、定信の改革を手だすけしてきた人物ばかりである。彼等が一人も更迭されないところからうかがうと、政治がこれから大きくかわるとはかんがえられなかった。おそらく、今後は定信の政治を踏襲することになるのだろう。

「もし途中でなげだしたのだとしたら、越中守様は大きなそしりをおうけになるでしょう。ご改革はこれからが難所にかかるところです。まして昨年は、蝦夷地にオロシアの船がまいっております。海の守り、とくに北の海の守りをどうするかという難問がもちあがっております。その最中に老中をおやめになるのは、尻に帆かけて逃げだしたといわれても申しひらきはなりませんでしょう」

「源之助のいうとおりだ」

源之助は顔や態度にすぐ色をだす浮薄な男ではないが、根が一本気なだけに、いったんいいだすと百次郎以上のはげしい言葉を口にした。しかもおもいつめるととことんやりぬく男である。

「ところで、赤石様。お話があるとおっしゃりましたが」

源之助が話題をかえた。

「うむ」

「おきかせください」

「いや、又にしよう。急を要することではない」

「さようでございますか」

松平定信辞任という衝撃的なしらせをきいたあとだけに、百次郎は自分の個人的な事柄を今源之助にうちあける意欲をうしなったのだ。

朝稽古の門人たちがぼつぼつ道場のほうへきている気配がつたわってきた。

そのとき、若党の多津吉が顔をのぞかせた。

「旦那さま、柳橋の青柳から伝兵衛という者が手紙を持ってきておりますが……」

〈青柳〉は柳橋の船宿であり、伝兵衛は青柳に古くからいる船頭である。

伝兵衛が使いにきたときいて、百次郎は少々おもいあたるものがあった。源之助の眸にも、かすかな光がかすめた。

二人は一瞬、顔を見合った。

「よし、いこう」

百次郎は玄関へでていった。

三十代半ばの男が空っ脛にちびた雪駄をつっかけて、玄関先でひかえている。

「ご苦労だったな」

声をかけて手紙をうけとると、

「返事をいただいてこいとのことでございます」

伝兵衛は寡黙な感じの男で、それ以上のことは口にしなかった。

百次郎は封をひらいた。

今夕六つ　富田屋で待つ　うら

手紙の文字はたったそれだけである。

うら、は差出人の署名である。もう一度読んで、

「わかった。承知したとつたえてくれ」
百次郎は伝兵衛に返事を託した。
「そのようにおつたえいたします」
伝兵衛は辞儀をして、そのまま去っていった。

富田屋は大川端から一筋入った中通りにある。そこは両国の船宿がたちならぶ一画の裏手である。
間口二間半の居酒屋だ。大きくもなければ、小さすぎもしない。おなじくらいの大きさの居酒屋や食べ物屋がこのあたりに立ちならんでいる。
百次郎は暖簾をくぐって入っていった。店の中には縁台が五つばかりおかれ、その奥に小部屋が二つある。客がもう七、八人入っていた。
女将のお蝶がさりげない視線をおくってきた。どんな人ごみの中にいてもすぐ目だつ渋皮のむけた女である。立縞の着物を粋に着こなしており、すらりとした柳腰に色っぽさがただよっている。
お蝶の眸がわらった。そして、右方の小部屋を合図した。
四畳半の小部屋にあがると小女が銚子と盃とつきだしをはこんできた。まだ六つ（六時）には少々間があるので、相手はきていない。
百次郎は独酌ではじめた。あけはなった窓から、雨あがりの川風が吹きこんでくる。柳橋がちかいので、つややかな三弦の音色と唄声がきこえてきた。巷の喧騒も耳に入るが、百次郎はうるさいところでも一向かまわず酒をたのしむことができるのである。

「百さん、お見限りだわね」
といって、やがてお蝶が入ってきて、体がぶつかるほどちかづいて酌をはじめた。
百次郎は、四年ばかりまえまでお蝶といい仲であった。道楽をほとんどやめたころお蝶と知り合い、二人は深い仲になったのだ。
知り合ったころのお蝶は、水茶屋の酌取女をやっていた。酌取女といえば、娼婦におちる一歩手前の泥水稼業といってもいいくらいのものである。けれども泥水の中にどっぷりとつかっていながらうつくしさをうしなわないお蝶に、百次郎は惚れた。この女とならば身をほろぼしても悔いはないとまで真剣に惚れた時期が二年ばかりつづいた。だが、突然わかれのときがきた。お蝶は百次郎を裏切って、前からいい寄ってきていた商家の大旦那の妾になってしまったのだ。
お蝶は奥州の貧家の生まれで、少女のころ江戸に売られてきたのだが、故郷の両親への仕送りのためにそのときどうしても大金が入り用だった。百次郎のまえから一度姿を消したお蝶がふたたび彼のまえにあらわれたのは、それから三年後のことだった。大旦那が死んで、お蝶はそのときにもらった金を元手にして居酒屋の女将になったのである。知り合った当座のころのような、いい交際がもう一度二人のあいだに復活した。それが今までつづいている。
体のまじわりは切れたままだが、一度うしなわれてふたたびうまれた交際だけに、かえって二人のあいだのつながりは根づよいものがある。百次郎にとってお蝶はただ一人の気のおけない女

であった。

「店がいそがしいのじゃないか。おれのことは気にしないでくれ」

百次郎がいうと、やがてお蝶はもどっていった。

浦上弥太郎が姿をあらわしたのは、四半刻ほどたってからである。手紙の署名にうらとあったその人物だ。

浦上は一見して大身の旗本とわかる身なりをしている。年は人生の円熟期に足を踏み入れた四十三歳である。

浦上をむかえて、百次郎はにわかに姿勢をただし、まるで部下がきびしい上役に接するときのように両手をついた。

「ながらくご無沙汰をいたしております。浦上様にはご健勝のことと存じあげます」

とっさに四角四面な言葉を口にすると、

「赤石、おまえらしくもないかたい挨拶はやめろ。ここは居酒屋だ。まずは気楽にいこう」

浦上は苦笑をうかべつつ、百次郎の態度をあらためさせた。

「そうおっしゃっていただけると、はなはだ幸せにございます。遠慮なく……」

そういって、百次郎は盃の酒をぐいと一息にのみほした。

浦上弥太郎は旗本小普請三千石。

『万年無役……』

と周囲から陰口をたたかれている人物である。だが浦上は、そんな世間体はいっこうに気にしていないようだ。この男の暗い顔や弱音をはいたところを、百次郎は一度もみたことがなかった。

しかも浦上ほど世間の評判と実際の姿がことなる男はめずらしい。百次郎は今まで浦上を無能よばわりする声を数かぎりなくきいてきたが、実際はこの男ほど有能で、力のある男もまれなのである。百次郎が知っている浦上の力は本当の力の数分の一くらいかもしれないのだ。

「お奉行」

百次郎は盃をあけてから、浦上へ声をかけた。

「なんだ、赤石」

世間にはまったく知られていないが、浦上は幕府の三奉行（寺社奉行、町奉行、勘定奉行）におとらぬ、権力と地位を持っている。小普請は浦上のいつわりの姿である。世間をあざむくためである。

江戸にはかつて（元禄十五年から享保四年まで十七年間）、南、北、中、の三つの町奉行があった。三組が月番交替でお役をつとめていた。機構も人員もほとんどかわりなかった。

八代将軍吉宗は紀州藩主から将軍になって、幕府の機構を簡略にするため、常盤橋御門内にあった中町奉行を廃止して、南と北だけをのこした、と世間ではおもわれている。ところが実際は、中町奉行は廃止されずに今まで七十五年間もずっと存在しつづけていた。地下にもぐったにすぎないのである。

中町奉行は機構と人員を縮小し、少数精鋭の秘密機関になった。奉行自身の屋敷を役宅とし、

江戸府内ばかりでなく、諸国にまたがる治安維持と防犯の任務を負って、隠密活動をおこなっているのである。

赤石家は代々、中町奉行与力をつとめている。兄千太郎の死によって、百次郎が役職と表むきの家業である天地一心流の道場をついだのである。

中町奉行の与力、同心が南北町奉行のそれとちがうのは、全員表むきの家業を持っていることである。奉行自身と同様、与力、同心らも役職を公にしてはいないのだ。平常は表むきの家業にはたらきながら、一朝事がおこったとき、奉行の密命をうけて活動を開始する。

与力、同心らはいずれも一騎当千である。きたえぬかれた武芸を身につけている。幼少のころから、将来秘密機関の職につくべく父兄に特別の薫陶をうけているのである。武芸一般のきびしい稽古をつみ、さらに特種技能の修得をも義務づけられている。

「今日一日で世の中がにわかにさわがしくなってまいりました。越中守様がお役をおひきになったのはただ事ではない、なにかある、とうがった見方をする者も世間にはいるようでございます」

定信辞任の噂はたった一日のうちに、江戸中を目まぐるしくはしりぬけていたのである。百次郎は今夕浦上に呼ばれたのは、当然そのことにかかわりがあるとおもった。

彼はかねてから武芸廻国の旅に一年くらいのあいだ出たいとかんがえていた。今朝、源之助にいおうとしていいださなかったことはそれである。道場主ぐらしを約十年つづけて、ちかごろはそれにもようやく慣れ、道場の運営や門人の教育も順調にはこんでいる。この機会に、今一度武芸の腕をきたえなおそうと武芸修行をおもいたったのである。

それに百次郎は昨今、おなみとのくらしに少々息ぐるしさをおぼえていた。うつくしい兄嫁との微妙な感情の交流をたのしんでいながら、やはり一方では気疲れを感じていたのである。おなみのほうでも表面はどうあれ、本音のところは少々くたびれてきたのではないかとおもんぱかった。

ところが、浦上からの呼びだしによって、武芸廻国は延期のやむなきにいたったのである。

「越中守様は老中をおやめになるにあたって、ただ一つご命令を置き土産にのこされた」

浦上はしずかにいいだした。

百次郎はただごとでないのを察して、おのずから粛然たる気持になった。

「そのご命令を、今おまえに申しつたえる」

「わたくしに……」

にわかに百次郎は姿勢をあらためた。

「つつしんでうけたまわれ」

「ははっ」

「陸奥に、ただならぬ不穏なうごきがおこっておる。越中守様は老中をおやめになるに際して、たった一つ、そのままにしておくにはこころのこりじゃとおおせられ、わしにご下命があった」

「……」

「奥州伊達藩の動静をさぐれ。その目的を仔細にさぐりだして、伊達藩の策動を封じよ。赤石百

次郎にそのはたらきを命ず。いかなる手立をもってしてもやりとげよ」

「ははっ」

百次郎は膳のまえに両手をつき、頭をたれてうけたまわった。老中松平定信から直接命令をうけたとおなじ厳粛な気持であった。かつてこれほど重大な用命をうけた経験はなかった。

「命を的にしたはたらきをいたせ。と申しても、兄の二の舞いだけは踏むな。死んでしまっては、元も子もない」

といって浦上はにやりと顔をくずした。目的は達せよ、命はおとすな、というもっともむつかしい命令をくだしたのだ。一騎当千のよりすぐりの部下にのみくだせる命令である。

（奥州伊達……）

という浦上の言葉が百次郎の胸にずしりとした重みをもってひびいた。

「うけたまわりました。まず伊達藩の不穏な動向についてさぐりだしまして、逐一言上申しあげます」

「うむ、越中守様のご命令である」

浦上は念をおした。

奥州伊達、のひびきは百次郎にとってかくべつなものがある。兄千太郎が十年まえ密命によって潜入していったところも奥州であった。

当人や第三者が潜入地をあかしたわけではないが、いつとはなく自然にそう推察される事柄がかさなって、百次郎は確信にいたったのである。

彼が武芸廻国をこころざしたのも、奥州路をくだって、〈秘境〉といわれる陸奥伊達領へ足を踏み入れることが目的の一つだった。その私的な目的が、公的な目的によって達成されるかもしれなかった。

「与力、同心の応援は、おまえの申し出に応じてだそう。入り用なだけ申すがいい」

浦上はそうつけくわえた。

伊達の要塞

江戸の中心は江戸城である。江戸城は本城が東西六町、南北七町。西の丸は東西四町、南北八町。これに吹上をくわえると総面積がおよそ三十万坪。外郭をふくめると、周囲四里におよぶ。

南は江戸湾、東は隅田川、そして西北をつらねる総構えは浅草橋からおこり、本郷、小石川、牛込、市ケ谷、四谷、赤坂、虎ノ門にいたり、内へ内へと螺旋状に入っており、こういう築城法はほかに類例がない。しかもこの線上にいわゆる三十六見附と呼ばれる城門がもうけられている。城橋は外堀を合わせると三十、三重櫓六、二重櫓十、単層櫓四、多門二十六という周到にして堅固きわまりない大城郭である。

市中の中央は日本橋である。ここを中心にして、外濠以内をのぞいた外を総称して江戸四里四

方八百八町という。東は両国川、西は外濠、北は筋違橋、神田川、南は新橋の内を下町と通称し、それ以外を場末と呼ぶ。さらにそのうち麻布、赤坂、青山、四谷、市ケ谷、小石川、駒込、本郷のあたりを山の手という。

この大江戸を一間四方に縮小した絵図面が、部屋のほぼ中央にひろげられている。絵図面をとりかこむようにして、四人の男たちが真剣な眼差をそそいでいた。

しかもこの絵図面には朱筆で囲みをつけた屋敷が数ヵ所あった。芝口三丁目の海手にある伊達藩上屋敷。そのすぐちかくにある愛宕下大名小路の伊達藩中屋敷。本所仙台堀の同藩下屋敷。高輪のおなじく下屋敷。江戸城下にある伊達藩の屋敷はこの四つである。それに高輪の東禅寺。これは同藩の菩提寺である。

四人の男たちは、富田屋の二階の六畳間にこもってこれまで半日ちかくものあいだ、この絵図面を中心にして熱心な論議をつづけていた。

その間に一度、お蝶がつくってくれた中食のにぎり飯四人前を一人がとりにいった。それ以外は各人が一、二度ずつ小用で階下の厠へおりただけで、部屋の出入りはなかった。

部屋の一番上座にすわっているのが百次郎で、そのとなりに源之助がいる。あとの二人は青柳の船頭さみだれの伝兵衛と、堺町中村座の表方をやっている鎌鼬の金次である。

百次郎以外の三人は、いずれも中町奉行同心である。三人とも百次郎の直接の配下なのだ。

冷夏とはいえ、四人の熱気と、部屋をしめきっているため、中は息ぐるしいほど蒸しあつくなっている。富田屋の二階は市井でもっとも安全な場所であるが、万一の盗聴をおそれて、二階

には何者も寄せつけなかった。これはお蝶といえども例外ではない。

この六畳間の中で、伊達藩の秘密をあばく対策がねられているのだ。

源之助、伝兵衛、金次の三人はひさびさに用命がくだって、気持がはやりにはやっていた。百次郎は彼らをおさえるのに苦心していた。中町奉行の与力、同心は日常の勤務がないため、奉行の命令さえこうむらなければ、半年でも一年でも任務にたずさわらぬことになる。しかし一度び命令がくだれば、一年であろうが二年であろうが、ことが解決するまで命をけずるようなはたらきをしなければならぬ。

南北町奉行所の与力、同心よりも、比較にならぬほど過酷な仕事である。命令をうけて他国へ潜入し、ふたたびもどってこない例は赤石千太郎のほかにもかぞえることができる。そうした場合は遺骨や遺品すらもどってこぬ。

「江戸で伊達藩をさぐるには、手はじめにこの四つの屋敷からとっかかるべきだろう。屋敷をあたったうえで、内部の人間たちにさぐりを入れていこう」

百次郎がいうと、三人はいずれもうなずいた。さぐる対象はあくまでも人間だが、その人間たちのいる場所を最初にたしかめておくことが大切であった。その場所から秘密の端緒をつかめることがしばしばある。

「百さん、やり方についていわしてもらいます。ここにいる四人が一つずつ持ち分をきめてさぐるのは、とてもよい方法だとはおもえません」

「そうだな」

「だからといって四人がかりで順ぐりにさぐっていくのもとんと能のないはなしだ。二人ずつ組んでやるのはどんなもんでしょうかね」

そういったのは伝兵衛である。用心のために一同はざっくばらんな市井の言葉をつかっている。

伝兵衛は三十代半ばということだが、正確な年齢は百次郎も知らない。本名は山室伝右衛門。忍びの術に熟達しており、かつて修業のために命がけで江戸城大奥に潜入したこともあるという強者である。

「それはいいかんがえだ」

源之助がまず同調した。

百次郎も異論はなかった。

「誰が誰とくんだって大差あるまい。正面にすわっている者とくんじゃあどうか」

百次郎は無造作にいった。彼の前には伝兵衛がすわっている。

源之助の正面に金次がいる。

ほかの三人もたがいにうなずき合った。百次郎と伝兵衛、源之助と金次の組み合わせがこのときにきまった。

そしてこの日は、あと半刻（一時間）ばかりで四人は散会し、百次郎だけがその部屋にのこった。

百次郎は一人になってから、ふたたび絵図面に見入った。そして朱筆でかこった屋敷に飽くことなく視線をそそぎつづけた。

大名屋敷というものは、諸大名の江戸における宿泊所、出先機関というばかりではない。本来は、将軍が諸大名から人質をとるためにもうけた屋敷なのである。

だから諸大名は一年交替の参勤交代が命じられており、藩主の妻子はつねに江戸屋敷での生活が義務づけられている。幕府からみれば、諸大名の江戸屋敷は格子をとりはずした獄舎だといってもいいのである。

だがしかし、その獄舎の中で穏かならぬ画策が練られているとすれば、なにはさておいても未然にとりつぶさなければならぬ。その画策がどのようなものであるかつきとめることが必要であった。

（奥州伊達に、なにがおこっている……？）

奥州陸奥には、昔から多くの謎がある。その地は、古来中央の力がおよばぬ秘境であった。白河の関以北については、今もってわからないところが数々秘められている。

『針のおちる音さえ聞きとる』

といわれるとぎすまされた幕府隠密の耳をもってしても、陸奥についてはわからぬことが多すぎるのだ。奥州諸国は、いまだに知られざる国々なのである。

百次郎も奥州の国々についてよくは知らぬ。それだけに、尽きぬ興味と好奇心を以前からいだいていた。

東北へむかって長くのびた、自然条件の過酷な地方。昔、蝦夷とよばれた未開、荒涼の地。は

てしらぬ最果ての、政治が尽き、文化はてた、人情のことなる世界……。百次郎がおもいうかべる奥州は、そういった漠然とした世界である。

その未知の国伊達に、容易ならぬうごきが渦まいていると越中守は浦上にあかした。越中守はすでになんらかの確証をつかんでいるようだ。それはこれからの発展によっては、幕府を震撼させるものになるかもしれぬ。

伊達藩の策動は今にはじまったことではない、と百次郎はおもった。彼のおもいは過去へさかのぼっていった。十年まえ、兄が密命をうけて潜入した事件とかならずどこかでつながりを持っているだろうとかんがえた。

伊達藩の秘密をあばくことは、兄の死にまつわる謎を解くことになるかもしれぬ。伊達藩の秘密は江戸にいてさぐるだけではあばきようのないことである。いずれにしろ百次郎自身も兄と同様の任務によって、最果ての国へむかって旅をしていくことは避けられまいとおもった。

興味や好奇心とともに、荒ぶる闘志が五体に湧きおこってきた。今すぐにでも奥州へむかって旅立ちたい衝動にかられ、おもわず固いこぶしをつくった。陸奥というところは、人を招き寄せてやまぬ魔力を秘めたところである。

小雨あがりの翌朝、百次郎は平常の姿で青柳の桟橋から小船にのった。柳橋あたりの船宿や料理茶屋は神田川に面した背戸に、自分の店の船着場を持っている。

「陸をいくより、水の上をいったほうがずっと手間がかかりません」

そういって小船に乗りこみ、竿をとったのは、伝兵衛である。

「おまえの腕が、こんなときには役立つな」

百次郎は世辞をいって、胴の間に腰をおろした。

ひと突っ張りで伝兵衛は船を河岸からはなした。

ぐぐっ……と船はうごきだした。そして、もう一つ突っ張って船を川中へだした。

しばらくいったところで、竿を櫓に持ちかえた。

竿は三年、櫓は三月……、というように櫓は素人でもちょっと手加減をおぼえればあつかうのに造作はないが、竿となると年季がかかる。伝兵衛は二十歳から船頭ぐらしをはじめているので、もう年季は十数年になる。

船は大川へでて、両国橋をくぐった。このあたりなら日に何度ものぼりくだりしているので、伝兵衛は目をつぶっていても船をあやつることができるのだ。

なんでこころがはずむのか、めずらしく伝兵衛の口からしぶい船頭唄がながれだした。

へ潮来出島の真菰の中に
　あやめ咲くとはしおらしや……

かつて利根川の水郷地帯でうたわれていたものがひろまって、ちかごろは吉原潮来、深川潮来などと呼ばれて大川筋の船頭にうたわれている。伝兵衛も無性に闘志をかきたてられているのだ

ろう。

「唄がでるのは今のうちだぜ。そのうちに血ヘドを吐くような毎日がやってくるだろうよ。え、伝さん」

百次郎もふるいたってくるこころのうちとは裏腹に、かるい言葉を投げた。

船は新大橋、永代をくぐって河口へでた。湾内はおだやかでも、さすがに波がある。

櫓のさばきもあざやかに、船は沿岸をすすんだ。

だいぶいったところで、浜御殿の白い石塀が前方にみえてきた。浜御殿は昔は将軍家の御鷹場であったが、のちに紀州家の浜屋敷となり、それから甲府宰相家の下屋敷にうつって、さらに現在将軍家の御用屋敷になっている。江戸湾につきでた六万五千坪の長方形の敷地である。庭園や畑がつくられたり、夏場はここから大花火が打ち上げられたりするのである。

浜御殿の水門のまえを通過し、船は南の角地を大きくまわり、芝口海手の岸についた。そこに会津藩松平肥後守の中屋敷があった。そのとなりが伊達藩上屋敷である。両人が目ざすところは無論ここだ。

伊達藩上屋敷は、真後を浜御殿と接し、左右を会津藩と脇坂淡路守の屋敷にはさまれ、表は芝口三丁目と源助町に面している。百次郎と伝兵衛は上屋敷の周囲をゆっくりとまわりはじめた。

三方は道路であるが、脇坂家の屋敷とは塀境なので、この字型にまわることになる。二万坪はゆうにある大屋敷である。高い石塀が切り立つように周囲をめぐっている。

「おや……？」

そのとき伝兵衛がちいさな声をもらした。

左右の両屋敷の塀にくらべると、二尺ばかり高くなっている。わずか二尺くらいのことだが、それは百次郎の目にもやや奇異にうつった。ふだんは大名屋敷の塀の高さなど気にしたこともなかったが、今あらためて伊達の屋敷をながめて、その二尺の差の中に伊達藩のなんらかの意図があるようにおもえた。

塀のところどころに息抜きの穴があいている。どこにでもあるものだが、その穴の高さも妙に気になった。百次郎は銃眼を想像した。

三方の塀の、門長屋からはずれた要所々々に、それはさりげなくあいている。平常のときならば見すごしたであろうが、伝兵衛もその息抜きに興味をしめしていた。

伝兵衛の外見を他人が見れば、大名屋敷の風景に目をやりながらゆっくり散歩をたのしんでいる風情だが、百次郎から見れば目の色がちがっているのがわかる。船をこぎながら船頭唄をうたっていたときのおだやかさは消えていた。するどい観察を秘めた眼差が、塀とその内側をうかがっている。以前にも何度か、伝兵衛のこういう目をみたことがある。

（忍者の目だ）

と百次郎はおもった。

塀の内側は森閑としている。物音はなにもきこえてこぬ。百次郎は五感をとぎすまして、内部を観察しようとした。

中は陸奥伊達領なのである。まだ見たことのない北の国陸奥の冷え冷えとした空気に息抜きの

穴をつうじてふれた気がした。石塀一枚をへだてた内と外は世界がまったくことなるのだ。

門長屋の一角から見張りの番士の視線が百次郎と伝兵衛にそそがれているような錯覚をおぼえた。やがてその視線にかわって、鉄砲の銃口か弓矢にねらわれる日がちかい将来やってくるような予感におそわれだした。

百次郎と伝兵衛は通行人をよそおって、屋敷の角をまがった。まがったところに辻番がある。これは伊達藩がおいている辻番である。まえに伊達家の紋を入れた台提灯がおいてある。間口は約二間、奥行九尺のごく普通のものだ。戸口があいているので、中に袴の腿立ちをとった四、五人の番の者がつめているのが見える。六尺棒を持っている者もいる。突棒、刺股、袖搦を飾りたて、松明、捕縄がれいれいしく用意されているのもわかった。

辻番はその武家屋敷周囲の路上における警察権を持っている。さらに喧嘩、酔っぱらい、病人、行きだおれ、捨て子の始末までおこなうのが役目である。伊達藩の辻番は一見したところでは、とくに他所とかわってはいなかった。

しばらくいくと、上屋敷の表門のまえにでた。菖蒲革の模様の袴をはいた門番がつめている。鉄鋲を打ったいかめしい門が閉じてある。まさに外界と屋敷内とをこの門扉一枚が隔絶しているのである。城門とみてもしかるべきであった。

門の正面まできたとき、不意にぎいっと音がして、はからずも門の脇の潜りがひらいた。

（……！）

百次郎は無意識にさりげなく潜りのほうへ身をそなえた。横をあるいている伝兵衛はさすがに

訓練のたまものか、緊張感をさとらせなかった。

潜りからは、用人風の中年の藩士があらわれた。

百次郎と視線が合ったが、すぐにおたがいの視線がはなれた。相手にはことさら百次郎と伝兵衛を警戒する様子も見えなかった。偶然、屋敷からでてきただけのようだ。

用人風の武士は、百次郎らがきた方向へあるき去っていった。

潜りがしまるまでのわずかなあいだに、百次郎は屋敷の内部へ視線をそそいだ。この偶然の好機に、できるかぎり内部の様子をうかがおうとした。

（や……？）

とっさに百次郎は疑問をいだいた。

（玄関がない）

通常どんな屋敷でも、門の正面に玄関がある。ところが、見えたのは植込と青竹を組んだ塀だけであった。

一瞬、わけがわからなかったが、すぐにおもいあたった。門から玄関へいたるまでがかなりの角度にまがっているのだ。

数寄屋づくりの屋敷などには、ときにこうした趣向がある。

だが、伊達藩上屋敷の場合は、そんな粋な目的であろうはずがない。城や忍者屋敷などの場合と同様、表門から侵入してきた敵を玄関にただちに突入させぬための配慮である。さらに門から玄関へ矢を射こまれぬための工夫であろう。兵法上、戦略上の見地からそういう工夫がこらされ

ているのだ。一見しただけではわからぬように、庭園の趣向に似せてきびしい配慮がおこなわれている。

こんな用意をほどこした大名屋敷がほかにあるだろうか。この瞬間に、百次郎は伊達藩のおそろしさと周到さを垣間みた気がした。そうおもって屋敷をながめると、抜け穴だの隠し座敷、隠し階段、落し懸、どんでん返し、蔀鉄格子……などさまざまな工夫が内部にほどこされているような気がした。

「おそろしい屋敷じゃありませんか」

やや遠ざかってから、伝兵衛がうめくようにいった。

「大変な屋敷だな」

「これじゃまるで要塞ですよ。これだけのそなえをもった屋敷なら、一万の軍勢にもし囲まれたって、十日やそこらは十分ささえられます」

伝兵衛の言葉には感嘆と驚異のひびきがこもっている。

「伝兵衛、この屋敷にしのびこむことができるかね」

百次郎はこころみにたずねた。

「できないことはありませんよ。けれどもきっと命がけでしょうね。江戸城大奥のほうが楽かもしれませんよ」

伝兵衛はそうこたえた。

幕府では人質をおくためにこしらえさせた屋敷だが、伊達の上屋敷にかぎっていうなら、江戸城下にもうけた伊達藩の要塞をなしているのだ。中屋敷や下屋敷などもこれと同様だとすれば、府内に伊達の要塞が四ヵ所もあることになる。

入り鉄砲、出女

木挽町の芝居街に森田座の櫓があがらなくなってから、すでに久しい年月がたっている。

かわって控え櫓の河原崎座の櫓と名題看板が近年ずっとあがっている。岩井半四郎の〈潤色八百屋お七〉が大当りをとり、近来まれなほどの長期興行をつづけているのだ。五月朔日が初日だが、土用休みをあいだにはさんで七月十三日からふたたびおなじ狂言で興行に入ってからも、以前の客足がすこしもおとろえなかった。

半四郎はこの大入りをよろこんで、小石川円乗寺にあるお七の墓を再建し、さらに供養塔を建てたといわれている。この大当りで河原崎座周囲の芝居茶屋やほかの商家なども繁昌し、木挽町全体がにぎわい、ウケに入っていた。

さいぜんから百次郎は三十間堀川にかかる一ノ橋の橋詰にたたずんで、河原崎座の木戸口のほうをそれとなく見やっていた。

四半刻（三十分）ちかくたったころ、一人の大身旗本ふうの男がでてきた。男は橋詰のほうに

ちかづいてきて、一瞬百次郎と視線を合わした。

浦上弥太郎である。だが、二人は言葉もかわさぬばかりか、すぐに視線をそらした。

浦上は橋詰のところから築地の方向へまがった。まっすぐに東へむかえば、海岸へでる。その手前に西本願寺がある。

浦上は西本願寺の総門のまえをとおりすぎ、海手まできた。海手には御三卿一橋家の下屋敷と、浴恩園がならんでいる。

浦上の姿は浴恩園へ吸いこまれていった。

ややあってから、百次郎も門番に一揖して浴恩園に入っていった。百次郎がここに足を踏み入れるのははじめてだった。

「こちらへ」

門番の一人がひくい声でいって、案内に立った。

外観は大名屋敷のつくりながら、一歩中へ入ると、そうでないのがすぐにわかる。いうならば屋敷全体が広大な数寄屋づくりなのである。

築地一帯は、江戸でも有数の風光明媚をほこる水郷である。浴恩園は築地の風光にいかにもふさわしい屋敷なのだ。

門から母屋のほうではなく、庭園につうじる苑路へ百次郎は案内された。冴え冴えとした緑の色が目にしみるようだ。都塵をわすれさせる静けさの中に、見事な風景がひろがっている。

庭園には水がふんだんに引かれ、木の緑が池や小川の水面に映え、石組や建物と絶妙の均衡を

たもっている。築山や池の中島、石橋、滝などによってたくみに勾配がつけられ、背後の遠景ともよくとけ合い、閑雅、幽邃、優美な雰囲気をただよわせ、地上の別天地へ足を踏み入れた気持をおこさせるのだ。

「茶室へおはこびください」

門番は池にいたる路地をすすんだ。路地は池の中島へつうじている。

〈時雨亭〉は中島にもうけられている。

「どうぞ、ごゆるりとおすごしくださいませ」

門番は石橋のところからひきかえしていった。

中島の築山のふもとに待合がある。百次郎はここに大小をおいた。

路地を中腹のほうへのぼると蹲踞があり、その横に時雨亭の躙口が切ってある。百次郎はここで呼吸をととのえ、躙口から茶室へ入っていった。

中では囲炉裏をはさんで亭主と客がむかい合っていた。風炉の釜が松籟の音をたてている。客は浦上弥太郎である。

浦上のまえで茶の湯道具を悠々とあつかっている亭主こそ、浴恩園の主人松平越中守定信である。松平定信はつとに茶道の達人として世上にきこえていた。

楽天家で野放図が身上の百次郎もさすがにおそれおおく、緊張感で体がかたくなった。

亭主のなごやかな視線が百次郎へむけられた。その眼差が百次郎に着座をすすめていた。

大柄ではないが、威風堂々としている。おだやかな中にも凛乎とした強靱なものを秘めた容貌

である。口元はひきしまり、眸には力づよい光がある。尋常ならば、百次郎がこれほどまぢかで対座できるような人物ではなかった。

「失礼つかまつります」

ひくい声でいって、百次郎は浦上にならんで客畳にすわった。茶室の中は身分、位階の差別はない世界だとされている。

亭主はゆるゆると茶をたてはじめた。茶筅がさばさばと音をたて、茶は小気味よく泡だちをみせている。

ながれるようなその手さばきに百次郎はしばらく見入った。

浴恩園は定信が老中筆頭の役についたとき将軍家斉からたまわった屋敷である。定信はこの屋敷がことのほか気に入り、老中をつとめていたころも折をみてはここをおとずれていたが、役をしりぞいてからは上屋敷住いをやめて、ほとんど浴恩園ですごしている。

百次郎はいまだに緊張をつづけている。定信の手前をみつめる浦上の様子にもいささかのかたさがうかがわれた。浦上にしろ定信の手前で振舞をうけることなど生涯のうちには二度とはない果報であろう。

定信の手前は淡々として、しかも自信にあふれている。隆々と力がこもっていて、やわらかみをふくんでいた。

「まず、いっぷくいたせ」

定信は茶碗を浦上へすすめた。

「ありがたき幸せにございます」

浦上は作法にしたがって茶をのんでいった。

「まことに結構な茶でございます。腹わたにしみわたりました」

こころゆくばかり堪能して浦上が茶碗をおいたとき、

「浦上、わしは明年、江戸を去る」

定信がしずかにそう口にした。長年江戸住まいをつづけていた定信が明年の参勤交代で奥州白河へもどり、当分は領地内にとじこもるというのである。

「そのまえに、申しつたえることがあってな、今日ここにきてもらった」

「ははっ」

浦上はかしこまった。

「探索はすすんでおるか」

「目下、伊達藩にたいする探索をすすめております。すでに尋常ならざる不審がいくつか浮かびあがってきております」

そういってから、浦上は先だって百次郎が報告したばかりの伊達の各屋敷についての不審を説明した。

百次郎らは芝口の上屋敷ばかりでなく、中屋敷、下屋敷についても要塞としての機能をそなえていることをしらべあげていた。しかも伊達藩の上屋敷、中屋敷、下屋敷はそれぞれに孤立しているのではなく、たがいに緊密な連絡がたもたれ、いざというときに相互が連携したうごきがと

れるようにつくられていることがわかった。

まず芝口の上屋敷と愛宕下大名小路の中屋敷とは、路上をいけば一丁半ばかりの距離だが、最短の直線距離にすれば約一丁しかはなれていない。上屋敷の表と中屋敷の裏には露月町があるだけである。これだけの距離ならば、鉱山の掘子をつかえば地下の抜け穴をうがつくらいは容易である。

さらに上屋敷と本所仙台堀の蔵屋敷（下屋敷）とは距離にすればかなり遠いが、上屋敷の裏には浜御殿との境をなす大きな掘割がとおっており、水路仙台堀につうじている。腕のいい船頭がいれば、少々の時間でこの両屋敷はつながるのだ。

高輪にある下屋敷だけは、一見他の屋敷から隔絶しているかに見える。が、おなじ高輪に伊達家の菩提寺臨済宗東禅寺があり、東禅寺は総門が海にのぞんでいて、ここから海路上屋敷とむすばれ、さらに仙台堀へもつながっている。

かんがえればかんがえるほどたくみに伊達藩の各屋敷は緊密な連繋がとられているようにみえた。百次郎ははじめ江戸の絵図面を微細に見ていてこのことに気づき、その後実地にあたってみて、抜け穴以外はすべておのれの目と足でたしかめることができたのである。

それをつたえたとき、浦上は絵図面をにらんで、ううむ……と驚嘆のうなり声をあげ、しばらくのあいだ沈黙をつづけたものであった。

「それのみでは、伊達に異心ありとまではいえぬ」

そのとき浦上は沈黙のあとでそういったが、今定信はそうしなかった。

江戸における大名屋敷はそもそも人質を住まわせるところとしてつくられた。だから万一幕府から疑いをうけたとき逃亡するための配慮が諸大名の側にあったとしても不思議ではない。幕府創設のころには、有力な諸大名がつぎつぎに取りつぶされていった。罪を得て取りつぶされた大名もあれば、幕府の罠におちいって改易された大名もある。幕府は強大な権力と武力にものをいわせ、自由自在に諸大名を淘汰していったのだ。

諸大名は戦々兢々として幕府の鼻息をうかがう一方、万一のときの逃亡の手段をかんがえていたところで意外とはいえないのである。

まして伊達藩の祖政宗は戦国生きのこりの英雄であり、奥州が生んだ最大の覇者といっていい。幕府ではつとに伊達藩取りつぶしをかんがえていたとしてもおかしくはない。雄藩伊達が今まで取りつぶし政策の犠牲にならずに生きながらえてきたことのほうがかえって不思議なくらいだ。

それほど藩祖政宗は幕府をおびやかすに足る梟雄であった。石高でこそ加賀前田、薩摩島津につぐ第三位ながら、人物の器量、識見、知謀、気魄、いずれにおいても政宗をしのぐ大名は当時天下にいなかった。家康や二代将軍秀忠はこの政宗を制禦するために、婚姻政策をおこなうなどさまざまの知恵をしぼったことは人の知るところである。

政宗のほうは臣従してからも、幕府のさまざまな圧力や監視をかいくぐって、折あらば戦国の覇者の夢をはたさんものとひそかな策動を終生つづけていた。政宗はおのれの野心を後代に託したかもしれぬ。託さないまでも、藩祖がかかげた理想や夢はかならず代々うけつがれてくるもの

である。定信が必要以上とおもわれるほど伊達を警戒するのもそのためなのだ。

「くさっても鯛じゃ、伊達は雑魚ではないぞ。伊達はもうごきはじめておる」

定信は今度は百次郎のために茶をたてながらつぶやいた。

定信はまだあきらかにしていないが、それについての証拠を何かつかんでいる。定信が老中をやめたことと、伊達の動静とはなんらかのつながりがあるのだろうという想像を百次郎はかねていだいていた。その想像が確信にまでたかまった。

（越中守様は一体、何をつかんだのであろう）

百次郎の興味はその一点にあつまった。おそらくそれは定信にやむなく老中の職をなげうたせ、改革を中断させるほど衝撃的なものだったのであろう。しかしいかな伊達とて、それほどまでのつよい力を持っているのだろうかという疑問があった。

政宗がいかほどの英雄であったにせよ、すでに歿後百六十年がたち、藩主も八代をむかえている。政宗以後さほど傑出した藩主もでていない。めざましい新田開拓などによって内高は百万石とも百五十万石ともいわれているが、幕府にたいして異論をかかげるほどの気迫が伊達藩にあろうとはおもわれなかった。

藩主斉村にしてからが、いまだ十九歳の弱冠である。この若い藩主のもとに伊達家臣全員が結束して幕府にたいし異をとなえるだけの勇気と力があるとまではかんがえられないのだ。

仮に伊達藩がたちあがって事をおこしたにしても、幕府にたいして擦り傷一つ負わせることもできまい。幕府は創立のころの磐石な強大さこそうしないつつあるものの、雄藩とはいえ外様一

藩にたいしてうろたえるほど弱体化はしていない。

定信は悠揚と茶筌をさばいている。その定信の心中は奥がふかく、底がはかり知れぬ。百次郎が知り得るのは、表面にあらわれたほんの一部分にしかすぎないという焦らだちがあった。

けれども百次郎は定信の手前に見入って、かつて想像したこともないほどの至福にひたっていた。花生けもない簡素な茶室であるが、定信が自分のために茶をたててくれているとおもえば、黄金づくりの部屋で地上の大贅沢をきわめているような感激がおさまらないのである。

「越中守様、伊達はどのようなうごきをいたしておるとおかんがえになっておられましょうや」

浦上がきいた。

「わしの目にも、まださやかには見てとれぬ。が、すでにうごきだしたのはたしかだ。やがてのうちにそれが見えてくるだろう」

伊達の策動が表だって見えてきてから対応策を講じたのではおそすぎるということなのである。

「では越中守様はなにをもって、伊達がうごきだしたと……」

臆せずに食いさがってたずねたところがいかにも浦上らしい。ほかの者であれば定信を相手にこういう執拗な質問は遠慮するのが普通であろう。

百次郎は定信の反応をうかがった。

「ごく内密の情報が、とびこんでまいってな」

とびこんでまいったという言葉がまともでない経緯を想像させた。

「隠密ではなさそうでござりますな」
「情報をもたらしたのは、伊達藩にかかわっておる者じゃ。それ以上のことは申せぬ」
浦上は沈黙した。
百次郎もそこまでは想像がおよばなかった。
定信がそれ以上いえぬといったのは、いえばその当人に危害がおよぶということだろう。
「まだその人物に全幅の信頼はおけぬ。だが、すくなくともその情報はまちがいない。伊達の上屋敷をくれぐれも注意いたせ」
といって定信は百次郎に茶をすすめた。定信は当分のあいだ、その人物の去就、動向をしずかに見まもるつもりなのであろう。
「伊達の上屋敷……」
「左様だ。昔から申すであろう、入り鉄砲に出女――」
「入り鉄砲に出女、でございますか」
今日の浦上はことのほか血のめぐりがわるい、とおもうのはまちがいである。彼はすこしでも定信から多くの言葉をひきだそうとして懸命なのである。
「頂戴いたしまする」
一礼して百次郎は茶碗をとりあげ、作法にのっとってのみはじめた。
感激のあまりはじめはあじわいをおぼえる余裕もなかった。が、徐々に落着きをとりもどし、茶のにがさと香ばしさの入りまじったあじわいをとらえることができた。

この一瞬、百次郎は定信のために一命を賭して悔いはないとおもった。この亭主のために懸命のはたらきをしようとあらためて覚悟したのだった。
「存分にいただきました。光栄至極にございまする」
そういって茶碗をかえすと、
「出女にはかくべつ注意いたすがいい」
定信がかさねていった。
「ははっ」
「入り鉄砲についてはまず関所で止めることができる。だが出女となると、関所で見わけるのは至難じゃ。出るほうは必死の策をめぐらしてくるであろうしな」
〈入り鉄砲、出女〉は幕府の大名政策と治安政策の基本である。入り鉄砲は関八州とくに江戸に鉄砲などの武器が入りこむのをふせぐことであり、出女は諸大名の妻子が江戸から脱出するのをはばむことを意味する。
伊達の場合でいうと、藩主斉村に奥方はいるが、いまだに子をもうけていない。奥方お鶴の方の江戸脱出をふせげと定信はきびしく指示したことになろう。
もし伊達が藩主奥方の江戸脱出を画策しているとすれば、よほどの肚をすえて大胆な行動にでてくるものとかんがえねばならぬ。人質を回収してからでないと、伊達はおもいきった行動にはでられないということである。
「人質の脱出はなんといたしましてもはばむ所存でございます。左様なことは幕府はじまってい

らい一度も例がございません。もし脱出されましては、諸大名にしめしがつかぬことになります。幕府はカナエの軽重を問われましょう」

「しかし、伊達の力をあなどることはつつしまねばならん。負けるとわかっている戦はしかけてくるわけがない。伊達はあきらかに勝算をいだいておるのだ。このことをよくかんがえておかねばならん」

伊達がすでに策動を開始したと定信がいう意味は、伊達が人質回収の作戦にはやくも手をつけだしたということなのだろうと百次郎は推測した。定信が明年白河へ立ちかえるのは、伊達にそなえるためだと確信した。

白河といえば、誰でも知る奥州と関東との境界である。関東の出口であり、奥州の入口になる。その意味で白河十一万石の役目は、奥州諸国にたいする関東の鎮台である。

もっと端的にいえば、白河藩は伊達藩にたいする備えのためにあるとさえいってもいい。藩主みずから中央の公儀大役をなげ捨てて、お家重代、幕府守護の役目をはたそうとしている定信の心中をうかがい、百次郎はいっそう力がみなぎるのをおぼえた。

最後に定信は自分のための茶をたてはじめた。百次郎はその手前に見とれながら、こころでは定信へ密告をおこなった伊達藩ゆかりの者とは一体どんな人物か想像してみた。

しかも百次郎がここをおとずれてもっとも驚きにうたれたのは、定信が老中を隠退したとはいえ、いまだに幕閣の実権を他人にゆずっていないということだ。しっかりとおのれの手中ににぎっている。中町奉行に号令をかける権限をもっていることが、遺憾なくその実体をしめしていた。

松平伊豆守信明を筆頭にする現在の幕閣は、定信の傀儡にすぎないのだ。明年の春以降は、定信が遠く白河から指揮をとって老中らをうごかすという変則的な幕府政治となろう。

自分のたてた茶をゆっくりとのんでいる定信の姿を見て、百次郎は彼の決意のほどを感じとった。

仙台河岸

浴恩園をおとずれた翌々日、百次郎はめずらしく朝はやく目ざめた。

そして夜具の中で、じっと耳をすました。おなみの気配をうかがうためではなかった。おなみはもうおきだして、いそがしく朝の仕事に立ちまわっている様子である。

小鳥のさえずりがきこえた。稲荷小路は駿河台の高台にあり、往時の林や森がところどころにのこっていて、四季小鳥の姿がたえるときがない。

百次郎は子供のころから小鳥の声をききつけている。鳴き声だけでその種類をあてることができる。そのうえ、小鳥の声でその日の天候をあてることもできるのだ。

（今日は晴れ。仙台河岸に花火があがるな）

夜具の中でそうおもった。にわかに興味と闘志がわきおこり、全身に力のみちてくるのを感じた。

夏の終りをつげる花火である。江戸の夏は花火にはじまって、花火におわる。中でも、毎年夏のはじめに将軍が浜御殿から打ち上げる大花火と、伊達が夏の終りに仙台堀の蔵屋敷で上げる花火が双璧であり、江戸の夏をいろどる年中行事として知られている。

今年の夏は後半に入って霖雨がつづいたが、晩夏をむかえてようやく晴天がもどってきた。おくればせながらきびしい残暑のおとずれに、諸国の人々はほっと胸をなでおろしていた。

霖雨が秋までつづくようだったら、五穀のみのりは絶望的であった。とくに冷夏を噂されていた奥州の凶作は避けられぬところだった。悪くすると、天明の大飢饉の再来になるのではないかと悲観的な見方がされているときに、前触れもなく残暑がやってきたのだ。

人々は天の恵みに歓喜し、飢饉をまぬがれた喜びを盆踊りや祭礼などに託してあらわした。天下諸藩では、飢饉にそなえて備蓄したり、囲米に追われたりしていたが、ともかく今年の収穫は見とおしがついたのだった。

それだけに、今年の仙台河岸の花火は例年以上に盛大ではなやかなものになるだろうと世間は期待し、噂しているのだ。

「まあ、百次郎さま」

おこしにいくまえにでてきた百次郎の姿を見て、おなみがおどろいた。

「どうしたんですか、義姉さん」

「遠藤さまも、今朝はやいんですよ」

おなみは甲斐甲斐しく紅襷をかけて女中とともに、部屋の掃除にかかっているところだった。

百次郎はおなみの白い二の腕になんともいえぬなまめかしさをおぼえた。この家にとついできたころのおなみといえば、たよりないくらいにほっそりとした体だったが、今ではほどよく肉がついて、女の円熟期に入ったことを感じさせている。自分の身ぢかにすわっている姿や、立っている後姿などを見ると、いきなり抱きすくめて押したおしたくなるような衝動にかられるときがあった。

おなみ自身は気づいていなくても、ちかごろの彼女は男をたまらなくさせる色気を発散させている。お蝶がふりまくような垢ぬけた色気とはまた一味ちがった生活の中でふとみせる自然な色気である。日常ともにくらしている百次郎は、義姉だけに、ときに息ぐるしくなるようなことがあるのだ。

「源之助もそうですか。仙台河岸に花火を見にいくんでしょう」

「百次郎さまもきっとそうなのでしょう。花火を見るのに、朝から早おきして」

おなみはおかしくてたまらぬといった顔でわらった。

百次郎はこの日がくるのを何日もまえから待っていた。定信がいうとおり、伊達藩がすでになんらかの策動を開始しているのだとしたら、今日あたりはそのうごきをうかがい知る絶好の機会ではないかと期待したのである。

この一日は江戸中がいやがうえにも伊達に注目する日である。伊達藩においては、藩主以下江

戸にいる藩士すべてが見物をたのしむばかりでなく、屋敷に藩主の客をまねいて、その見物にも供するのだ。

当日は、仙台河岸や仙台堀に群衆があつまり、大変なさわぎになる。対岸の永久島や三ツ俣も群衆に占領されるだけでなく、さしも川幅のひろい大川も花火見物の屋根船で満ち満ちてしまう。川をのぼりくだりする乗合船や荷船が上流まで数珠つなぎになるのは例年のことだ。仙台河岸や仙台堀には群衆を目あてにした屋台や茶店、物売りがでて大繁昌をきわめる。

すぐる安永の年にはあまりにも人出が多く、小名木川にかかる万年橋の欄干が折れて、多数の死人や怪我人がでた。

この日、百次郎は昼前に屋敷をでた。昼をまわったころには、もう仙台河岸や仙台堀に大勢の人がではじめていた。すこしでもよい場所で花火を見物しようと夕餉の弁当をたずさえ、ゴザや毛氈を持参してきた老若男女でごったがえしている。

河岸に面した蔵屋敷の表門が八の字にあけはなたれ、幔幕が門前にはりめぐらされ、竹に雀の紋所を入れた提灯が数かぎりなく置かれていた。門番の数はふだんの数倍である。

裏門は仙台堀に面しており、こちらは幔幕こそ張っていないが、無数の提灯の列が沿道をかざり、要所には門番もついていた。表門のほうも裏門の側も、見物人の通行でごったがえすのを伊達の藩士が整理にあたっている。

やがて、伊達家の賓客がおいおい到着しはじめた。藩主斉村が正式に招待した客であり、いったん屋敷内の控え座敷にくつろいで、歓談しながら花火の打ち上げを待つのである。

夕暮れがちかくなったころ、すべての提灯にいっせいに火が入った。真昼をあざむくような明るさの中で、表門のかたわらに屋台をおいた男が、門を出入する人物にさりげない視線をおくりはじめた。

「麦湯三つに、西瓜四つ」

客の注文をうけて、屋台の主人は麦湯を三つ茶碗にそそぎ、西瓜を四切れとって客へわたした。麦湯と西瓜を売る屋台であるが、主人にはどことなく商売だけに熱中していない様子が見えた。ついさっきは、門のほうに気をとられて、客に釣銭を催促された。まぎれもなく今日の賓客に注意をむけているためなのだ。

表門の附近には屋台が二、三十、茶店も十以上でており、縁日の夜店をしのぐ大にぎわいの風景をなしている。さらにごったがえす人通りの中を物売りが人波をかきわけながら売りあるいているのだ。

「麦湯を一つくれ」

くだんの屋台の主人がききおぼえのある声に気づいて、客のほうへ顔をむけた。百次郎と伝兵衛はこの日はじめて顔を見合わせた。客が百次郎で、屋台の主人が伝兵衛である。

「へい、麦湯一つ」

伝兵衛はこたえて、麦湯の茶碗をさしだした。

百次郎は変装はしていない。ぶらりと花火を見物にやってきたという着流し姿である。百次郎はその場で一息にのみほし、

「親父、景気はどうだな」
とたずねた。
「へい、景気は昨年よりもよございますよ。長いあいだ雨に降りこめられた連中が気ばらしにどっとくりだしてきたんでしょう。人出もいつもの年よりふえてますね」
伝兵衛はさりげなくこたえた。
「銭になりそうなお客さんもおでましになったかね」
「そらもう、お銭の切れそうな客もきておりやす」
「そうか」
「へえ、五人ほどですが、ずいぶん買っていただきやしたよ」
二人だけにつうじ合う会話をかわしたあと、急に声をおとして、
「お客の素姓はわかったか」
「みな駕籠で乗りつけてきましたもんで、もどり駕籠の行き先をつきとめなきゃあなりませんね」
うなずいて百次郎は代金の穴あき銭をおいた。
「じゃあ、せいぜい儲けてくれ」
いいのこして百次郎は伝兵衛の屋台をはなれ、塀ぞいに仙台堀のほうへまわった。
仙台河岸から仙台堀へまがるところに、団子と大福を売る屋台がでていた。屋台の主人は三十前後の男で、鎌鼬の金次こと、鎌田金兵衛である。

百次郎は人のながれをかきわけ、そこへちかづいていった。屋台のそばに縁台が二つでている。
「団子、一皿」
そういって百次郎が縁台に腰をおろすと、金次が、
「旦那、お待ちどおさまです」
と団子をおいた。
「どこかのお姫さまでも、やってきたかい」
百次郎は醤油と砂糖で味つけをした団子の皿をうけとって、伝兵衛のときと同様にたずねた。
「いらっしゃいましたよ、旦那、着飾ったお姫さまがね」
金次はそれが特徴の大きな目玉をむけてきた。
「別嬪かい」
ときくと、金次は小用のふりをして屋台をはなれてきた。
「今日の昼すぎから、ずっとここで商っておりますんで、蔵屋敷に入った客はみな見ています。そん中で大層な駕籠で乗りつけてきた客が五人おりやしたよ。五人ともまちがいなくいわくがありそうな感じがしましたね」
金次のいうことは伝兵衛の言葉とほぼ一致している。伝兵衛と金次の勘は十全とはいえぬまでも、大体信用することができる。腕のいい与力や同心の勘は経験や修練からいって十中八九はあたるものだ。

「お姫さまのかえりの見送りをたのんだ。間違いのないようやってくれ。手がたりなかったらもっと用意してやろう」

「花火がおわるころまでには、見送りの人数をそろえておいておくんなさい」

「わかった。すぐに呼びあつめておこう」

百次郎はすぐさま浦上へ連絡をとる方法をかんがえた。中町奉行ではこうした場合、ただちにほかの与力かその手下の同心が派遣されてくるのである。

「旦那、お気をつけなすって」

「おまえもな」

うなずいて百次郎が屋台からはなれたとき、

ドドーン

霹靂が鳴るような大音が頭上でひびいた。

その瞬間、歓声と嘆声の入りまじったどよめきが地鳴りのようにおこった。夏の終りをつげる花火が夕空に舞いあがったのだ。

パーン

パパパーン

第一声においすがるように、二発、三発、四発目がつづけざまにはじけて、江戸の夕空をゆるがした。二条、三条、四条の太い光跡が黒煙の尾をひいて、大川の空へ真一文字にかけ上っていった。そして天上の一角で大音響とともに炸裂し、燦爛たる無数の火の粉をまき散らし、巨大な瀑布のように落下していった。

将軍家の花火にしろ、伊達の花火にしても、もとは戦場の狼烟を応用してつくったものである。だから町方の鍵屋や玉屋などがつくる仕懸け花火とはちがって、もっぱら打ち上げ式の花火である。仕懸け花火のような華麗さにはやや欠けるが、豪快さ、勇壮さでは文句なく打ち上げ花火がまさる。

見物人のどよめきをついて、またつづけて数発の花火が打ち上った。天上を見あげると、あざやかな光跡がたがいにきそい合うように空高くのぼって、流星のように落下し、消えていった。目のさめるような光景がつぎからつぎに、息つく間もなく展開した。

さまざまな色彩の光跡がそれぞれ一直線の軌跡をえがいて、大川の上空をこえ、三ツ俣の上空で華麗で巨大な火の花をさかせ、またたくうちに消えていった。

百次郎も任務を一瞬わすれさせられるほど胸のすく夏の夕景色がつづいた。だが、百次郎はすぐにこの花火を蔵屋敷の庭にもうけた賓客の席からながめている五人の客たちの正体を想像してみた。

かんがえをめぐらしてみたが、おもいあたる人物はいなかった。正体をはやくつきとめたいという衝動が身うちをかけめぐった。この五人の正体がわかれば、伊達の策動がどういうものなのか、およそ輪郭くらいはつかめるだろうとおもった。

四半刻ばかりひっきりなしに打ち上げがつづき、それから半刻（一時間）の休憩に入った。これは毎年の恒例である。花火ほど桁はずれに金のかかるあそびはこの時代にはなかった。ドンと

音がして空で火花を発すれば、その瞬間に千金が消えてなくなる。夜っぴて花火を打ち上げていたら、伊達の藩庫もたちまち空になってしまうだろう。

ドドドドドーン

百雷が一時に落下したような轟音をあげてふたたび花火が打ち上げられたのは、日がとっぷりと暮れ、五つ（八時）の鐘をまぢかにしたころだった。

その一瞬、大川の上空から地上、水上までが真昼のような明るさに照りはえた。無数の火の粉を落花のごとく散らせながら消えていった花火の豪華さとはかなさは、すぎゆく夏を象徴していた。仙台河岸や仙台堀、大川の対岸を埋めつくした見物人たちは華麗な花火に酔い痴れながらも、みじかい一夏がおわった感慨をおぼえているのであった。

四つ半（夜十一時）ごろ、仙台河岸や仙台堀にしずけさがもどった。蔵屋敷を中心にむらがり寄った大群衆もようやく姿を消した。喧騒とにぎわいが去って、屋敷周囲のしずけさは普段よりいっそうの深さにしずんでいた。

大川の水面をうずめた船影も今はどこへ消えたか見えなくなった。数多の花火がさかんにいろどった天上には月と星だけがとりのこされて、おぼろな光をはなっている。

耳をすませば、大川の水音がかすかにきこえてくる。ほかには犬の遠吠えがときおり空へつき抜けていくだけである。蔵屋敷周辺の佐賀町、清澄町といえば問屋街の大きな倉庫が大川岸や堀端に立ちならんだところで、今は人っ子の影一つ見ることはできない。

だが、その闇の中にひそむ人影があった。百次郎は仙台堀にかかる上ノ橋の欄干ちかくの木陰に身をひそめて、蔵屋敷の表門を見張っていた。

源之助、伝兵衛、金次らも堀の対岸の倉庫や材木置場の陰から、じっと表門と裏門へするどい視線をそそいでいた。浦上に急遽招集された同心たちも闇の中に姿をひそめている。

夕方、蔵屋敷に入った賓客の駕籠は合計五つだが、その駕籠がまだ一丁も屋敷からでてこぬのである。花火見物をおわって賓客たちは斉村も同席で酒盃をかたむけながら、歓談の時をすごしているのか。それとも見物につかれて、今夜は泊りをきめこんだのであろうか。

群衆にまぎれて駕籠もかえっていくだろう、と当初予想していただけに、一同は不審をいだきはじめた。それでいっそう蔵屋敷の門から目をはなすことができなくなった。

そのとき、橋の袂に大きな茶褐色の野良犬がちかづいてきた。江戸市中は野良犬の多いところで、中には狂暴なやつもいる。犬は木の陰にかくれている百次郎を見つけて、うさんくさげに寄ってきた。尾をひくくさげ、鼻をひくつかせて百次郎の様子をうかがっている。

まずいとおもって、百次郎は野良犬をにらみかえした。

眼光に射すくめられて犬はたじろいだが、

ウウウ……

ひくい唸り声を発して逆に威嚇してきた。

やむをえなければ、

（斬ろう）

そう覚悟して、腰をすえ身がまえたとき、犬は殺気に気圧され、じりじりと後ずさりしはじめた。そしてくるっと後をむいて退散していった。

ほっとして表門のほうをうかがうと、そのとき音もなく大扉が内側にあくのが見えた。

百次郎はおもわず身をのりだして眼をすえた。

やがて一丁の駕籠が、月光の下に姿をあらわした。昼間入った賓客の駕籠である。

凝視していると、二つ、三つ、四つ、五つの駕籠が陸尺にかつがれてでてきた。正確にいうならば駕籠というよりも、身分の高い者にのみゆるされた引戸のついた乗物である。

意外だったのは、乗物が全部同時にでてきたことだ。百次郎は五丁がばらばらにでてくるのを想像していたのである。

乗物のどれかが上ノ橋をわたってくることがかんがえられたので、百次郎は欄干のちかくからさらに奥まった木陰へ身をうつし、その行方を見まもった。

先頭の乗物は仙台河岸を清澄町のほうへむかった。

二番めの乗物は上ノ橋へちかづき、袂の手前を蔵屋敷の塀ぞいにまがった。そして仙台堀の堀端道を伊勢崎町の方角へすすんでいった。

三番めの乗物は上ノ橋をわたって、永代へむかってすすんだ。

四つめは最初の乗物とおなじく清澄町へ、そして最後の乗物は上ノ橋をわたり、中ノ橋をわたっていった。

すでに百次郎の指令はそれぞれへつたわっている。

四方へ散った乗物を追って、尾行の影が音もなくはしった。影は物陰から物陰へ、闇から闇へとつたいばしり、たちまちのうちに蔵屋敷周辺から消えた。

百次郎は最初の乗物と四番めの乗物を追った。その二つは清澄町をとおりすぎ、さらに大川端を北へむかってのぼっていった。

百次郎の前にはそれぞれの尾行者がついている。最初の乗物を源之助が尾行し、四番めの乗物は金次が追っている。

新大橋の袂まできたとき、乗物が二手にわかれた。橋詰には幕府の籾蔵があり、最初の乗物はそのまま北上し、四番めの乗物は籾蔵にそって右へ折れた。

橋の袂で、百次郎は一瞬ためらったが、まっすぐに最初の乗物を追った。四番めの乗物は金次一人にまかせたのだ。

尾行をつづけながら、百次郎はかすかに不審をいだいていた。その不審は乗物が蔵屋敷の門をでたときに芽ばえたものだった。月明りで闇を透かしながら陸尺の足どりを仔細に観察しつづけた。

「源之助、おかしくはないか」

百次郎は後からちかづいていって、ひくい声をかけた。

「……？」

源之助は尾行に夢中で、不審には気づいていないようだ。

行く手に立ちはだかる大きな御船蔵の影が見えてきた。

「陸尺の足どりが軽すぎやしないか」

百次郎がささやくと、源之助はしばらくじっと陸尺の足どりに見入った。軽いとはいっても、源之助がすぐには気がつかぬほどの微妙な感じである。

まして月光だけがたよりだから、さだかではない。乗物は提灯をつけているが、こちらにはそれがない。

「そういえば、どことなく軽いようですね」

町の四つ手駕籠とちがって、乗物の場合は市中を突っぱしるものではない。だから陸尺の足どりを見わけるのはむつかしい。

「中の主は子供か……」

身分のある幼ない子供が花火見物をせがんで蔵屋敷へでかけたのかもしれぬ。一昨日、定信に入り鉄砲出女についての注意をされているので、余計女子供のことが気になった。

御船蔵の塀は長くつづいている。そのむこうは、水戸家の石置場だ。乗物は石置場の前をすぎて、竪川をこえた。

「橋をわたるつもりじゃないですか」

乗物が左へまがったとき、源之助がいった。まがった先が両国橋である。

大川ごしに、はるか浅草岸の灯がかすかに闇の中に見えてきた。やはり、乗物は両国橋をわたりはじめた。

百次郎と源之助は乗物との間隔を十間ばかりにつめた。

（……）

百次郎は橋をわたりはじめたとき、背筋がぞくっと寒くなるようないやな予感におそわれた。

「乗物の中は無人じゃねえか？」

そんなおもいにとらわれた。

「わたしも今、そんな気がしたところです。空じゃないかと……」

「罠かもしれんぞ」

自分たちをいましめながら、二人は橋をすすんでいった。

橋の長さは九十八間、橋のむこうは両国広小路である。静寂につつまれた闇の中を乗物はわたっていった。

百次郎、源之助もそれについてすすんだ。百次郎はそのとき、橋の前方の闇がかすかに揺れうごいたのを見た気がした。

「止まれ！」

源之助を制し、百次郎はとっさに身をしずめた。同時に、

シュッ

するどい摩擦音をたてて、百次郎の耳もとを何物かがかすめた。

シュッ　シュッ

つづけざまにおなじ摩擦音が鳴って、矢のようなものが体すれすれにかすめた。

百次郎と源之助は地に伏せ、前方をうかがった。敵は橋の前方で待ち伏せていたのだ。しかも

平蜘蛛のように橋板に這いつくばって、狙い撃ちの機会を待っていた。

敵の出現はいかなる場合においても予測していなければならないが、飛び道具とはかんがえてもいなかった。

飛び道具を駆使しておそってくる敵に、刀をもってしては不利である。百次郎の懐中には火縄式の短筒がおさめられているが、江戸府内においては中町奉行与力といえども、火器を撃ちはなつことは遠慮しなければならぬ。できるだけ使用することは避けなければならなかった。

不利を承知で、百次郎は一刀をぬきはなった。

源之助も同様であった。

「隙をみて、斬りこめ！」

身がまえていうと、源之助はうなずいた。接近戦になれば、いかなる敵を相手にしても、たおす自信があった。百次郎が道場でつねに鍛練をおこたらぬのは、こういうときのためである。

斬りこもうとすると、その出鼻をくじくように、唸りを生じて矢が飛来した。そのうちの一本が欄干に突きささった。

半弓の矢よりもいくらかみじかい三尺たらずのものだ。矢がみじかければそれだけ弓の仕懸けがちいさく、連射がきくわけである。

乗物はこの隙に、まるで橋の上を疾走するようにぐんぐん遠ざかっていった。やはり囮であった。はじめの想像どおり乗物は空だったのだ。

敵は七、八人の集団である。はっきりとは見てとれぬが、異装の集団だ。

武士の風体ではなく、忍者のそれともちがう。むろん百姓、町人のものではない。頭部、顔面を奇妙な頭巾でおおっている。天狗が闇にまぎれて山から里へおりてきたような怪奇異様な者たちだ。

彼等はあくまでも飛道具で勝負をつける作戦とみえ、百次郎と源之助にけっして接近戦をいどませなかった。

「いくぞ！」

機をみて百次郎は突進を開始しようとした。源之助もそれにつづこうとしたとき、

シュッ

するどい音をたててまたしても矢が射こまれた。

ふせぐ余裕がなく、源之助がたまらず転倒した。

「腿をやられた」

源之助の声をきいて、百次郎はとっさに策の変更をせまられた。

つづけて矢が射こまれる中で、すばやく源之助をおこした。

「歯をくいしばれ」

そう命ずるや、百次郎はぐいと源之助の腿から矢をぬきとった。

「ううっ……」

苦痛にうめく源之助を、百次郎は肩にかついだ。

「無念だが、この場は退散だ」

いうや渾身の力をふるって欄干へはしり寄った。
「おれにつかまっていろ。はなれるな！」
そう命じて力づよく跳躍し、欄干をこえ、空中に身をひるがえした。
グングン落下していく百次郎と源之助のまえに、大川の水面がせまってきた。

襲撃

月光の下を、乗物はすすんでいく。乗物のかざす提灯の明りが路上を照らしている。逃げもかくれもせず、悠々とした足どりですすんでいった。
その足どりを後方の闇の中から凝視しているのは、中町奉行同心夏目新蔵である。
新蔵は仙台堀からこの乗物を尾行して、永代をわたり、永久島をこえ、寝しずまった八丁堀へ入っていった。
彼は平生は本所大島町の借家で浪人ぐらしをしており、手内職などをしているが、一旦ことがおこれば、中町奉行同心として出動する。今夜、急な伝令がやってきて、にわかに仙台堀へ急行し、尾行にくわわったのである。
新蔵は杉村三太夫という与力の配下であって、目下のところ事件にたずさわっていない。今は

遊軍である。
それだけに、いさみたって浪人姿のままで現場に急行したのだ。そして伊達藩蔵屋敷からでてきた三番めの乗物を尾行してきた。
新蔵は今年二十八歳になる。家には昨年縁組したばかりの女房おしずがいる。おしずも着物の仕立てなどをやって生計をたすけてくれているが、実際は三十俵二人扶持の禄米で生活はたっているのである。
今年の春からおしずが着物の仕立てをやめたのは、妊娠があきらかになったためである。彼は男児の出産をこころ待ちにしていた。男子ならば、将来新蔵の後をついで、中町奉行同心の役につく。今からそれをたのしみにしていた。
新蔵は自分の役職に大きな誇りを持っており、いつも仕事に全力をだしきっていった。
身分は一代抱席であるから、手柄をたてたからといってつぎつぎに出世していくわけではない。出世欲にかられた男ではものたりぬ役職である。終生同心のままであるが、新蔵は出世よりも、一つ一つの仕事に自分を賭けて、公儀の役にすこしでもたつことをねがっていた。
乗物は八丁堀をぬけて、京橋をこえた。銀座通りを音もなくすすんでいった。
（何処へ……？）
先入観をいだくことは尾行には禁物であるが、好奇心がしだいに大きくふくれあがってきた。
新蔵はこの事件の内容については一切きいていなかった。事件の大きさについても、底のふかさについても知らされていない。単に乗物の行き先をつきとめれば役目はことたりるのだ。

尾行は新蔵にとってもっとも手なれた作業の一つだ。同心の仕事は尾行にはじまって尾行におわる、というほどいちばん基本的で奥のふかい作業でもある。

乗物は尾張町の角をまがって、山下御門のほうへむかっている。

（外桜田の大名小路……？）

そのあたり一帯は諸大名の上屋敷がひしめくようにならんでいる。乗物はそのいずれかの上屋敷にもどるのだろうとおもった。

こころなしか、風がでてきた。風に襟首をなぶられて、身のひきしまるものをおぼえた。

案の定、乗物は御門をくぐった。

御門の正面は阿部播磨守の上屋敷である。そこから左右と奥に、大名屋敷が無数につづくのだ。

右手に日比谷御門があり、左手に幸橋御門がある。大名屋敷の高い塀が四方につづいている。

乗物は左手へむかった。

そして、幸橋御門のだいぶ手前を右にまがった。そこからは一直線に長い道がつづく。道は上り勾配になる。潮見坂とよばれている。

大名小路はしずまりかえっていて、物音一つきこえぬ。辻番の灯がぽつん、ぽつんと見えるだけで、人影はたえていた。

静寂の底の中をひたひたと乗物はすすみ、十余間おくれて、新蔵が追った。道の両側は高い塀

が切り立っている。

そのとき、前方の闇の中を白っぽい影がすっとかすめるのを、月光の下に察知した。新蔵には敏捷な獣が路上をはしったように見えた。

本能的に立ちどまって、前方をにらんだ。人影は見えなくなったが、殺気が前方からおそってくるのをおぼえた。

新蔵は大刀の柄に手をかけ身がまえた。

（退くか、すすむか……）

瞬時、逡巡したが、退くことは役目を放棄するにひとしい。

新蔵は身がまえたまますすんだ。

しかしその瞬間、いったん見えなくなった影がふたたび彼のまえにあらわれた。しかも、意外なほどの近距離である。新蔵にとっては、おもいがけぬ場所だった。影は前方の大名屋敷の塀の上を軽業師のように疾走し、みるみるうちにせまってきた。逃げるにはもはやおそすぎた。

「曲者！」

低くさけんで新蔵は一刀をぬきはなった。そして果敢に疾走を開始した。

白衣に身をつつんだ曲者も刀をひっ下げて疾走をつづけてきた。

塀の上と下を、両者ははしった。

間隔があっという間にせばまった。

月光の下に相手が濃く大きく浮かびあがった一瞬、曲者の身をつつんだ衣が浄衣だとわかっ

た。新蔵は満身の気魄をこめて白刃を一閃した。

同時に、浄衣が闇の中を跳んだ。

跳びながら相手も刀をぬいていた。

新蔵はかすかな手ごたえをおぼえ、相手を追って数間はしった。

新蔵がふかく踏みこんでさらに一閃、二閃するとふたたび浄衣が宙空におどった。屋敷の塀をも跳びこすことができるほどの身の軽さと跳躍力である。

飛んだところをねらって、

「えいっ」

必殺の一刀をおくりこんだ。が、相手は軽々とそれをかわし地上におり立った。

同時にさっと片腕をあげて、後方へ合図をおくった。

「あっ……」

おどろきの声を発したのは新蔵である。前方の闇の中から、湧きでるようにぞくぞくと浄衣に身をつつんだ曲者たちがおどりでてきた。

三つ、四つ、五つまで新蔵は影の数をかぞえた。

曲者たちは路上に展開し、物もいわずにおしつつむようにせまってきた。新蔵は乗物を追うことのみをかんがえて、敵の襲撃を予想していなかった。完全に不意をつかれたのだ。

新蔵は死の覚悟をせざるをえなくなった。彼には乗物の行方をつきとめるという使命がある。圧倒的優勢の敵をむかえても、逃走することはかんがえてはならなかった。

五人の敵にたいして、新蔵はおのれの全身をさらしていった。そのほかに自分のすぐ横手に最初の難敵がいる。

（死しかあるまい）

彼は生還を期することは断念した。

相手は新蔵の心のうごきをみとおし、余裕をもって必殺の態勢を展開した。それぞれ白刃を抜きつれて包囲してきた。

（せめて、はずかしくない死を……）

彼の脳裡にはこの一事しかなかった。おもいがけなく突然おとずれてきた死の運命にたいして、いさぎよくありたいとだけおもった。ひごろからその覚悟はできているつもりだった。それが中町奉行同心の宿命であるとかんがえていた。

「やあ！」

低いが、気魄にみちた気合をはなち、新蔵のほうから先に打ってでた。彼の本能がそうさせた。こうしたときは先制攻撃こそが身をまもるとおしえられてきた。

一刀が相手の顔面をかすめた。が、すかさず横手の敵が定石どおり新蔵の空いた側面をおそってきた。

横腹をおもいきり殴られたようなおもい衝撃をうけたが、かまわずに正面の敵へおそいかかった。

相手がくずれおちていくのを見たとき、新蔵も側頭を殴りつけられたようなはげしい打撃をこ

うむった。その衝撃で新蔵の体は大きくよろめいた。
（しまった……）
と観念したがここでもう一度気力をふるいおこした。体勢をたてなおして、右方の敵へむかって気合をこめた太刀を浴びせた。
（やった！）
とおもったが、手ごたえは無きにひとしいくらい軽いものだった。もう自分の体がおもうようにうごかなかった。そしてこのときになって徐々に恐怖心がおこってきた。
相手を恐ろしい敵だとおもうと同時に、どういう敵か正体を知りたい執念にかられた。
敵勢は無言でつぎつぎにおそいかかってきた。しかもこちらから斬りこんでいく隙がなかった。重い疲労がのしかかってきた。
一閃、二閃したが、これも相手にはずされた。すでに距離感がつかめなくなっていた。視界もぼやけてきた。
新蔵は満身の力と気魄をふりしぼって、遮二無二正面の敵に突進した。
するどい切っ先が相手の胸を薙いだ。そうおもった一瞬、新蔵は顔面に横なぐりの一刀を浴びた。たまらずあおむけにたおれた。
必死にたちあがろうとしたが、すでにそれまでの力はのこっていなかった。二度三度懸命に立ちあがりかけて、くずれおちた。
嵩にかかるように敵がせまってきた。正面にくる敵にむかって新蔵は手にした太刀を力いっぱい投げつけ、ついに力つきた。
死にいたるわずか数瞬のあいだ、おしずのことがまざまざと脳裡にうかんだ。
止どめを刺されて、新蔵は絶命した。

新蔵が乗物を追って深夜の八丁堀をとおりぬけていたころ、伝兵衛も日本橋通りをいく乗物を追っていた。
乗物は音もなく北方へむかっていった。
気配すらも感じさせずに伝兵衛は追尾した。相手にさとられていないという確信があった。
乗物は神田川へむかっている。
（川をこえるな）
とおもった。
川のむこうは浅草、下谷方面である。武家屋敷のおおいところだ。
伝兵衛はかならず乗物の行き先をつきとめるつもりでいた。その自信があった。
伝兵衛は忍びの術に熟達していて、今まで尾行をしくじったためしはなかった。尾行にも目的によっていろいろ種類がことなるが、今の場合はもっとも単純な尾行である。
いでたちといえば、屋台をかついでいたときのままである。ふだんも船頭の形をしているので、大小を帯びることはほとんどない。大小はいつも船宿青柳の押入れの奥にしまいこんである。

伝兵衛は船宿の船頭ぐらしがもうすっかり身についていた。彼には家族というものがない。まだ幼ないころ母が死に、丁度二十歳のとき伝兵衛が伊賀盆地で忍びの修業に悪戦苦闘しているころ父が死んで、天涯孤独の身になった。小父小母や従兄弟がいるが、交際はまったくしていない。

三十代半ばの年齢で女房もいないのは、所帯を持つ気が毫もないからである。所帯を持てばこころひかれて、危険な仕事に全力を投入できなくなるのではないかという憂いがあった。

女が欲しくなったときには、遊廓や岡場所の女を買う。女に情をうつしたことはなかった。なじみの女をこしらえたこともない。

何が伝兵衛のよろこびかといえば、きびしい任務の遂行である。辛苦をかさね、命をけずって難事件を解決するところに生き甲斐をいだいている。事件が困難であればあるほど、ふるいたつのである。

伝兵衛は奉行の浦上とはあまり接触を持っていないが、直接の上司である赤石百次郎には心酔していた。百次郎の人柄にも器量にも惚れこんでいた。とりわけ天地一心流の刀術は天下無双だと信じている。狙撃術にも瞠目すべき腕を持っており、何度かその精妙さを目のあたりにしたことがあった。

伝兵衛が女房も家庭も必要としていないのは、心身をうちこめる仕事を持ち、さらに尊敬すべき上司を持っているからである。いかほど骨身をけずって任務を遂行し、功名をたてたとしても、同心は終世与力にはなれぬ。同心のまま生涯をおわるのだが、それを口惜しいとも不満にも

おもったことはなかった。

彼は中町奉行同心の家に生まれたから、同心になった。これをいささかも不合理だとは感じていなかった。幕府があって、身分制度が厳然としている以上、当然のこととおもった。

予想したとおり乗物は新し橋をわたって、佐久間町へでた。そこから先は大名屋敷と旗本屋敷の密集地だ。

まっすぐにつづく太い道がある。向柳原という。

道の中央には、幅二尺深さ二尺の溝がながれている。この道はずっと先で秋田藩佐竹侍従の上屋敷につきあたり、溝の水はその前にある三味線堀にながれこんでいる。

平行して、御徒町通りと練塀小路が南北に通っている。

町中とちがって、昼間でもしずかなところである。乗物は一直線に向柳原をすすんだ。

(敵襲があるとすれば、このあたり……)

と伝兵衛は意識した。

予想したわけではないが、ある種の勘がひらめいた。いくたびも修羅場をくぐり、死地を切りぬけてきた者がおぼえる予感である。

地形も襲撃には適している。伏兵をおくにももってこいのところだ。

しばらく尾行をつづけた。が、何事もおこらなかった。

乗物はしずかにすすんでいった。

前方に深い夜霧がたちこめて、乗物がぼやけてきた。不忍池に湧いた霧がながれてきたのだろ

う。

距離をつめるべきかどうか、瞬時ためらった。

そのとき前方に、白っぽい影がうごいた。白い巨大なドブ鼠か野良犬が溝の中を走ったようにも見えた。

伝兵衛はとっさに身をかがめ、地にうずくまった。

と同時に、溝の中を前と後から大きな影が殺気をはらんでいくつもせまってきた。その大きさから、伝兵衛は〝敵〟だと直感した。

（きたな！）

はじめ、溝の外にでた頭だけが見えた。

影の数は前から三つ、後に二つがかぞえられた。いずれも白衣をまとい手に手に、闇にひかる白刃をたずさえている。

そのうごきは、自分とおなじころし合いに慣れた人間たちをおもわせる俊敏さである。前後をふさがれて、逃げる道はもはやない。

「うぬっ！」

伝兵衛は猛然と闘志をかきたてられた。なにがなんでも、この死地をくぐりぬけねばとおもった。

前方の敵が溝からおどりでて、おそいかかってきた。

伝兵衛はむきなおって、懐中で手にした一物を投じた。

「ぎゃっ」

異様な声をのこして、前面の敵が顔を両手でおおいながら前のめりに地にくずれ、しばらくもがいていたが、間もなくうごかなくなった。手練の四方手裏剣（ほうしゅりゅうけん）が敵の顔面をとらえたのである。

そのとき前後から同時に敵の影が溝からおどりでて、抜身をかざして殺到してきた。

伝兵衛は後へむきなおり、第二の手裏剣をとばした。又しても十分な手ごたえがのこった。

「ううっ……」

呻（うめ）き声をあげて、背後の敵もたおれた。

闇を裂く手裏剣の音がつづいた。

それをかいくぐって、前方から果敢に二つの影が突進してきた。

白刃が月光にきらめいた。伝兵衛は転倒しながらかろうじてかわした。

敵はさらに後からもおそってきた。

「やっ！」

体勢をたてなおし、ふりむきざま手裏剣を投じて後の敵を釘づけにした。

前面の敵がややひるんだ。目のさめるような伝兵衛の技にたじろいだようだ。

その隙につけこんで伝兵衛は威嚇の手裏剣をとばし、脱兎のごとく溝の中をはしった。溝の水をはねとばし、行く手の夜霧をめざして、はしりにはしった。

伝兵衛は脚力には自信があった。普通人の倍の早さをもっている。しかも溝の中でも地上とお

なじようにはしれた。敵からすれば溝の中の影を視界にとらえるのは至難であった。追いすがる敵があったが、たちまちのうちにひきはなしていった。

夜霧の中に突入し、霧の中を駆け、駆けぬけた。

霧の先には目ざす乗物がはるか遠くにかすんでみえた。乗物はさいぜんよりもあきらかに足取りがはやくなっていた。

すべるような疾さで三味線堀のほうへすすんでいる。伝兵衛ははしりながら自分の左二の腕に痛みがうずいているのをこのときはじめて知った。

痛みから推して、相当の深傷である。血がとめどなくながれでているのがわかった。痛みに耐えて、疾走した。

苦痛がひどくなり、体がおもくなった。意識がしだいに遠のきかけた。伝兵衛の体力はあきらかにおちていた。脚力もおとろえてきた。足に重石をひきずっているようだ。

追いすがられた場合、敵に討ちたおされることも十分予測された。精神力を持続できるか、それとも体力がさきに尽きるか、その鍔迫り合いであった。

乗物との距離はぐんぐんせばまったが、視力が急速におちてきた。前方にとらえていた乗物がときおり視界から消えかけた。

伝兵衛が意識を集中すると、乗物は視界にうかびあがり、すこしでも気をゆるめると霧の中にぼやけてしまう。

しだいにかすんでいく目を必死にこらして、伝兵衛ははしりつづけた。

乗物が三味線堀のほとりまでいたって、そのまえの佐竹侍従の上屋敷へ吸いこまれていった。

（……！）

見とどけたところで、伝兵衛はどっと路上にたおれこんだ。

（佐竹屋敷！）

たおれた体をもう一度必死でおきあがらせて、伝兵衛は三味線堀へちかづいていった。そこまでいけば、後からくる敵をなんとかかわすことができるとおもった。

手弓

朝、百次郎は稲荷小路の屋敷をでて、牛込御門をわたった。

神楽坂の勾配をゆっくりのぼっていくと、のぼりつめたところに、〈神楽坂の毘沙門様〉として知られている善国寺がある。麹町にあったものが今年の五月ここに移転してきていらい、縁日の寅の日には人々が大勢あつまってきて雑踏をきわめているときいていた。

おなみに一度縁日にさそわれたことがあるが、まだその約束ははたしていない。

寅の日以外は、それほど人通りも多くないしずかな坂道である。一本道をどこまでもいくと、轟橋をわたった先に、幕府の御持弓組の組屋敷が東西数丁にわたってびっしりとつづいてい

る。このあたりは寺院と武家屋敷の地域が入りまじったところである。

百次郎は御持弓頭丹沢九八郎の屋敷をおとずれた。

丹沢九八郎は出仕のまえで、まだ在宅していた。小柄だが、五十年輩の、古武士の風貌をもった男である。

初対面の挨拶をし、

「丹沢様にぜひともおしえをうけたいことがあってまかりこしました」

とのべると、ちいさいながら綺麗にととのえられた客間へ招じあげられた。

御持弓頭といえば、幕府弓隊の隊長である。御持筒頭とともに将軍を護衛する役目に任じている。丹沢九八郎は弓術の達人であるばかりでなく、古武道についても心得のある幕臣屈指の武芸家として知られている。

「いかような……」

丹沢は、百次郎が中町奉行与力であることを知らぬ。駿河台の天地一心流道場の主人とみているわけだが、親子ほども年のちがう百次郎にたいしていささかも尊傲さのない態度を見せた。

百次郎は脇差にそえて、みじかい矢を一本腰にさしていた。それを抜きとって、

「一昨々日、このようなものを射かけられ、手前のつれがあぶなく命をおとすところでございました。ちかごろではとんと見うけませぬ武器でございます。丹沢様ならばこれがどのような武器かおわかりになろうかと持ってまいったしだいでございます」

とことわって丹沢へわたした。それは両国橋上で源之助の腿から百次郎自身がぬきとった矢であった。

「半弓の矢ではないな」

丹沢は手にとるなり言下にそういった。それから矢に見入って、五指をひろげてその長さをはかった。

「手前がはかりましたところ、二尺四寸六分でございました」

というと、丹沢は思案しつつうなずいた。

「普通、弓の矢の長さは三尺二、三寸、半弓の矢ならば三尺くらいのものだ。これは半弓の矢よりもだいぶみじかい」

弓と半弓との大きさのちがいは、門外漢がかんがえているほどのものではない。弓が六尺余寸であるのにたいして、半弓は六尺弱の長さである。

「小型の半弓、といったものがあるのでございましょうか」

ときくと、丹沢は無言で思案をつづけた。

「そのようなものは……」

といいかけてから、丹沢の顔がやや愁眉をひらいた。

「今では絶えておるが、戦国のころにはあった、と兵法の書物で読んだ記憶がある。半弓よりもさらに一尺ほどみじかい武器じゃ。そう……、手弓と申したはずじゃ」

「手弓、でございますか」

百次郎にしてもはじめてきく武器の名であった。

「手弓の矢ならば、丁度これくらいの長さになる。おそらくお手前がたをおそった武器はそれであろう」

丹沢は確信を見せてこたえた。

「そのような武器が今ごろ……」

「絶えたことにはなっておるが、もしあったとしても不都合はなかろう。手弓は半弓よりもあつかいが手軽なうえ、武器として弓や半弓におとるものではない。かつて騎馬の戦がさかんであったころ、馬上から疾駆しながら射はなつ武器としてつかわれていた」

百次郎はうなずいた。

手弓は長さ五尺くらいの、きわめて実戦的な武器だったと想像される。これならば竹の反撥力がつよいから、飛距離も殺傷力も半弓にくらべておとらぬばかりか、連射が可能であることは、一昨々日身をもって体験ずみである。

「弓も半弓も射るにさいして、右手を肩のうしろまでいっぱいに引きしぼるが、手弓ならば顔のあたりまで引けば十分であろう。したがって的にあたる率は弓や半弓よりもきわめて高いとかんがえられる。手弓が絶えたのは、元和偃武いらい、武芸も形式や姿のうつくしさがとうとばれ、実戦につよい手弓よりも、射撃の姿勢と形にすぐれた弓が好まれるようになったからだろう」

丹沢は古武道につうじた武芸家らしい意見をのべた。

百次郎は心中で大きなうめき声をあげていた。未開の地域や山岳地のようなところならば、まだ手弓がつかわれていたとしてもけっしておかしくはないのだ。

「左様でございましたか。目をひらかれたおもいがいたします。ご教示ありがたくうけたまわりました」

わざわざ丹沢をたずねた甲斐は十分にあった。

「すこしはお役にたてたであろうか」

謙遜する丹沢に謝辞をのべて、百次郎はそこを辞去した。

帰途について、百次郎は三日まえの夜の、異装の集団の襲撃ぶりをまざまざとおもいおこした。伊達藩は領国内や周囲に深い山岳地をひかえているうえ、ことのほか古きものを今に多くのこしている国柄である。伊達の武力集団が手弓を自由自在にあつかったとしても不思議はなかった。

百次郎は牛込御門をふたたびくぐり、そこから本所へむかった。

昼をまわったころ、本所側へわたり、大島町の裏通りに、〈忌中〉の札をはりだしたちいさな借家を見つけた。

夏目新蔵の葬儀はひっそりとおこなわれていた。あくまでも浪人夏目新蔵の死としてあつかわれたのである。

玄関を入ると、とっつきの六畳間にちいさな祭壇がもうけられ、位牌がおかれていた。

のこされた家族は女房のおしず一人であり、彼女が喪主であった。親類縁者の姿はわずか数人しかなく、そのほかは身分をやつした中町奉行ゆかりの者たちである。

かなしみを必死でこらえているおしずの身重の姿が、参列者の涙をさそった。おしずは今年二

十歳の若妻だった。とついで一年余月しかたっていないので、まだ娘の面影をのこしている。どういう経緯で夫が死にいたったかも知らされていない様子である。

しかも跡継ぎがいないので、中町奉行同心夏目家は断絶になる。もしおしずが男子をうめば、成長の暁にはお家が再興される可能性がある。女子であれば、養子縁組によって再興される可能性ものこっている。

百次郎の本心は百万言もの悔みをいって、おしずをなぐさめてやりたかった。けれども、今それをいってもまったく甲斐がない。そのかなしみは中町奉行にはたらく者全員の宿命なのであった。

新蔵への本当の供養は、伊達藩の陰謀をうちくずすこと以外にはなかった。

百次郎はこころならずも形式的な挨拶だけのべて、仏前で合掌し、しずかに新蔵の冥福をいのった。

上司である杉村三太夫は姿を見せていたが、浦上はきていなかった。日をあらためて、人目につかぬよう供養にくるつもりなのだろう。

「赤石殿」

帰途についたとき、杉村から声をかけられた。

杉村は腕っこきの古参与力として中町奉行内に知られている。

「おひさしぶりにございます」

同役とはいえ、杉村は年齢も経験も百次郎をはるかに上廻っている先輩与力である。年はもう

五十以上になっているはずだ。

現在杉村がどういう任務にたずさわっているかは知らないが、今から二十数年まえ彼は周囲をあっといわせる大きなはたらきをした。弱年ながら明和の大事件にたずさわり、山県大弐、藤井右門らを探索追及して大手柄をあげた。藤井右門を追って追って、追いつめた杉村のはたらきぶりは今でも中町奉行の内部でひそかな語り草になっている。

百次郎は杉村とまれに顔を合わすことがあるが、言葉をかわしたことはほとんどなかった。

「大変な仕事をうけたまわったものだな。ご苦労のほどお察しする」

杉村は人気のない掘割にでたとき、さりげなくいった。自分の配下をそのためにうしなったのであるから、彼の関心もなみなみではないのだ。

「大層申しわけないことをいたしました。お詫び申しあげます」

百次郎は立場上詫びをいった。

「これはいたしかたのないことだ。命をおとした夏目が不運であったとかんがえるしかない。赤石殿、気になさらずに、存分のはたらきをいたしていただきたい」

「有難うございます」

「相手は強敵だろうが、中町奉行の底力を見せてもらいたい」

杉村は百次郎が探索している相手が何者であるかいささか知っているような口ぶりである。意外な気がしないでもなかった。

「なかなか手ごわい相手でございます」

当りさわりのない返事をすると、

「中町奉行がこれまで相手にした最大、最強の敵かもしれない。けれども赤石殿が全力でぶつかるにはふさわしい敵であろう」

いっそう気になる答がかえってきた。

「ご存知でございますか」

「伊達でござろう」

ずばりいいあてられて、百次郎は一昨々日の屈辱をおもいだした。けっしてあなどったわけではなかったが、伊達を相手にして緒戦で大きな痛手をこうむってしまった。

夏目新蔵をうしない、源之助と伝兵衛とがかなりの深傷を負った。百次郎は源之助とともに大川へとびこみ、一丁ばかり懸命に泳いでようやく危地を脱することができたのだった。

伊達家年例の花火の夜に、まさかあれほどの大胆な迎撃態勢をととのえているとはおもいもかけなかった。まだ小手調べくらいの気持で乗物を追ったこちらの油断を十分見すかして、伊達は果敢に戦闘部隊をくりだしてきた。

伊達は想像していたよりもさらにはげしい気魄と戦力でこちらにぶつかろうとしていることがわかった。伊達という相手をはじめからかんがえなおさなければならぬと、百次郎は唇をつよくかみしめた。緒戦の失敗を素直にみとめなければならなかった。

失敗が緒戦におこったのが、せめても不幸中の幸いであった。

「未熟でございました」

二度とはこの失敗をくりかえしてはならぬという気持で百次郎は先輩与力にいった。当代において、これほど大胆不敵に幕府にたいして異心をあらわすことのできる藩があるとわかっただけでも驚異であった。

（伊達の力の裏づけは、一体どこに？）

いかに雄藩とはいえ、幕府とくらべるならば、その力には天と地のひらきがある。軍事力、経済力どちらをとっても比較にはならないのである。謎の出発点がここにあった。

「杉村様、今後お力をお借りすることがあるかもしれません」

伊達について多少とも知るところがあるとうかがわれる杉村に、百次郎はいやがうえにも興味をそそられた。

「わたしにできることなら、お力ぞえいたそう」

杉村の態度はケレンのないものだった。

「よろしくおねがい申します」

百次郎は挨拶をのべて、杉村とわかれた。

稲荷小路の屋敷にもどって、百次郎は道場につづいた住居へむかった。

そして自分の居間ではなく、源之助の部屋へ入っていった。

源之助は傷養生のために床についているはずであった。けれども部屋の中央に床はとってあるが、そこに源之助の姿は見えなかった。

部屋の片隅に文机がおかれ、その上に堆く書籍や古文書の類がつみかさねられて、それに埋

まるようにして源之助は片足を投げだしてすわっていた。それればかりでなく、熱心に書籍に目をとおしていた。

「いかがでしたか、葬儀は」

おなじ中町奉行同心という身分だけに、源之助は新蔵の遺族を気にかけていた。体さえ不自由でなかったら、彼も葬儀にでるつもりだったのだ。

「妻女にはまことに気の毒なことだ。腹の中の子は生まれるまえからの父なし子になった」

百次郎がいうと、源之助の眉がくもった。

「……」

源之助が伊達にたいしてはげしい敵意をもやしているのが感じられた。

「おまえは今は養生が第一だ。まず体を元どおりにすることだな。びっこをひいていては、とても闘える相手ではないぞ」

「怪我をしたために、伊達という大名がどういうものか、だいぶくわしく知ることができました」

負けん気つよく源之助はいった。

「ずいぶんしらべたようだな」

「伊達がただの大名ではないことがわかりましたよ」

机におかれた書籍は〈群書類従〉〈寛永諸家系図伝〉〈藩翰譜〉などである。これらの大部の書籍で伊達家のところを丁寧にしらべることによって、伊達の始祖から現在にいたる歴史、大名としての成立、繁栄の過程などをつぶさに知ることができる。百次郎は浦上から命をうけた直後、伊達を根本からあらいなおすために、幕府祐筆方へ手をまわしてこれらの書籍をあつめてきたのである。

百次郎にしても、源之助にしても、伊達といえば徳川幕府成立後の伊達藩についてしかほとんど知らなかった。陸奥守、奥州六十二万石、仙台堀蔵屋敷といった幕藩体制以後の概念でかんがえたのでは、伊達藩を本当に理解することにはならないのだった。

それ以前の伊達といえば、名実ともに〈奥州王〉を誇示し、天下の半ばにおよぶ（太平記）といわれる陸奥五十四郡と出羽十二郡をあわせた六十六郡の約半分に達する三十余郡を支配下におさめていた。藩祖政宗は覇者秀吉の動向いかんによっては、奥州諸豪族を糾合して、天下の軍勢を向うにまわす肚づもりをかためていたといわれている。

現在の伊達は、昔日の面影をうしなってはいるが、まだ何程かの潜在力はもっているはずである。その潜在力をはかり、彼等の理念をうかがうには過去の伊達を知り、現在と将来にわたる伊達を推測することが必要なのである。

伊達は戦国成りあがりの大名ではなかった。現在では稀有な例になった鎌倉以来の武門の名家である。

しかも家系をたどれば、鎌倉よりもさらに以前にさかのぼることができる。伊達の始祖は藤原氏である。藤原山蔭の子孫朝宗からおこった。朝宗ははじめ常陸国伊佐庄中村に住んだが、源頼朝の奥州征伐に四人の息子を従軍させ、その戦功によって伊達郡をたまわってこの地にうつり、

伊達を称した。

九世の初代政宗のとき、東北武将の随一にかぞえられるほどの勢力になり、十一世持宗のころ、

『奥州に三千騎を領する武将は七人、伊達ひとり七千騎』

と称せられ、武将中の武将の地位を確立した。

そして持宗のときから室町将軍の諱を拝領する慣例をうみ、成宗、尚宗、稙宗、晴宗とつづいた。

十四世稙宗は〈左京太夫〉に任官し、〈奥州守護職〉につき、十五世晴宗は〈奥州探題〉の地位をえて、奥州の武家公権はことごとく伊達に統合された。

だが、本当の奥州の覇権を決定づけたのは、十七世政宗であった。政宗は南奥の会津守護蘆名義広と会津摺上原にたたかってこれを打ちやぶり、二十三歳にして奥州の真の覇者となったのである。

ところがその政宗のまえに立ちふさがったのが、覇者の中の覇者豊臣秀吉であった。政宗は奥州の統一をいそいでいたが、秀吉による天下統一の大事業も急速な勢いですすんでいた。

政宗はとりわけ時代のうごきに敏感であった。秀吉への認識にも欠けるところがなかった。時代が秀吉の天下統一にむかって確実にうごいていることを察知すると、彼は時間切れ寸前まで伊達の命運を賭けた勝負をつづけた。その結果が、かの有名な小田原参陣である。

政宗は天下人の軍門にやはりくだりはしたものの、最大限に伊達の実力を認識させることに成

功した。秀吉を相手に総力戦をやって、あたら名家をつぶしてしまった北条とはその点でいちじるしくことなっている。

秀吉の後の天下をうけついだ家康にたいしても、政宗は基本的にはこのすぐれた時代感覚と柔軟さで対応し、臣従した。その時代感覚と柔軟さとは、情勢の変化によってたちまちおのれを変貌させる政略をもはらんでいるのである。政宗は秀吉にたいしても、家康にたいしても、しばしば公然たる秩序違反をくりかえして天下人の怒りを買った。

奥州の獅子は死んだふりを見せつつ、世にもう一荒れ二荒れかならずくるだろうと天機をうかがっていた。その野心を垣間見せたのは、関ヶ原役である。

政宗は家康から五十万石加増の約束をとりつけた一方で、上杉勢とたたかいつつ、南方へむいた中原の覇府をもとめて仙台築城を決定した。仙台城が平城ではなく、当初は近世の城にふさわしくない山城であったことは、政宗の天下への野望をいかんなくうかがわせるのである。

そして彼の真骨頂は、慶長十八年支倉常長を欧州へ派遣したことにおいて存分に発揮された。

日本から支倉をともなってローマ法王庁への使者に立ったソテロは、政宗のことを、

『日本にて一番の大名、知恵ふかき人にて御座候えば、日本の主になり申すとのとりざた御座候』

とのべ、政宗が日本で将軍につぐ人物で、

〈奥州王〉

であると法王庁に紹介している。政宗自身はこの遣使であたかも主権国家の国主のような外交

権を行使したのである。

しかもこの使節派遣の目的は、欧州と伊達藩との修好通商条約をとりむすぶことにあった。諸大名は幕府から過重な軍役と土木工事を賦課され、さらに参勤交代で二重生活を余儀なくされ、藩財政は慢性的に窮乏していた。

政宗はそれを一挙に打開する方法として、独自の海外貿易を意図していたのであった。当時、天下の諸大名は誰もかんがえていなかった破天荒な独自の目論みであった。けれどもこの海外との交渉は不成功におわり、政宗の雄大な計画はとうとう実現をみなかった。

政宗は寛永十三年に死去し、それ以後忠宗、綱宗、綱村、吉村、宗村、重村、斉村と藩主はつづいたが、政宗にいくらかでも比肩できるほどの人物はでてこなかった。傑出した藩主があらわれなかったことが、幕藩体制下における伊達藩のしあわせであったというべきかもしれぬ。それだからこそ幕府の疑いをうけて取りつぶしや改易の憂き目に会うこともなかった。

寛文年間には伊達騒動という大醜態をおこしながらも減封にもならずにすんだのは、伊達藩が幕府をおびやかす存在ではないとみとめられていた証拠であろう。

今や伊達藩主にはかつての奥州王の誇りも覇気も見られず、藩士たちにも武門の名家たる気位も士気もうしなわれたと世間的にもみられているのだ。

「おまえなら、現在の伊達藩をどうおもう？」

ややあってから百次郎は源之助に問うた。

「伊達はやはり並みの雄藩ではありませんでしょう。今もって四十八館制と名づけた特殊な地方

知行制をとっていること。石高制をとらず、いまだに鎌倉、室町時代の貫高制にこだわっていることからも、伊達が天下諸藩の中で異色の藩であることがうかがわれます」

「伊達藩は古き時代のさまざまな習慣や制度を今にひきずっている。だが、それだけではあるまい」

「藩祖がつたえのこした気風が今も伊達藩の背骨になっていくらかはつづいているとおもわれます。奥州王の誇りはけっして消えてなくなったとはおもわれません」

源之助が言葉にしたことは、百次郎の心中にあることとおなじであった。

腐っても鯛、だと定信は伊達藩について形容したが、百次郎自身も傑出した藩祖や藩主がかかげた理想や理念といったものは、かならず後の世へ連綿とうけつたえられていくものだとおもった。それはひろく天下の諸藩を見わたした場合にも、おなじことがいえるのだ。

「しかも今、伊達は一昨々日にもみるとおりふてぶてしいまでの自信と気魄をもってうごきだしておる。伊達の策動は越中守様をして老中職を投げうたせたほどのものである」

「伊達の力の背景がわかれば、伊達の意図するところがはっきりとわかってまいりましょう」

武力の背景になるものといえば、ふつうにかんがえるならば経済力であり、さらに政略である。伊達藩には四十八館に拠る二十人以上もの大名級の家臣がおり、三万四千人におよぶ天下第一の数をほこる大家臣団を擁している。けれどもそれくらいの家臣の数が幕府をおびやかすほどの力の裏づけになるはずはなかった。

「それをあきらかにするには、どうしても伊達の本国へもぐりこんでみなければならぬ」

「もう一つは、佐竹、でございましょう」
「うむ、佐竹だ」
三日まえの夜、伊達藩下屋敷をでていった五丁の乗物の行方は、残念ながら一丁だけについてしか判明しなかった。伝兵衛がつきとめた佐竹家が伊達のうごきを解く一つの鍵になるとかんがえられた。
佐竹といえば、秋田藩二十万五千石。現在の藩主は九代義和である。奥州では伊達と会津松平につぐ大藩である。
佐竹も鎌倉時代から常陸に勢力を張った名族であり、戦国のころ伊達と幾度びも鉾をまじえたことがあったが、慶長年間に秋田へ移封されてからは伊達とはかくべつなかかわりがなくなった。おなじ奥州に封土を持つ大名という以外に、両者のあいだに共通するものはなにもかんがえられなかった。
仙台と秋田にわかれているので、相争う利害もないはずだった。それだけに伊達と佐竹とのあいだに内密なかかわりがあるとすれば、一つの大きな発見になるのであった。
義和は天明五年父義敦の後をついで藩主となり、内政にはげみ、藩内で〈寛政の改革〉というべきものをおしすすめ、名君の声望をえている。
「伊達と佐竹とのかかわりがわかれば、行方のわからなかった残り四丁の乗物についても手がかりがつかめるのではないでしょうか。さらにもう一つ、両国橋でおそいかかってきた敵の正体と、あの飛び道具は……」

源之助は大きな衝撃と屈辱をかの一団からこうむっていた。そこのところを抜きにしては、これから探索をつづけるのは困難とおもわれた。
「敵の正体をたしかめられなかったのが残念だ。だが、手がかりがつかめた」
といって、百次郎はさいぜんから腰にさしていた矢をとりだし、丹沢九八郎から得てきた手弓についての知識を源之助に披露した。

女ごころ

お蝶が客をおくってもどってくると、常陸屋勘兵衛がきていた。
勘兵衛はこの夏いらい、二日に一度は富田屋にかよってくる常連である。
「毎度ごひいきくださいまして……」
お蝶はにこやかに挨拶してから、
「あちらの小部屋のほうへおあがりください。そのほうがおちつきましょう」
といった。
「いや、わたしはここでいい。女将、気をつかわないでおくれ」
勘兵衛は気さくにそういって、銚子をとりあげた。

お蝶はそれを横からとって、酌をした。

「常陸屋さんこそ、いつも気をつかってくださって……」

勘兵衛は、年頃四十半ばで恰幅もいい。伊勢町の大きな米問屋常陸屋の主人である。人柄は好もしいし、けちくさい飲みかたはしたことがない。勘定も帖面にしたりしないで、その都度きちんとはらっていってくれる。こんな居酒屋にはもったいない客である。

男前も、いける。さらに都合のよいことは一昨年女房をなくしており、今は男やもめだ。お蝶にとって、勘兵衛はきらきらかがやいて見える男である。

お蝶は長年泥水稼業をつづけてきたので、男を見る目はこえている。見ただけでも大体判断できるし、ちょっと言葉をかわせば、男を値踏みするくらいはできる。お蝶の目から見てかがやいてみえる男など、そういるものではない。

「年中きて、商売の邪魔をしてるようなもんだが」

勘兵衛は耳ざわりのいい世辞をいうのも上手なのだ。

「いえ、富田屋は常陸屋さんでもっているようなものです。今日はお待ち合わせで……」

お蝶は世辞をかえしたが、なんとなく言葉がかたくなった。ちかごろ、勘兵衛をやや意識しすぎているのである。

居酒屋商売をしていれば、客の気持はたいていわかるものだ。酒を飲みにくるだけの客、女将や小女を口説きにくる客、さまざまである。居酒屋とはいっても、酒を売るばかりが商売ではない。体はむろん売らないが、相手によっては、お蝶だって愛嬌も媚びも売る。

「ほかでもないんだが、一度女将に萩を見てもらいたいとおもっていたんだ。うちの庭の萩が今まっさかりで、見物の人が毎日きているほどだよ。暇をみて、出かけてこないかね」

ぼつぼつこういう誘いがかかるころではないかとおもっていたところだ。それに勘兵衛の家の萩が評判であることはお蝶も知っていた。常陸屋は萩寺で有名な本所竜眼寺の檀家で、そこの住職から先年幾株かわけてもらったのが立派な株になったということを勘兵衛からきいていた。

お蝶の顔がはなやいで、白い歯がこぼれた。

「まあ、本当におさそいくださるんですか。この秋まだ萩を見ておりませんし、萩寺や三囲神社、秋葉権現までかける暇はなしで、今年は見られないかとおもってましたのに」

「それならば丁度いいじゃないか。数日のうちに招待しよう」

「是非、うかがわせていただきます」

二つ返事で応じたが、お蝶のこころはそれほど晴れやかではなかった。勘兵衛の家へ萩見にでかけるのはいやではないが、百次郎にもし知れたら……、というおもいがかすめたのだ。

百次郎とは、一度きれてから今は何ということはない間柄である。勘兵衛の家へいったことが知れたとしても、彼はおそらくなにもいわないだろう。

お蝶も百次郎に遠慮すべき理由はすこしもない。それなのに百次郎のことが気がかりなのは、やはり惚れているせいなのだ。

「それじゃあ、明後日はどうだろう」

勘兵衛は少々照れかくしもあるのか、盃をぐいとあけて言った。

「たのしみにしております」

喜色をうかべてうなずいてみせたお蝶だが、内心ではやはり百次郎のことが気がかりだった。勘兵衛は今のところいい客にすぎないが、百次郎は大事な男なのである。いい客がいつ大事な男にとってかわるかもしれないが、これは女の立場として仕方ないことであった。

どう頑張ったにしても、女は自分の意志だけでは生きてはいかれない。周囲や状況によって自分をまげなければならぬこともある。流れにそわなければ生きていくのがむつかしい。女だって意地をとおして好きなように生きていきたいが、それにはどうしても限界がある。以前、百次郎を裏切って近江屋九右衛門という人の妾になったのも、それとおなじ理由であった。

お蝶はまだ勘兵衛にこころをうごかされてはいないが、今後どうかわっていくかわからない。女というものは所詮売りものであり、売りごろがある。どんないい女であっても、時期をうしなっては売れのこるか、安売りをしなければならなくなる。

かつて、近江屋九右衛門に見そめられたのは、お蝶にとっても丁度売りごろだった。そのときおもいきった決断をしていたからこそ、こうして今小さいながらも居酒屋を持つことができたのである。

お蝶は奥州南部藩領の北巻で生まれた。北巻は北上川上流の地で、花巻よりももっと北へいったところにある村である。

奥羽山脈と北上山地にはさまれた平野部の農村で、その周辺地帯は農業以外にこれといって副業もない土地柄である。

村の大半は貧農であった。男も女も、七つ八つのころになるともう田畑にでて、親の農作業の手つだいに明け暮れるのである。凶作の年には、子供は人買いに売られた。労働力がこの地方のいちばん高価な商品であった。

この地方は北上川の舟運によって石巻につうじており、さらに石巻から海路仙台や、江戸とむすばれている。北上川を遡航してくる平田船は反物、古着、木綿、陶器などを江戸や仙台からはこびこみ、くだりの船は米や麦、大豆などの農作物をはこんでいく。人買いたちはこの船に労働力をつみこんで、石巻へはこんでいった。

〽北上川はどんどとなれば十七は
　今すぐ乗りだすなりの船
　あの船は商い船か女郎船か
　商こもあれば夜を買う船……

流域ではそんな麦打唄がしきりにうたわれていた。

人買いに売られるのは、仙台や江戸へでていく奉公人ばかりではなかった。年ごろの娘たちの大方は女郎に売りとばされていくのである。

女郎に売られなかったお蝶はまだしも幸せなほうであった。お蝶が売られたのは十五の年の秋

だった。天明の大飢饉の年である。

後からおもうと、両親は十七くらいになるまで待って女郎に高く売るつもりだったのかもしれなかった。ところがさしせまって飢饉の年に人手にわたさなければならなくなったため、まだ幼ない娘を女郎に売るのはしのびなくなったのだろう。

その年のことは今でもはっきりとおぼえているが、年明けから異常気象がつづいていた。前年の極月（十二月）が異常にあたたかく、真冬だというのに菜種の花がいっせいに咲きだしたり、筍が群がりでて、まるで陽春がとつぜんおとずれたとおもうばかりの気候であった。極月のこんな馬鹿陽気は前代未聞の天災がおこる前触れだと、村の大人たちが噂していた。お蝶自身も、なにかいやなことがおこりそうだと予感していた。

年が明けたら、今度はとつぜん異常寒気がおそってきた。そのうえ雨が降りつづいた。

春がすぎても余寒が去らず、綿入れを着て囲炉裏にあたりながら夏をむかえた。稲にはもっとも痛手となる偏東風が吹きまくっていた。

「凶作になる。今年は大飢饉がくるだろう」

村人たちは苦悩の色をふかめて寄るとさわるとその話であった。

水田の稲穂は天へむかって突っ立ち、異様なほど青々としていた。穂はでたものの日照不足で花もつけなければ、受精もしないのだ。しかも前年も不作で、南部藩領は六分の作柄だったから、今年凶作がくれば、南部藩はおろか奥州全体が大飢饉に見舞われることはうたがいなかった。

土用に入ったころ、北巻の村々に人買いの姿が出没しはじめた。彼等は毎年秋口になるとかならずやってくるが、凶作の年は一ヵ月も二ヵ月もはやく姿を見せるのだ。

お蝶も覚悟をかためていた。

「お蝶、江戸へいってはたらいてくれないか」

雑穀類をたべつくして、百姓の命綱といわれる種籾にやむなくすこしずつ手をだしはじめたころ、両親にきりだされてお蝶はうなずいた。そうする以外になすすべのないことがわかっていたからだ。誰もうらむ気にはならなかった。

お蝶はおなじ村の数人とともに平田船にのせられた。船には上流の村々から売られた男女が十人ばかり乗っていた。船は北上川を石巻までくだっていった。そこから積み荷も同然、大型の弁財船につみかえられて荒海へのりだし、幾日もかかって銚子についた。そこからふたたび高瀬船にのりかえて利根川をのぼり、今度は江戸川をくだって、大川へ入りようやく江戸についたのである。

江戸の口入屋をつうじて商家の女中になったのをふりだしに、お蝶は食べ物屋や居酒屋の小女、茶屋の酌取女……などさまざまな場所と奉公口を遍歴していったのである。

江戸橋の北詰から北へむかう入堀の西側が伊勢町で、米河岸とよばれている。入堀はさらに西へまがって堀留になっているが、その南北の河岸も伊勢町である。

伊勢町は諸国から米がつく町であり、米問屋の町である。河岸には大きな米蔵がならび、米問

屋が櫛比している。伊勢町のとなりは本船町であり、まえは小舟町で、いずれも問屋街である。掘割にはたえず出船、入船が輻湊し、積荷、着荷で河岸はいつもさかんににぎわっている。このあたりはいわば、大江戸の台所である。

入堀が西へまがる曲りっ鼻のところに、道浄橋がある。その橋袂に、常陸屋の看板と大暖簾をだした勘兵衛の店がある。

角店であり、地の利をしめている。店がまえも、つくりも堂々としたものである。

お蝶は人形町通りにある茶屋で勘兵衛と待ち合わせ、そこから案内されて道浄橋をわたった。橋の下を、米俵を山とつみあげた川船が舳先を接するように何隻もこぎすすみ、橋桁のすぐちかくにある船着場に接岸していった。

「まあ、常陸屋さんの船ですね」

お蝶がそれを見て声をあげると、

「下総の銚子から着いた米船だよ」

勘兵衛は船を見おろし、大様にこたえた。常陸屋の店内から番頭や手代、それに米人足たちが大勢でてきて、船を出むかえている活気のあるにぎやかな光景が見えた。

「銚子だとすると、このお米は奥州から」

お蝶はなつかしい気持になった。

「そうか、女将も奥州だったな」

「ええ」

「常陸屋があつかってる米の大半は奥州米だよ。女将とは同郷だね」

勘兵衛はわらった。

常陸屋にかぎらず、江戸に出まわっている米の大半は奥州米である。しかもその三分の二は伊達領の仙台米だ。だから江戸では仙台米を建米というのである。

「わたしもこのお米とおなじように、川船にのって北上川をくだり、石巻から海をわたって、銚子からまた川船で江戸へきたんですよ」

江戸に売られてきた自分の過去をお蝶がつつみかくさず人にはなせるようになったのは、くらしの安定してきた最近のことである。それまでは、かなしみや屈辱でとても人にはうちあけられなかった。

「女将は大層苦労したんだったな」

「他人よりもすこしは余計に苦労したかもしれません」

てらいもなく素直な返事ができた。

お蝶は過去の苦労が自分をみがきあげたと今ではおもっている。苦労にうちかってうつくしくなり、賢くなり、魅力をつみかさねていった。そして今のお蝶は多少の自信にささえられている。しがない居酒屋の女将でありながら伊勢町でも屈指といわれる米商人と堂々とした交際ができるのも、そのためである。

お蝶はしばらくたたずんで、大勢の人足が船着場から米蔵へ米俵をはこびこむ光景や、店頭のにぎわいなどをながめた。米俵を山とつんだ大八車がひっきりなしに往来をわがもの顔でいきき

しており、店頭で大声がとびかっている。

似たりよったりの光景が米河岸の町筋につづいている。お蝶はこの活気と雑踏にひきこまれていきそうな気になった。

「ここの河岸から活気が消えたら、江戸中が大変なことになりますよ。おそらく飢え死にが大勢でるだろうね」

江戸の総人口の食糧を伊勢町の米問屋がささえているという自負を勘兵衛はもっているようだ。それは頼もしくこそあれ、傲慢ないいかたにはきこえなかった。富田屋で見る勘兵衛とは少々ちがった、男くさい一面が感じられた。

今見る勘兵衛はどこまでも奥行きがふかく、器量の大きさがうかがわれ、お蝶は一瞬その深さと大きさにつつみこまれていきそうになった。

(こんな男にささえられ、可愛がられて一生をおくるのもわるくはないな)

そうすればなんの苦労もなく、この世の中を気楽にわたっていけるだろうとかんがえた。

ものごころがついていらい長い貧乏ぐらしをくぐりぬけてきた女にとって、勘兵衛は夢のようなあこがれの対象である。

(後添いにほしいのか、それとも妾にしたがってるんだろうか)

お蝶は勘兵衛の自分への気持をさぐってみたかった。

お蝶は夢の多い女だが、女が一人で世の中を生きていく場合、損か得かを冷静に判断しなければならぬことを知っている。独身の女だから恋だってしていたいが、金も安定もほしい。親が子

を売りとばさなければならないような貧しさはもうたくさんである。貧しさへの恐怖が身うちにしみこんでいる。それが勘兵衛のような男へのあこがれをいだかせるのだ。

無意識のうちに、お蝶は勘兵衛と百次郎とをひきくらべていた。

百次郎は申し分なくすばらしい男である。理屈をぬきにして、百次郎には男の魅力が天性そなわっている。お蝶が今までに出会ったうちで最高の男である。けれども彼はお蝶になんの約束もしてくれない。

今後もあまり期待ができない。それがお蝶にとってはつらいところである。お蝶のこころは束の間、打算と真情とのあいだをゆれうごいた。

「さあ、中でひと休みしよう」

勘兵衛にうながされて、われにかえった。

店舗の奥が住居になっている。勘兵衛は店舗の中をちょっと見せてから、住居のほうへ案内した。

檜材をぜいたくにつかった金のたっぷりとかかった屋敷である。掃除や整頓もよくいきとどいている。

亡妻がのこしていった子供たちがいるはずだが、姿も声もない。勘兵衛が遠ざけたものらしかった。

彼の居間にみちびかれ、

「昼間から酒というわけにもいかないから」

と宇治から取り寄せたという高価な茶と菓子を振舞われた。

勘兵衛は気さくにもてなしてくれたが、やはり富田屋の中でさしむかいでいるのとは、気分が大違いである。おたがいにふだんよりも口がおもくなった。

人を遠ざけた男の城の中だけに、お蝶は万一のことも一応は配慮しなければならなかった。勘兵衛ははしたない男ではないが、どんな場合に邪心がめばえるかもわからない。

ゆるすまい、という意志さえしっかりと持っていればどんな場合でも切りぬけられるとおもうのはまちがいである。お蝶はかつてそういうまちがいを信じたばかりに、屈辱的体験をなめたことがある。

「じゃあ、庭を案内しよう」

お蝶がいいだそうかとおもったとき、勘兵衛にそういわれてほっとなった。

「あれからずっとたのしみにしておりました。目の保養をさせてください」

そうこたえると勘兵衛はにこにこして廊下へ立ち、そこからお蝶にも庭下駄をすすめてくれた。

お蝶は勘兵衛にしたがって、庭へでた。

そう大きな庭ではないが、水がひいてあり、池があって、そのまわりや竹垣にそってかなり大きくなった萩の株が叢生し、紫紅色のちいさな花を無数につけている。

「まあ、すばらしい」

お世辞ではなく、お蝶は目をみはって嘆声をあげた。

贅をつくしているわけではないが、とても感じのいい庭である。ことさらしくこしらえた幽

趣閑雅なおもむきはないが、庭のつくりはみやこびず、かといって鄙びてもいず、自然な風情があって、野趣も感じられ、お蝶はとても気に入った。今をさかりと咲きほこる萩には秋の風趣がふんだんに匂っている。

「この庭にも四季折々にいろいろな花が咲くけれど、わたしは萩がいちばん気に入っているんだよ」

多少自慢げに勘兵衛はいった。

「こんなに結構なお庭があって、うつくしい萩が咲きみだれて……、なんとすばらしい……」

毎日を巷の中でいそがしく立ちはたらいているお蝶にとっては、こころあらわれるような秋の庭の風景である。

「どうだね、気に入ってくれただろうか」

勘兵衛の顔もほころんでいる。満悦の体を見せた、おだやかないい顔である。

「伊勢町のにぎやかな町通りの奥に、こんなしずかな場所があるなんて不思議な気がいたします」

「女将にそんなによろこんでもらって、満足だよ」

「わたしも一生に一度でいいから、こんなところに住んでみたい」

お蝶がおもわずそうもらしたとき、

「住みたかったら、いつから住んだっていいんだよ」

勘兵衛の言葉ではっとした。

「え……？」

「女将がわたしと一緒になれば、この家だって、庭だって、ぜんぶ女将のものになるじゃないか」

勘兵衛はそういって、わらった。

「まあ……、ご冗談ばっかし」

お蝶もつられてわらうと、

「冗談でいってるんじゃあないんだ。わたしは女将を女房にしたいんだが」

勘兵衛が今度は真顔になった。時宜をみはからったようなさりげない求婚の言葉である。

「おからかいはおやめください。わたしのような女を女房にだなんて……」

そういいながらも、さすがにお蝶の胸のうちは動揺し、上気していった。こんな言葉をきいて冷静でいられる女があるだろうか。勘兵衛の真剣な顔を見ているうちに、感激が高まった。

「返事はいそがないから、一度かんがえてみてくれないか」

勘兵衛はそういって池のほうへあるきだした。

後の月

つい二ヵ月ほどまえから、芝・源助町の中通りに、小間物屋が店びらきした。間口はほんの二間たらずのちいさな店だ。

紅や白粉、櫛、かんざし、笄、鏡、飾り道具、袋物、そのほか女がつかう日用雑貨などを売っている。以前は糸屋だったが、引っ越していってからしばらく空店舗になっていたところに、小間物屋ができたのである。

あかね屋

という屋号で、主人は三十歳前後のなかなか如才ない男である。金次という名で、以前は芝居にかかわった仕事をしていた。

使用人が一人いるので、店頭売りのほかに、金次は出商いも熱心にやっている。わずか二ヵ月ほどのあいだに、かなりの顧客をこしらえていた。

芝は増上寺、飯倉神明宮の門前としてさかえている盛り場で、町家も繁昌しており、また愛宕下の大名小路をちかくにひかえて大名屋敷の数も多い。このかいわいの商人は町家、武家双方を客にしてにぎわっているのである。

しかも九月に入っていらい、芝一帯の人出は普段の数倍にふくれあがっている。今は飯倉神明宮の祭礼さなかである。

世に、〈だらだら祭り〉といわれているほど、ここの祭りは期間が長いので有名である。十一日から十六日までが本祭日であるが、九月に入るとすぐに神明の境内に見世物、曲馬、力持ち、曲独楽、軽業、吹き矢などの小屋が立ちならんで、きそい合うように興行をはじめ、祭り気分がたかまってくる。

町家でもいっせいに店頭に軒提灯をつらね、幟をたて、表通りにはずらっと露店がでて、夜店がにぎわいはじめる。なかでも生姜を売る店が圧倒的に多い。

「まけた、まけた、買ってけ！」

大声をかけて若い者たちが景気をつけているさまは壮観で、威勢がいい。

本祭日がすぎてからも境内の興行は二十一日までつづき、門前の露店は九月いっぱい長々とやっているのであった。

本祭日初日の十一日。あかね屋も朝から店をあけた。あけぼののころから気のはやい連中が市中にくりだしてくるので、店々は早朝から客をむかえる用意をはじめるのである。

朝焼けの大きな太陽が海手にのぼっている。好天にめぐまれ、町は早朝から活気づいていた。軒提灯の下をくぐって、今日最初の客があかね屋に入ってきた。妙齢の娘の三人づれである。

金次も今日はきちんと羽織袴をきている。

「まあ金次さん、よくお似合いだわ」

「見ちがえるようよ。とても立派に見えるわ。お嫁のきてがふえるのじゃなくて」

金次はまだ独身者である。娘たちはだいぶ年上の金次にからかい気味のなれなれしい声をかけた。

「馬子にも衣装さ。でも、祭り気分はいいもんだ。まけてあげるから、買っていっておくれ」

金次も如才ない言葉をかえした。小間物商いは娘や女房たちが相手である。小娘たちとも普段からなれしたしんでいなければならない。

彼女たちはなじみである。会津藩松平の中屋敷の女中たちなのだ。

あかね屋からいちばんちかい大名屋敷が会津の中屋敷で、そのとなりが伊達藩の上屋敷である。金次はそのいずれにも出入りをしている。

伊達の屋敷の女中たちも、あかね屋によくやってくる。彼女たちの中に顧客もできている。鎌鼬の金次が源助町に小間物屋をだした目的はそれにある。

金次は夏の終りの一夜、仙台堀の伊達藩蔵屋敷をでた乗物の尾行に失敗してからすぐ、源助町に空店をさがし、ここに住みついたのである。中村座のほうは、この事件の探索を命じられたときにやめていた。

会津屋敷の女中たちは、にぎやかにさえずりながら紅白粉や手道具などの品々をえらびはじめた。今日はいつもより懐があたたかそうだ。女中たちはふだん屋敷のお使いなどの途中あかね屋に立ちよることもあるし、金次が屋敷へ御用聞きにいくこともある。

彼は娘や女房たちの気ごころをつかむのがうまく、ちょっとしたことにも気がきいているので、商売は上手である。二、三度会っているうちには、かならず相手は金次にこころをゆるすようになる。

損して得とるという商売のコツも知っている。まして彼は儲けるのは目的ではないから、楽に商売ができるのである。

さんざんひやかしたあげく、女中たちは櫛、かんざし、紅などを買いもとめていった。彼女らがいるあいだに、町娘や、町女房があらわれ、それぞれ品をもとめてかえった。

だが、金次が関心をいだいているのは、伊達屋敷の女中たちだけである。彼女たちには金次はとりわけ如才なく、勉強をしてやっており、気やすくなっている。彼女たちが口にする言葉を金次はいつも片言隻句（へんげんせっく）といえども聞きもらさない。

ところが、待っている相手というのはなかなかやってこぬものである。脇坂淡路守、森越中守の屋敷の女中たちがつれだってきたが、その日の昼まで、伊達の女中は一人も姿を見せなかった。

伊達屋敷の女中のうち、金次が懇意にしているのは十人前後である。その中には女中たちを監督する女中頭もいれば、もう六、七年にわたって奉公をつづけている古参女中もいる。

大体において大名屋敷に奉公する女中は、嫁入りまえに行儀見習のためにくる。無給の場合が多く、女中たちはそこでならいおぼえた行儀作法を嫁入道具としてとつぐのである。

伊達藩では国元からつれてくる場合もあり、それ以外は江戸で出入りの御用達や口入屋などのツテから女中を奉公させる。だからほとんどが裕福な町家か大きな農家の娘たちである。

何年も屋敷奉公をつづけている娘は、嫁（ゆ）きおくれだから自慢にはならぬ。離縁されて出もどってきている女中もいる。

昼さがりになったころ、ようやく伊達屋敷の女中が二人づれでやってきた。

「弥生（やよい）さん、お琴さん、おいでなさいまし」

金次はかくべつ彼女たちにばかり世辞がいいわけではない。あまりによくてはかえってあやしまれる。それよりは若い娘たちには気さくに振舞うことが、ずっと好感をいだかれる。

「今日お約束していたのに、おそくなってしまいました」

こたえたのは弥生のほうだ。

弥生が十八で、お琴が十七の妙齢である。二人とも屋敷奉公をはじめておよそ二年になる。いつ奉公をやめて嫁入りしても不足はないのである。

二人は今日あかね屋へでかける約束をし、金次は甘酒を振舞ってから屋敷には内緒で祭礼の案内をしてあげると約束をかわしていた。

「さあ、おあがりなさい。手ぜまなうえに男所帯で、むさくるしいところだが」

金次は弥生とお琴を奥の座敷へまねきあげた。かねてのなじみだから、二人はさほど遠慮もなくあがってきた。

弥生は淡島村の娘で、お琴は神田の老舗（しにせ）の娘である。二人とも今日はいつもよりめかしこんでおり、祭り気分もあって年以上に若やいでみえた。

「金次さんの振舞酒をたのしみにしてまいりました」

酒といっても、甘酒である。

祭礼では男は酒をのみ、女は甘酒をのむ。祭日の来客にたいしては、そのどちらかを振舞うのがしきたりである。

「餅米（もちごめ）も麹（こうじ）もとびきり上等のやつをつかってるんだ。味だってよそにはひけをとらないつもりだよ」

そういって金次は甘酒をあたためだした。

金次は先月も伊達屋敷のおふじ、おきくという二人の女中を以前の顔で堺町の芝居に案内したうえ、空いていた役者をまねいて茶屋あそびの真似ごとをしてやっていた。だから弥生もお琴も、金次にこころをゆるしている。

数日まえ、国元の御家老が近々のうちに江戸に到着するということを、弥生が何気なく口にしていた。金次はそれを聞き捨てにしていなかった。今日、祭礼の案内をしてあげると約束したのはそのためである。もっとくわしくそれをききたかった。

正確にいうと、伊達藩には家老という正式の役名はない。江戸の流儀で重臣のことをいったのだろうとおもった。

この時期に誰が江戸にでてくるのだろう、と金次はかんがえた。

(よもや、片倉小十郎では……)

片倉小十郎といえば、伊達藩の重臣中でも別格の人物である。藩主といえども小十郎にたいしては、一目も二目もおいている。

まして現在は藩主が若いから、藩の命運は実質的に小十郎がにぎっているといってもいい。それほどの大黒柱がそうかんたんに国を空けて江戸へでてくることはあるまい、というのが金次のかんがえである。

「国元の御家老は祭り見物にでてくるんでしょうかね」

金次は甘酒の茶碗をさしだしながら、さりげなくさぐりを入れた。

「お祭り見物ではなくて、お月見にいらっしゃるのだとか」

弥生がそれにこたえた。とくに内聞にしているのではなさそうだ。

「じゃあ、明後日の十三夜……」

「そうらしいんです。寒河江兵部さまは明日江戸にご到着になって、明後日、袖ケ浦の海でお月見をなさるとかいわれております」

「寒河江兵部様……」

金次はいわば目から鼻へぬける種類の男である。弥生のこれだけの言葉でいろいろなことが類推された。

「月見とは結構ですね」

と金次は応じたが、本当はそうかんがえているわけではなかった。それとは反対に伊達藩の国表は江戸以上にさわぎたっているのだろうと想像した。

寒河江兵部は筆頭の奉行であり、事実上の執政といえる。しかもそれは激職である。

そんな地位の人物が悠々と江戸にのぼってきて十三夜の月見の宴とは、いただけぬ。

「お奉行さまだって人間でございます。たまにはお月見くらいいたしたいのでございましょう」

しっかりしているように見えても、弥生もお琴もまだ大人のかんがえはできていないようだ。

袖ケ浦は、高輪の海を総称していうのである。浦のかたちが衣の袖に似ているので、そう呼びならわすようになったのだそうだ。

このあたりの陸地は江戸の入口で、東海道のいわば玄関口である。人馬の交通量が多く、茶店

や酒亭がたちならんでおり、風光は絶佳なところだ。

品川の海ははるかにひらけ、浦波が渚によせて真砂をあらい、遠い海上には晴天の日ならば薄紫色にかすむ房総の山々をのぞむことができる。後は三田の丘陵。西側には泉岳寺、東禅寺、如来寺などの大寺院がつらなっている。

しかも、このあたりは月の名所である。とりわけ七月の二十六夜は月待ちの客が江戸からここに群集して、茶店や酒亭、掛茶屋が大繁昌する。九月、後の月となると、さすがに晩秋の風が吹きはじめて、月待ちの客はぐっとすくなくなる。

後の月の夕。

金次は小間物の入った風呂敷包を背負い、高輪の大木戸をとおりすぎた。

袖ヶ浦の船着場には、島津、細川、伊達、有馬などの諸大名の月見船が月の出を待っていた。いずれも高輪に中屋敷や下屋敷を持つ大名である。

伊達の大船は胴の間に緋毛氈をしきつめ、十三夜の黄粉団子、きぬかつぎ、栗、枝豆などをつみこみ、酒の仕度をし、薄をそえて、月の出とともに沖のほうへゆるりゆるりと漕ぎでていった。船内には藩主斉村、奥方お鶴の方をはじめ、近習、側近の臣、奥方付きの腰元など二十人あまりが乗りこんでいる。

ややはなれた茶店の縁台に腰をおろして、金次はゆっくりと煙草をやりながら伊達の月見船が漕ぎだしていくのを見まもった。仔細に見たが、その船には執政とおぼしき年頃、風体の武士は見あたらなかった。

（……）

金次は思案をめぐらした。これは予想外のことではなかった。あるいはこんなこともあるのではないか、という予感を高輪にくるまでのあいだ金次はいだいていた。このほうが彼の予想にぴたりとはまってくるものがあった。

金次は東海道へでて、すこしばかり西へむかってすすんだ。海道の右手に、禅寺の大きな総門がそびえ立っているのが見えた。門の左右には松や楠が立ちならんでいる。

金次はゆっくりとちかづき、総門を見あげた。

満月がでている。

海上禅林、の四文字を書いた額が薄ら闇の中にようやく見えた。

仏日山東禅寺。妙心寺派の、禅宗江戸四箇寺の一つとして有名な寺である。額の四文字は朝鮮国雪峰の揮毫だといわれている。開山は博学で兵書軍学に通じていた傑僧嶺南和尚であった。

参道は南から北へ一直線に長くのびている。境内はひろく、古木が鬱蒼としており、まるで深山の中へ入るおもいがした。

しかもこの寺は江戸における伊達家の菩提寺である。

総門からかなりいったところに、山門がそびえ、そのずっと彼方に本堂がある。長い参道をいきながら、金次はあたりを警戒した。

築地塀や樹木の背後から、いきなり手弓の矢がとんでくる恐れがあった。金次も一度その馳走に見舞われていた。そのときは手弓をかわして命からがら逃げるのが精いっぱいだった。

あのときの恐ろしさを、けっしてわすれていなかった。手弓の餌食にならなかったのが不思議なくらいであった。風呂敷包を背負ってあるきながら、どこからおそわれてもすぐ逃げだせるような体勢をとっていた。

（寒河江兵部はここにきている！）

金次はあるきながらそう確信した。

ここにくるために、兵部はわざわざ仙台から江戸にでてきたのであろう。その目的は月見や墓参などであろうはずがない。墓参ならば、代参させればすむのである。

（しかるべき人物に会いにきた――）

相手もここにきている、そうかんがえるしかなかった。

金次は山門からすぐには本堂へむかわず、経堂や塔中、庫裡などがあるあたりをあるきまわってみた。

ひろい境内のところどころに石灯籠があり、火が入っている。いかにも禅宗の寺らしく、閑寂な、質朴な趣きがあたりを支配し、境内に茶屋や酒亭のようなところはない。茶店ていどの小屋はあるが、日暮れとともに店をしまっていた。

人影ももうほとんどなかった。金次はゆっくり本堂へむかった。

本堂のまわりをぐるっとまわってみたが、中から灯がもれてこない。人のいる様子もなく、しんとしずまりかえっている。

本堂の右手に方丈がある。寒河江兵部がもし密談しているとすれば、ここあたりが妥当な場所だとおもえた。

金次はこころをのこしながらも方丈にちかづくのをさけ、本堂の裏手へまわった。裏は藪になっており、その横は林の中に開山堂がある。

藪の中へ、金次は入っていった。藪はおもったより深い。その中に自然に細い道ができている。

ようやく藪をくぐりぬけると、すぐ目前にべつの寺の本堂が見えた。

（はて……？）

数瞬かんがえこんで、本堂の姿を見なおした。

金次は意外な発見をした。

なんと高野寺の本堂ではないか。ここは高野寺の裏手にあたるのだ。

高野寺といえば、二本榎の道筋にある寺である。東海道に総門をかまえた東禅寺とはずいぶん距離がはなれているようだが、双方とも寺域がひろく、境内の裏と裏とが背中合わせになっているのだ。

よもやそんなこととは気がつかなかった。高野寺というと、金次はすぐに奥州南部藩をおもいだした。

南部家の菩提寺は金地院であるが、当代の藩主の奥方の実家の菩提寺が高野寺であった。それで奥方は高野寺の和尚にふかく帰依していた。そのため、数年まえ供養料のことで金地院と高野寺がはげしくあらそった事件がある。いずれにしろ、今でも高野寺と南部家とはふかいかかわり

がつづいている。

（そうか、南部藩が……）

南部藩は封土を伊達藩と接する奥州十万石の外様大名である。藩主は美濃守信敬（のぶたか）という。

寒河江兵部の密談の相手は、南部藩の要人ではなかろうか。つい今まで金次の頭の中になにもなかった奥州の外様大名がくっきりとしたかたちで浮かびあがってきた。

胸がかすかに動悸（どうき）をうちはじめたのを金次は感じた。なにかとてつもなく大きな事柄か事件にぶちあたりそうな予感をおぼえたのだ。

金次は高野寺の本堂の表にでた。境内はひろく、しずまりかえっている。薄ら闇の中にどんな凶悪な魔物が身をひそめているかはかり知れぬ。

巨木がいたるところに佇立（ちょりつ）している。満月は頭上にある。

金次は塔頭（たっちゅう）、方丈、庫裡（くり）の周囲をうかがい、参道から表門へむかっていった。長い参道は両側にある石灯籠の灯でところどころを照らされている。

「おいっ」

そのとき、横手の暗がりから声がかかった。

不意をつかれて、そちらへふりむくと、暗がりの中から三、四人の武士が姿をあらわしてきた。いずれもけわしい様子をしている。あきらかに金次をいぶかしんでいるのだ。

「へいっ」

金次はおもわず腰をかがめて、そちらをうかがった。

「何者だ、今ごろこんなところで何をしている」

かみつくような詮議の声がとんできた。

「芝で小間物をあきなっている者でございます。出商いにまわっておりまして、かえり道にお寺のお参りをおもいたちました」

とっさのいいわけが口をついた。

闇をすかして見ると、この三、四人のほかにも、武士の姿がぼんやりと見えた。

「その包の中は？」

「小間物類でございます」

こたえて金次は背中の風呂敷包をおろし、包をとこうとした。

「とかなくていい。さっさと立ち去れ」

そのとなりの武士がさえぎって、金次を追いはらうように叱りつけた。

「相すいません。お目ざわりでございました」

金次はふたたび風呂敷包を背負い、一礼して早足に表門のほうへむかった。

境内にぴいんと緊迫した空気がながれているのを背で感じた。

（なにかある！）

とおもったが、逃げるように表門をくぐった。

二本榎の道は東西にとおっている。西へゆけば武家屋敷になるが、東のほうは寺ばかりならんでいる。金次は東へむかった。

高野寺のとなりが覚真寺、それから承教寺、国昌寺……とならんでいる。向いは上行寺、円信寺、黄梅院がたちならぶ。

金次はまっすぐ退散すると見せて、ぬけ目なく上行寺の門内にすばやく身をかくした。そして息をひそめるようにして、じっと待った。

そこからはすかいに高野寺の表門をうかがうことができる。今度見つかれば命はないとおもったが、この機会をむざむざ逃がすわけにはいかなかった。金次としては、なにか確証をつかんでかえるつもりだった。

待っていたが、いつまでもなにもおこらぬ。金次は辛抱して待った。何かおこるだろうという確信があった。

四半刻（三十分）ほどたったころ、高野寺の表門からいくつかの提灯がでてきた。金次は闇をすかし、目をこらした。

（！）

提灯のあとから周囲をしのぶように乗物が一丁あらわれた。

乗物は数人の供をしたがえて、こちらにやってきた。

金次は身をのりだすようにうかがった。この乗物はかつて伊達の蔵屋敷からでてきた五丁のうちの一つではないだろうかとおもった。

乗物は上行寺の門前にさしかかった。

先導の提灯が門の正面にかかったとき、金次はおもわず声をあげそうになった。

（鶴紋！）

提灯にはあざやかな鶴紋が書きこまれている。鶴紋は南部家の代表紋として世間に知られている。

あまりにぴたりと自分の想像があたったために、金次は興奮で体がおののいた。

南部家としては高野寺参詣にきたのであるから、正体をかくす必要はないとかんがえたのかもしれぬ。これで伊達と南部の密談のカラクリがほぼあきらかになった。

大年寺山の公子

晩秋の山と野を、朝霧がおおっている。

その霧が徐々にうごきはじめた。風がでてきたのだ。

風は大年寺山の頂きから麓へ吹きおろしてきた。

霧の中から馬のいななきがきこえた。

「稲妻」

最上左近義季が厩舎へむかって声をかけると、いつもの応答がかえってきた。

左近の屋敷は山の麓にある。伊達藩の侍屋敷は仙台城大手門の附近と、くねくねと九十九折に

ながれる広瀬川にかこまれた〈川内〉と呼ばれる城の周囲一帯にひろがっているが、左近の屋敷だけは城外のはるか東南方、大年寺山の麓の雑木林を切りひらいた中にたっている。

塀囲いもなければ、門もない、二千石の侍が住むとはとてもおもえぬ簡素な屋敷である。雑木林が塀と門のかわりをなしている。庭は林につづき、それがさらに山腹へつづく。

左近は大年寺山の公子と呼ばれてそだったが、すでにその呼び方がふさわしくなくなった二十九歳である。

左近が母屋の裏にある厩舎へちかづいていくと、稲妻があまえるような鳴き声をあげた。稲妻はこの厩舎でうまれた鹿毛の四歳である。あたらしくきた若党の松之助にもちかごろ慣れて、気持よさそうに体をあらってもらっている。

「いくぞ、稲妻」

呼びかけると、はやりたって首をふるわした。

左近は毎日、朝駆けをやる。が、今日はふだんの朝駆けとはいささかちがう。

稲妻は松之助に口をとられて、屋敷の外へでた。

そのとき雑木林の中に見えた人影がすっと陰にかくれたのに気づいたが、左近はとくには意に介さなかった。その人影は山伏の風体をしている。

今年の夏いらい、この雑木林に山伏がひそんで、左近を見張るようになった。攻撃はくわえてこないが、常時数人の山伏が遠くから屋敷をかこんで、左近の動静をうかがっているのだ。

霧はだいぶ晴れていた。晴れるにしたがい、真紅、褐色、黄色に紅葉した大年寺山の丘陵がとぎれとぎれにみえ、徐々にそれが全貌をあらわしてきた。

麓の先を広瀬川がながれている。山霧は晴れたが、川に湧いた霧はまだ沿岸に居すわって、たなびいている。

その岸べりの道を、稲妻をかって左近は疾駆していった。

その後を松之助が追いすがる。

川は蛇行しながら西北へむかい、仙台城をコの字型にめぐって、出羽との境関山峠のほうへいたる。

川の対岸には黄金の海原のごとく、たわわにみのった稲田が見わたすかぎりひろがっている。これが奥州の穀倉地帯と呼ばれる仙北平野につづくのである。

瑞鳳寺の下を迂回したところで、一つかるく馬腹をけって、川の中へ乗り入れた。稲妻は鬣をふり、水しぶきをあげて一気に川をわたりきった。

そこから下級武士の屋敷がつづくのぼり勾配の大路を駆けぬけ、大橋にいたった。大橋の下を広瀬川がながれている。

大橋をわたると、彼方前方に大手門が見えた。そこまでのあいだに重臣級の大屋敷がならんでいる。

左近は速度をおとして、その先端の屋敷まですすみ、馬からおりた。そこが伊達藩の筆頭奉行寒河江兵部の屋敷である。

「兵部殿にお目にかかりたい」

門番につげると、左近を見知っている一人が、
「これはおめずらしい」
稲妻の口をとっている松之助をちらと見ていった。左近がこれまで若党や中間をつれてあるかなかったことを知っているのだ。
「最近きた若党だ」
というと、
「どうぞお入りを」
左近は玄関にでてきた小姓に大刀をぬいてわたし、客間へみちびかれていった。
兵部は数日まえ江戸からもどってきたところである。通常登城は巳の刻（午前十時）前で、下城は酉の刻（夕六時）ときめられているが、ほとんど宵すぎるころまで職務に追われている。
今朝の会談は兵部のほうから持ちかけてきたものだ。お城の用部屋では話しにくい用件だろうと左近は推測した。
しばらく待つと、平常着姿の兵部が丸腰のままあらわれた。
「おひさしゅう存じあげます」
「ご足労をかけて相すまぬ」
挨拶は簡単におわり、左近は兵部が切りだすのを待った。
「例の件できていただいた」
「は」

左近は兵部のつよい眼差をしっかりとうけとめた。
「かんがえはおかわりにならぬか」
それはこれまで兵部から何度もきいた言葉だった。言葉こそ丁寧だが、多分に押しつけがましい語感があった。
左近が最上家につたわる源五郎義俊自筆の神文誓紙の写しを兵部に見せたのは、今年五月だった。兵部は片倉小十郎にその取あつかいについて相談し、数日後、左近にそれをつたえた。が、左近はいとも簡単にそれを拒絶したのだった。神文誓紙の写しを藩庁へ差しだすよう兵部がどのように説得しても、左近はがえんじなかった。
それでも兵部はこれまで根気よく説得をつづけていたのだった。
「何度も申しあげましたとおり、縁あって長年伊達家に御恩をこうむってはおりますものの、あの写しは当家に召しかかえられる以前から最上家につたわる義俊のものでございます。義俊が子孫につたえたものとおもわれます。お奉行の沙汰とはいえ、わたしの代に藩庁へ差しだすわけにはどうしてもまいりませぬ」
左近の答もすでに何度となく申しのべたとおりのものであった。
左近が先祖重代の伊達家臣であれば、こんな面倒なことにはならなかった。殿様の命令として召し上げれば簡単にすむことである。けれども没落したとはいえ、鎌倉時代いらい出羽山形に覇をとなえた名族最上の末流だけに、頭ごなしの処置にはでられないのだ。
左近が役職にでもあれば、まだしも説得の仕方もあるだろうが、無役の捨扶持という特異な立

場であるだけに、かえって処理がむつかしかった。

「されば最上殿はいかなるおつもりで、あの神文誓紙の写しをわたしのところに持ちこまれたのか」

「それは例の巻物が尋常ならざる内容をはらんだものだからです。すでに最上は無きも同然の家ですから大きなかかわりはないといたしても、当家には重大なかかわりがございましょう。もしあの内容が真実といたせば、容易ならざる大事をひきおこすことになりかねませぬ。それを未然にふせぐ意図のもとにお奉行にご覧に入れたしだいです」

「やくたいもない誓紙じゃ。何者かのいたずらであろう。最上家のご先祖は人さわがせなものを子孫にのこしたもの。しかしやくたいもないとは申せ、もし世上に噂としてながれたなら、あるいは幕府の知るところとなれば、とてもただ事ではすまぬであろう。奥州外様の六藩は存亡の淵にたたされよう。疑いをかけられるだけでも、迷惑このうえない」

兵部の面におさえてもおさえきれぬ苦渋の色が一瞬浮いた。

「左様でございましょう。騒動がおきますことは、わたしにとっても本意ではありませぬ。しかし、例の写しを偽物だと断言なさるならば、そこまでのご心配をなさるにもおよびますまい」

左近はひるまず反撃にでた。

「偽物ではあっても、幕府の疑いをうけるおそれは十分にある。ほかの五藩にも大きな迷惑をおよぼすことになろう」

「これは異なことをうかがいます。もし偽物であれば、疑いをうけたとしても、晴らすことができましょう。うろたえることはありますまい。そのときは自信をもって幕府へ申しひらきなさればよろしかろう」

「それは言葉のうえの理屈というもの。藩政をあずかる立場として、お家をすこしでもあやうくするような危険をおかすことはできぬ。はじめから疑いをうけぬようとりはからうのが、奉行としてのつとめであろう。最上殿、さらに一考なさっていただけまいか」

兵部は左近の無理解に怒りをおぼえながらも、ここはかまえて下手にでてきているのだ。

「では、お奉行殿にうかがい申しあげます」

「うむ」

左近が言葉をあらためると、兵部もあらたまった。

「お奉行殿は終始くだんの誓紙の写しを偽物ときめつけておられますが、まことに心底そのように信じていらっしゃいますのか。もしそう信じておられるならば、その拠り所をおおしえねがいとうございます」

左近がつめ寄ると、兵部は一瞬息をのんだ。そして一呼吸おいた。

「されば、第一に例の誓紙の内容に真実らしさがないということ。かりにも奥州の外様六藩が盟約したとしても、幕府に立ちむかえるだけの力がないことは誰の目にもあきらかであろう。もしも関ケ原役以前、あるいは大坂役以前のことならば、そのような賭けも成り立つかもしれぬ。しかしあの誓紙がかかれた年月は大坂も落城し、幕府の力が磐石の基礎をかため、世が静謐に入った元和五年とある。よりによって、このようなときに、奥州の外様六藩が手をむすんで幕府を相

手に弓をひこうなどとするわけがあるまい」

兵部の口からくだんの神文誓紙の内容にじかにふれる言葉がついにでてきた。今まではおたがいに、その内容の重大さをおもんばかって、ことさら言葉にすることを避けていたのだ。

「左様でございますか」

左近は兵部に先をうながした。

「第二に、伊達藩にはそのような神文誓紙もその写しもつたわっていない。片倉様にうかがってみたところ、たちどころに一笑に附された。念のために内々で他の四家にたずねてみたところ、いずれにもつたわっていないことがあきらかになった。最上家だけにつたわっておるというのは奇っ怪な話だ」

「……」

「さらに、第三にもし誓紙が本当だったとするならば、元和八年、最上家が改易されたとき、ほかの五藩がだまっていたはずがなかろう。誓約によって、伊達、南部、佐竹、津軽、上杉の各藩がたちあがっていたはずではないか。立ちあがろうと策動した節さえ各藩いずれにもない。最上家からもそれをうながすうごきすらなかった。最上五十七万石があっけなく改易されたことが、誓紙の偽物であることをあきらかに裏づける」

兵部は気魄をこめて一気にそこまでいった。

「ごもっともな理屈とうかがいまする」

こたえながら左近は腹のうちで、兵部の論旨の組みたてに感心した。

「最上殿、わかっていただけたであろうか」

兵部はここで言葉をあらため、ふたたび老獪に下手にでた。

「わたしは、伊達家にも、さらにほかの南部、佐竹らの家々にも最上家同様の誓紙の写しがつたわっているはずと確信いたしております。後々の世にまで力をおよぼす重大な誓紙をとりかわす際に、手元に控えをのこして子孫につたえるのは当然のことでございます。真実はいずれあきらかにされることでございましょう」

左近があくまでもつっぱねると、兵部の顔にわずかだが苦渋の色がにじみでてきた。

「押し問答をつづけていてもラチがあかぬ。いったん打ち切って、今夕もう一度ここで話をいたそう。こちらも少々かんがえてみることがある」

しばし重苦しい沈黙があった後、兵部があらたに提案をした。そういつまでも解決をながびかすことはできぬと判断したのだろう。

「承知いたしました」

左近としてもそれをことわる理由はなかった。

「それと一つ、おねがい事がございます」

「いかような」

「今年の夏いらい、わが屋敷のまわりを徘徊いたす山伏の姿が見られます。わたしは逃げもかくれもいたしませぬ。目ざわりですので、もしお奉行がつかわした者であるならば、即刻ひきあげさせていただきたい。さもないことには、こちらも相応の手立にでるやもしれませぬ」

左近は面とむかって遠慮なくいった。
そして兵部の返事も待たず、一礼して立ちあがった。
左近は稲妻を駆って、大年寺山の屋敷へもどった。
そのときも、また雑木林の中へ白い浄衣をまとった山伏姿の曲者が身をかくすのをみとめた。
今度は意外にちかいところにいたので、さすがに松之助はとっさに曲者を追って雑木林のほうへ駆けだそうとした。
「やめろ」
左近はそれを制した。
「相手は一人ではない。無用の争いは避けろ」
松之助を叱ると、
「しかしこう年中見張られていたんではたまりません。本当にうるさいやつらだ」
腹だたしそうに追跡をやめた。
「今のところ攻撃をしかけてくる気配はなさそうだ。見張りたいだけ見張らせてやれ」
「何人くらいひそんでいるんでしょうか」
「すくなくとも数人。多ければ十人くらいいるかもしれん」
「不意をついてこちらから攻撃をしかけ、一人か二人ひっとらえて捕虜にしてしまいましょうか」
松之助は血気さかんな腕自慢であるから、肚のうちがおさまらぬようだ。

「まあ待て、もうしばらくほうっておけ」
左近には彼等の様子によって逆に兵部の胸中をさぐろうという意図があったのである。
左近は稲妻を松之助へゆだね、まっすぐに自分の居間へもどった。
床の間があり、掛軸が無造作に一本かかっているほかは文机しかない飾り気のない部屋である。
左近には近習が二人、腰元が一人ついているが、呼ばぬかぎりこの居間にはちか寄らぬ。
妹泰子はちかごろこの屋敷からひそかに姿を消していた。しかし屋敷の外の者でそのことに気づいている者はいないはずであった。
左近は襖も障子戸もしめきり、文机のまえにすわった。が、書見をするわけではなかった。
檜でつくった文机の手前の足をもちあげ、右の足をひっぱると、根元のところからすぽっとそれがぬけた。しかもその足の中がくりぬいてある。
左近はその中から一軸の巻物をとりだした。兵部を震撼させたくだんの巻物である。
左近は紐をとき、ひらいていった。

神文誓紙

左記之六家　盟約によりて奥州の繁栄と安全を約するもの也
一家といへども危殆に瀕し候とき　ほかの五家盟約によりてかならず起ちあがらんもの也　きつと違約すべからず候

天地神明八百万之神にちかひて誓約いたし候

伊達宰相政宗
南部信濃守利直
津軽越中守信枚
最上源五郎義俊
上杉中納言景勝
佐竹侍従義宣

元和己未年七月

虫くいのしみがひろがる年代をへた紙面に以上の大胆不敵な文字が書きつらねてある。まぎれもなく、奥州の外様雄藩六家が徳川幕府の外様大名政策に対抗して共同防衛にあたろうとした神文誓紙である。しかもこととしだいによっては謀叛の可能性をも誓約したただごとならぬ内容である。

奥州の外様諸大名が幕府の取りつぶしと改易をおそれ、戦々兢々としながらも、その裏でそれぞれの立場をこえてついに手をむすび合ったことをしめしている。それには奥州の繁栄と安全が大義名分としてうたわれている。

本文と各大名の署名がすべて義俊の筆蹟であることは、これがあきらかに最上家の誓紙の写しであることをものがたる。花押は義俊のところだけについている。

左近はもう一度すみずみまで仔細にあらためて、兵部が指摘したごとき偽物でないことを確信した。

それをふたたび巻きなおし、文机の足の中におさめて元どおりにした。

夕刻、ふたたび左近と兵部はおなじ場所で対座した。

両人のあいだにはそれぞれの茶がおかれている。

「最上殿、お手前の扶持料二千石は名門最上家の面目をたもち、さらに血筋を将来へのこすうえからいって十分なものではないでござろう」

兵部は今朝方とは話を一転して、おもいがけぬところから切りだしてきた。

「は……」

左近が戸惑いの色を浮かべると、兵部は一口茶をすすった。

「千石加増して、三千石にいたしたならばどうであろう。むろん今のところはわたしの一存だが、そのように取りはからうことができる」

にわかに千石も加増するとはずいぶんおもいきった処置である。

それをきいて左近は腹の中で嘲い声をあげていた。

が、顔つきは神妙である。

「そのかわりに、と申されるのでありましょうか」

「察しのとおりじゃ。伊達藩および奥州の静謐のために、ぜひとも最上殿の力が入り用なのだ。

力をかしてほしい」

兵部は千石の加増で神文誓紙の写しを買おうといいだしたのである。

「これは異なことをうけたまわります。わたしはおのれの利をむさぼるために、あのようなものをご覧に入れたわけではさらにございませぬ。そのように受けとられようとは不徳のいたすところでございました。無念のきわみにございます」

左近は表情をすこしもかえずにいった。

「そのような下司な意向はこちらには毛頭ない。お家のため奥州各藩のために、最上殿の力を借用いたしたいと申しておるまでじゃ。これならば、そちらとしても納得がいこう」

「納得できませぬ。お奉行がそうおっしゃられるならば、わたしのほうにも、少々申し分がございます」

「申してみられい」

左近はここではじめて、自分の真意を口にする気になった。

そのとき、廊下に足音がきこえ、近習のちかづいてくる気配がつたわった。

「もうし」

襖の外から声がかかった。

「何用じゃ」

兵部の声と同時に襖がひらいた。

「片倉小十郎様がお見えになりました」

近習がつげた。

左近にとっては予想もしない人物のとつぜんの来訪である。さすがの左近も粛然たる気分になった。

伊達山岳党

山麓に法螺貝のひびきが鳴りわたった。それはつめたい風にのって、遠く西方の峰からつたわってきた。

やがていくつもいくつもの法螺貝の音がいりまじり、一つの大きなひびきになって麓の村落をおおいはじめた。

蔵王山のはるか裾野の村蔵王は、古来山伏の住むところである。

毎年、晩秋もどんづまりにちかづいたころ、〈秋の峰〉の荒行をおえた山伏たちが法螺貝を吹き鳴らしながら下山してくる。蔵王には本山派の大願寺を中心にして、二百戸ばかりの〈坊〉があつまっており、山伏たちが集団でくらしている。

間もなく法螺貝の音が村落の天にひびき、地をゆるがした。

白い浄衣が山路から姿をあらわした。頭に兜巾をつけ、結袈裟をまとい、脛衣をはき、笈を背

負い、錫杖を手にしたたくましい山伏たちがぞくぞくと村にかえってきた。

いずれも山中の荒行で日に焼けた精悍な顔をしており、荒々しい気魄をみなぎらせている。一同は八月半ば恒例の〈秋の峰〉に入山し、荒行につぐ荒行をこなして身心を鍛練し、修法をおこないながら蔵王諸峰を縦走して、九月晦日ももちかい今日下山してきたのである。

山伏たちは力づよい足どりで大願寺へむかった。かぞえれば百人になんなんとする集団である。

ふかい杉林の中に大願寺の巨大な山門がそびえ、参道はのぼり勾配になっている。境内はひろく、その周囲も鬱蒼とした杉の古木がおおっており、昼なお薄暗い荘厳な雰囲気につつまれている。背後はふかい山の峰につらなる。

すでに境内には、入山しなかった山伏たちが数十人あつまり、一同を待っていた。本堂の前には祭壇がもうけてあり、注連縄がはりめぐらされている。

ふだんは静寂の中にある境内も、百数十人の山伏の群をむかえて、騒然とした気配につつまれてきた。里にのこっていた山伏たちは下山してきた山伏たちと声をかけ合い、無事をよろこび合った。

蔵王の山伏たちの入山は春と秋におこなわれるが、とりわけ秋の入山は過酷な修行修法の連続である。山中の霊場で水をくみ、焚木をとる〈閼伽〉〈小木〉の修行からはじまり、小木によって身体を打つ〈床堅〉、断食によって飢えにたえ、渇きにたえる〈穀断ち〉〈水断ち〉、重い石を背負って峻険な山道をのぼる〈業秤〉などの修行がつづく。業秤をおそれてひるむ者にたいしては、〈谷行〉といって谷間へつきおとす罰が課される。さらに断崖絶壁をのぼり降りし、滝に打たれ、断崖から命縄で足をゆわえて虚空に身をさらすなどの人間業をこえた荒行をこなすことによって、肉体と精神を極限まで練磨し、不抜の信念を獲得していくのである。

それだけに下山したときの喜びはひときわ大きく、入山の経験回数がふえるにしたがい、山伏としての力量も地位もあがっていく。

やがて本堂の前に火が燃えあがった。護摩の修法がはじまったのである。ぬるでの護摩木が音をたてて燃えだし、火炎と煙が渦をまくように大きくたちのぼっていった。

と同時に一同によって加持祈禱がはじまった。護摩の修法は煩悩罪障をふりおとし、断ちきることをはかって火天の本地としての不動明王に依存して成仏する道である。

加持祈禱は天下泰平、国土安穏、済世利民、五穀豊穣、厄病退散などをいのるのがふつうだが、蔵王山伏たちは伊達藩の安全、奥州の繁栄を第一に祈禱する。

蔵王山伏のもっとも大きな檀那は伊達家である。蔵王山伏の発祥は、伊達政宗の庶子で二代藩主忠宗と同年同月にうまれた万之助宗秋からおこった。

同年同月生まれの子はいずれかが災いをおこすという謂れによって、生まれると同時にころされるか捨てられる運命であったところ、政宗はおもいなおして十一歳まで宗秋を城外の侍屋敷でそだて、その後三井寺の末寺聖護院の門跡に託した。聖護院は天台密教からおこった本山派修験道の本山である。宗秋は山伏の聖地紀州熊野で何年もきびしい修行修法をつんだあと、奥州にもどって、蔵王山麓に居をすえ、伊達の繁栄と奥州鎮護の祈願のために蔵王山伏の開祖となった。

このとき宗秋をしたって武士を捨て、聖護院まで供をしてきた家来たちが現在の蔵王山伏たちの先祖になるわけである。この一門一党が代々その流れをついでいるばかりでなく、藩内においてひそかに〈伊達山岳党〉と呼びならわされる集団をつくっている。

だが、世間一般には山岳党の正体は知られず、単なる本山派山伏だとみられていた。一党は伊達と奥州の安全と鎮護を祈願するばかりでなく、いったん危急に瀕したときは、荒行によって鍛練しぬいた肉体とふだん里において稽古した武芸をもって勇猛果敢な行動をとることを先祖重代の役目としていたのである。

護摩の火は境内の空を焦がすばかりに燃えさかり、加持祈禱は最高潮に達した。

そのとき護摩の背後に、大釜が十数個用意された。いずれも二斗だきの釜で、それぞれ三本の太い生木を支えにしたものの上にもうけられた。ささえの下には焚木がつみあげられている。

年行司の山伏の合図によって、火がつけられ、大釜がいっせいに焚かれていった。

そして先達の山伏たちが大勢でて、密法を誦じはじめた。湯立神楽のはじまりである。

大釜の湯がぐらぐらに焚きあがったころ、年行司がでて、袈裟をぬぎはなった。浄衣一枚になって竹笹を両手にもち、一列にならんだ大釜の周囲を何回となくはしりだした。大声をあげてはしりながら竹笹を煮えたぎった釜の湯にひたしては頭にふりかけていった。

何回となくくりかえし、くたくたになったところを、先達たちがつれもどして壇上に寝かせ、その後山伏が全員それぞれの釜の湯を竹笹でかぶっていった。曲舞様式の神楽がそれから延々と時のたつのもわすれておこなわれる。

神楽がはてしなくつづいているころ、本堂の中に十三人の山伏があつまった。

大願寺別当をつとめる〈大越家〉蔵王坊を上座にすえて、〈越家〉威徳坊とおなじく金剛坊、さらに〈大宿〉と呼ばれる十人の山伏不動坊、夜叉坊、憤怒坊、地蔵坊、愛染坊、竜王坊、薬師坊、文殊坊、普賢坊、源隆坊が円坐をくんでいる。蔵王山伏の首脳が一堂に会しているのである。

蔵王坊はすでに六十路をこえた老山伏であるが、体はかくしゃくとしている。

「竜王坊、薬師坊が江戸でとりかえしのつかぬ失敗をやった。それについて各坊のなかで申し分のある者は」

今年の行司をつとめる威徳坊がまずきりだした。

重苦しい沈黙がながれた。

「いかにも早計な戦術だったといわねばならぬ。やらいでものときに攻撃をしかけ、しかも敵の一人をのぞくほかを討ちもらしてしまった。先手必勝を期したものならば、敵全員をのこらず討ちとらねばならぬところだった」

沈黙をやぶって最初に応じたのは不動坊であった。

「敵を討ちもらしたがために、伊達がうごきだしたことを幕府に知らしめた。この失態誤算は大きい。仙台のお城にもはかり知れぬ迷惑をかけた。のちのちまでこの失態は尾をひくことになるだろう」

地蔵坊もそれにつづいた。

「幕府との闘いはぎりぎりまでひきのばすべきであった。伊達および奥州外様各藩にはまだ幕府の相手をするだけの準備ができあがっていなかった。各藩との足並みもそろったとはいいがたい。ところがこの誤算によって中町奉行はにわかに活発なうごきをはじめた。否応なく戦いの火ぶたが切られた」

愛染坊も前二者に同調した。

いずれも、夏がおわるころ伊達藩下屋敷でおこなわれた花火の夜、五丁の乗物を尾行してきた中町奉行の同心らを追尾、あるいは待ちうけて果敢な攻撃にでたことが問題にされている。闘いは敗れはしなかったものの、敵を殲滅できなかったことを責められているのである。

その一件のおこりは、寒河江兵部から江戸出動の命令が七月に蔵王へもたらされたのにはじまる。

このときはすでに約百人の山伏たちの入山がきまっており、一同は入山のまえの精進潔斎に入っていた。蔵王坊、威徳坊などの首脳も精進をおこなっていた。したがって金剛坊の命令によって、竜王坊、薬師坊が配下の山伏十人ずつをすぐって江戸へ急遽むかったのである。

「それについて、ほかに」

威徳坊が一座を見わたした。

「たしかに戦いのしかけははやすぎた。あの頃合ならば、あくまでも伊達のうごきを幕府の目からくらまし、相手を幻惑し攪乱する戦術を徹頭徹尾とるべきであった。抜け駆けの功名にはやって、失敗をおかしたといわれても仕方ないであろう」

文殊坊がさらに追い討ちをかけたとき、

「わしはいささかちがうかんがえを持っている」

蔵王坊のすぐ右どなりにいる金剛坊が一同を制した。

「竜王坊、薬師坊の戦術がただしかったとはいわぬ。しかしその失敗によって幕府が立ちあがったというのはうなずけぬ。すでに中町奉行は伊達藩の動静に気づいていた。探索にも入っていたはずだ。それだから伊達の屋敷をとりかこんでいた。乗物をも尾行してきたのだ。あの夜の戦術にかかわりなく、すでに戦いの火ぶたは切られていたとみるべきであろう」

「どうして幕府に伊達の動静がつたわっていたかをかんがえてみるべきではないか。それが重大なことだ」

普賢坊が金剛坊へむかっていった。一同はそれにうなずいた。

「幕府の隠密がもぐりこんで、さぐりだしたのか？」

「それとも、伊達藩の中に内通する者があったのか」

「内通して利を得る者がいるだろうか。それとも恨みをいだく者が……」

「他藩からもれたのかもしれぬ」

普賢坊の言葉をきっかけにして、方々から声があがった。

「ともかく、今は竜王坊、薬師坊を責めとがめておるべきときではあるまい。すでに幕府との戦いははじまった。今後の戦いについてかんがえるべきだろう」

金剛坊がかさねていうと、一同はおおむねその意向になびいた。

「最上左近殿についてはどうじゃ」
蔵王坊がそのとき上座から口をはさんだ。蔵王坊は万之助宗秋の血筋をひく山伏の首領であり、伊達家中の〈一門〉〈一家〉〈一族〉たちにひけをとらぬ地位にたっている。
「お城のお奉行から見張りを命じられました。その仔細についてはまだ何事もうかがっておりません」
蔵王坊の留守をあずかっていた威徳坊がこたえた。
蔵王山伏は伊達藩の危急存亡にあたって身命をなげうったはたらきをするばかりでなく、常時隠密役をもうけたまわっている。忍者にひけをとらぬ術を体得しているうえ、武芸一般にすぐれ、また諸国をあるきまわるに際して山伏は関所を自由に通過できる利点があるからだ。
「最上殿はかくべつ幕府とのかかわり合いはないであろうな」
「今のところ、そうしたことはないとおもわれます」
「しかし、お奉行が最上殿の屋敷を見張れというのは、よくよくの事情があるのではないか」
「けれども、最上左近様は伊達家に重代の恩をこうむっておられる方でありましょう。よもや……」
「そういうかんがえをもって人間をみるのはまちがいをおこすもとじゃ。最上殿の身辺をもっときびしくさぐれ」
蔵王坊は一同に命じた。
境内の湯立神楽は依然としてつづいている。えんえんとなお一刻（二時間）はおこなわれ、日

がおちてから大篝りを焚き、精進おとしの宴がはじまるのである。
やや日が暮れかけたころ、山門ちかくで見張りに立っていた山伏の一人が、はるか東北方から疾駆してくる一頭の騎馬を遠目にみとめて、本堂へ注進にはしってきた。
「お城からの使者であろう」
注進をうけて威徳坊がこたえた。
仙台城から蔵王までは約七里。馬をとばせば約一刻で到着する。お城と蔵王をつなぐ使者には大抵馬がつかわれているのだ。
「使者がきたら、本堂に案内しろ」
威徳坊は命じ、見張りの山伏は山門のほうへもどっていった。
使者を案内して見張りの山伏がふたたび本堂にあらわれたのは、その後間もなくであった。
「早見清右衛門にございます。お城からの使いでまいりました」
近習早見は荒い息づかいのまま上座へむかって挨拶した。
本堂にいる大宿たちの大半が早見を知っている。早見は寒河江兵部の使番をつとめて何度か蔵王にきたことがあった。
蔵王坊が早見にむかってうなずいた。
「ご用をうけたまわろう」
威徳坊が蔵王坊にかわってこたえた。早見の様子から、ただならぬ事態が仙台でおこったことを一同は推察していた。

「はっ……」

早見がわずかに逡巡の色を見せると、

「一座しているのはみな大宿以上の者たちだ。心配はない」

威徳坊はうながした。

「大越家殿、もしくは越家殿に、至急お城へおいでいただきたいとお奉行がおっしゃっております」

早見はやや早口でいった。

「何事がおこった。さしつかえなくば、お知らせくだされ」

「は、最上左近殿がお屋敷を脱走なされ、いず方へか姿をくらましました。すぐに追手をさしむけましたが、今のところ行方がわかっておりませぬ。用件と申すのはそのことでございます」

威徳坊にうながされて、早見はこたえた。

「最上殿が逃げた？　ただごとでないな」

そのとき上座から蔵王坊がいった言葉で、一同に緊張感がはしった。

「本日昼さがり、大年寺山の屋敷から最上殿と若党一人の姿が消えうせていることがわかりました。見張りの山岳党の者たちがただちに城下を探索いたしましたが、姿がなく、目下お城の者もくわわって探索をつづけております」

「左様か、大事にいたるかもしれぬ。わしが城へでむこう」

蔵王坊がみずからそういって立ちあがった。つい今さっき最上左近のことを話題にしていたば

かりのときだけに、一同は一層不穏なおもいをいだいたのだ。

「不動坊と愛染坊、大越家どののお供をいたせ」

威徳坊に命じられて、大宿の二人がただちに蔵王坊の後にしたがった。

境内からはまだ湯立神楽のひびきがさかんにきこえていた。

丁度そのころ、仙台城下からはるか南方、名取と岩沼の中ほどあたりの奥州街道を土煙をあげて駆ける二頭の騎馬があった。

前をいくのは白衣着流しのまま馬にのった武士であり、それにつづくのは若党姿の男である。馬はたくましく、優美なかたちをした鹿毛と栗毛だ。

時折背後をふりかえり、うかがいながら馬上の二人は追われるように先をいそいでいた。この日の昼さがり、見張りの隙をついて大年寺山の屋敷を脱出してきた最上左近と松之助の二人である。

両人は一時城下に潜伏し、城方の出方をうかがい、隙をみて城下を脱出し、奥州街道を一気に南下してきた。

この脱出は、左近としては練りあげた策戦であった。追いつめられての脱走ではなかった。

こういう事態におちいるかもしれぬということは、はじめて寒河江兵部のところへ巻物を持参していったときから考慮にあった。ただその時期の早いおそいの問題はあった。いずれはそうなるにせよ、できるかぎり時間をかせいでおきたかったのだ。

左近はお家伝来の巻物に、自分なりの野心を賭けていた。先だっての夕刻、兵部の屋敷で会談

をおこなった際、兵部が千石の加増を提案したのにたいし、左近ははからずもその場に片倉小十郎が登場したのを機会に、ためらわず一万石の禄高を要求した。すなわち一般的にいうならば、大名並みの待遇を彼はのぞんだのである。

名門最上家の再興を一軸の巻物によってはたそうとこころざしたのだが、兵部と小十郎はそれを熟考のすえ拒絶した。

左近は窮地におちいったが、それは彼の野心の挫折を意味していなかった。彼にも、二重三重にはりめぐらした策があった。

「見えるか」

馬上からふりむいて問うと、

「まだ見えませぬ」

松之助の声がかえってきた。

が、追手がかかっていないはずはなかった。

「できるだけ引きはなしておけ」

左近は稲妻へ鞭をあてた。

松之助も速度をあげてついてきた。

飯野坂の難所をすぎると、しだいに岩沼がちかくなってきた。

岩沼は伊達藩宿老八千石古内蔵人が館をすえたところである。けっして安全なところとはいえぬ。もし事前にわかっていれば、何百人の家来をしたがえていたとしても、ここを通過することは困難であろう。

さらに岩沼の先、奥州街道白石には片倉小十郎がおり、浜街道亘理にはおなじく一族伊達安房が館をかまえている。その先の坂元には宿老大枝監物の館がある。さらに駒ケ嶺には、宮田内蔵助がいる。

伊達藩だけに中世から連綿とつづく地方知行制、いわゆる〈四十八館制〉がこんなときに役にたっているのである。この各館の守備をつぎつぎに突破して藩領外へ脱出するのは、至難とかんがえられた。

やがて街道の彼方に、岩沼の宿場の入口がちいさく見えてきた。

岩沼は奥州街道と浜街道との分岐点である。宿場をぬけて右へまがれば奥州街道、まっすぐつづくのは浜街道だ。

宿場の入口ちかくまできたが、さいわい古内蔵人の兵はでていなかった。まだ伝令はとどいていないのだ。

「松之助、二手にわかれよう」

左近は宿場の入口で、にわかに速度をおとしていった。

「わかれてはかえって危のうございましょう」

松之助は意外な顔をした。

「わたしはどこまでもお供をいたすつもりです」

「いや、わかれたほうがいい」

「それならば、衣服と馬をおとりかえいたしましょう」
松之助は自分が左近になりすまして敵方の目をひきつけ、左近をその隙に逃がそうという算段を申したてたのだ。
「そんなことをする要はあるまい。ここまできたら、あとは天運にまかすしかない」
左近は松之助の申し出をしりぞけた。
しかし、それだけではなかった。馬をとめて、懐中へ手を入れた。
「わたしは浜街道をゆく。おまえは奥州街道へゆけ。なにがなんでも白河まで逃げのびて、これを越中守様のお手もとへ」
左近はそういって袱紗包にした例の巻物を託そうとした。
「はっ」
逡巡する松之助に、
「しかとご主人様へおわたししてくれ」
左近は押しつけるように袱紗包を手わたした。
松之助の主人とはほかならぬ白河藩主松平越中守定信である。松之助は定信が左近のもとへおくりこんだ人物なのである。
左近は伊達藩において最上家再興の野心がはたせぬときは、これを幕府に託す二重の策をかねて準備していた。幕府へもたらす土産物のいかんによっては、その野心をはたす可能性が十分あったのである。

「はっ、たしかにおあずかりいたしました。まちがいなく、殿様のお手もとへおとどけいたします。しかし最上様は……」
松之助はここではじめて衣服と馬をとりかえようとしなかった左近の意図をはっきりとさとった。左近は自分が追手の目をひきつけておいて、松之助を白河へおとそうとしているのであった。すでに白河には、左近が人質がわりにおくった妹泰子がいる。
「わたしは大丈夫だ。つかまったとしても、よもやころされはしまい。では、いくぞ」
確信にちかい見通しが左近にはあった。
そして後も見ずに稲妻をはしらせ、浜街道へ駆けぬけていった。
それを見おくって、松之助はおくれじと奥州街道を駆けすすんだ。
左近は途中で一時稲妻をやすませ、半刻（一時間）ほど後亘理を駆けぬけた。
しかし亘理から一里ばかりいったころ、ようやく背後に追手がせまってきたのを察した。浜街道が右に左にまがったところで、はるか後方に一群の騎馬が追いせまってくるのをみとめた。
追手は途中で馬を乗りつぎながら追跡してきたのだろう。
稲妻はさすがに呼吸が荒くなっていた。速度もあきらかにおちてきた。
（逃げきれまい）
左近はそうおもった。
仙台城下を脱けでたときから、自分が逃げきることは念頭にはなかった。松之助を逃がすことだけをかんがえていたのである。

耳をすますと、背後からかすかな馬蹄のひびきがきこえてきた。
それでも左近は必死で馬を駆った。街道の並木が翔ぶように後へ過ぎていった。通行の旅人らはあわてて道端へよけた。
ダーン
そのとき一発の銃声が虚空に鳴りわたった。
いきなり遠距離から火縄銃を撃ちかけてくるとは、左近は想像していなかった。だが、疾駆するのをやめなかった。
ダーン
ふたたび銃声がひびいて、弾丸がちかくをかすめた。
追手は疾駆しながら馬上筒を撃ちはなっているのだ。こうしたことには慣れている者たちであろう。
つづいて二、三発銃声がおこり、弾丸はますます身ぢかをかすめてきた。
(このまま突っぱしるか、馬をとめるか)
逡巡は一瞬でおわった。
「どう、どう」
声をかけて、左近は稲妻をとめた。今死ぬわけにはいかないのだ。恥辱にたえても生きのびねばならぬ。
左近が稲妻をおりると、もう一発威嚇の銃声がひびいてから、攻撃はやんだ。

みるみるうちに七、八騎の山伏がせまってきて、いっせいに左近のまえで馬からおりた。

伊達の陰謀

大年寺山の麓に大量の青竹がはこびこまれた。青竹とともに、早朝から大勢の人夫たちがやってきて、左近の屋敷の周囲に竹矢来を組みはじめた。
二間くらいの高さの厳重に編んだ竹矢来を隙間なく張りめぐらし、一ヵ所にだけちいさな出入口をこしらえ、そこに見張番をおいた。
仙台城下につれもどされた左近は屋敷の中に幽閉され、まぎれもなく罪人のあつかいをうけるようになった。それを命じたのは兵部であった。
だが、兵部の誤算は左近とともに脱出したはずの若党松之助をとらえられず、逃がしてしまったことだった。
つかまえた左近は、身に巻物を所持していなかった。
屋敷の中もくまなく捜索したが、巻物はでてこなかった。
若党が身につけて逃げおちたとかんがえるべきであった。
きびしく左近に問うと、

「一万石くだされたら、あの巻物をおわたしいたそう。伊達藩としてはまことに安いお買い物ではござらぬか」

悠然とわらってこたえるばかりだった。

もし左近をころしてしまえば、巻物のありかを知る手がかりをうしなってしまう。左近は兵部の弱みをよく知りつくしていた。

拷問にもたえぬく男であることがわかっていた。それでやむなく、屋敷に閉じこめたのだった。

伊達藩は今、政宗いらい百数十年におよぶ夢と野望を実現すべきときにいたっている。ためらうことはゆるされなかった。

若き日の政宗は、天下に覇をとなえる野望に燃えていた。が、それを秀吉と家康にはばまれてからというもの、従順な臣下に変貌したとみせつつ、いつかは秀吉、家康がきずいた天下から離脱し、独自の王国をきずきあげる意図をいだいていたのであった。

それは〈奥州王国〉というかたちで、政宗の頭の中におもいえがかれた。白河以北の奥州諸藩が結束して、徳川幕藩体制のもとからはなれ、独自の王国をつくりあげることが目的であった。

太古いらい、奥州は蝦夷と呼ばれ、白河以西の諸国とは別の天地であるというかんがえが一般の中にも根づいていた。

それだからこそ、蝦夷征伐というかたちで中央政府はたびたび侵略をくりかえし、ついに奥州をしたがえ、今にいたったのである。それは日本武尊からはじまり、坂上田村麻呂、文室綿

麻呂らの蝦夷征伐に発展し、前九年の役、後三年の役にひきつがれ、さらに源頼朝による藤原征伐へとつづいてきた。

その歴史的流れを断乎はばむ奥州の英雄として伊達政宗が登場したかにみえたが、彼も今しばし生まれてくるのがおそすぎた。

政宗が征戦につぐ征戦で息つく暇もなく奥州の大半を平定したときは、わずか二十三歳であったが、そのときにははやくも秀吉による天下統一の事業が半ば以上完成していた。ここで政宗もまた歴史の轍をふんで、中央政権に屈服するのやむなきにいたったのである。

しかし政宗が前代の人々とことなるところは、屈服しながらも奥州の独立、奥州王国建国の夢を捨てなかったことである。政宗は徳川の治世におよんでもまだ虎視眈々と、その実現の機会をねらっていた。

支倉常長をヨーロッパへ派遣したのは、奥州独立のための大きな賭けであった。そのために政宗はみずから〈奥州王〉の立場をとって、支倉をおくりだしたのである。支倉はスペイン国王やローマ法王の前でもこの立場をおしとおした。

奥州が古来、中央政府に屈従のやむなきにいたった最大の原因は、奥州の貧困にあると政宗はみていた。勇猛果敢さにおいて、奥州は中央にひけをとらなかった。むしろ中央をしのいだ。奥州に欠けている最大のものは経済の力であると、政宗はかんがえていたのである。

きわだった産業にめぐまれず、きびしい自然条件のもとで農業も安定していない奥州にとって、海外諸国との貿易こそは貧困を一挙に解決するものであった。それと同時に政宗は新田開拓

と農業技術の向上にあくことなくつとめた。

が、海外貿易の目論みはもろくもくずれ去った。

と同時にさしもの政宗も長年の野望を自分の代にははたすことが不可能であるとさとった。そして後代へ、その野望をたくしたのだった。

後代にたくすとともに、おのれの代でなせる最大の事業として、家老片倉小十郎景綱とはかってひそかにおこなったものが、奥州外様雄藩の連合である。

そのころ佐竹、最上、津軽、南部、上杉らも幕府による取りつぶしと改易政策におびえていた。政宗は奥州の繁栄と鎮護を大義名分にして、外様各藩の幕府にたいする共同防衛を根気よく呼びかけ、ついにこれに成功した。一藩といえども幕府の好餌になろうとしたときには、ほかの各藩が同時にたちあがる誓約を六藩はとりかわした。

ところが、おもわぬことがその直後にもちあがった。盟約のわずか三年後、最上五十七万石の改易がとつぜんおこったのである。

最上藩は戦国の英雄義光によって確立された雄藩であったが、義光死後、藩政はおさまらず、お家騒動がつきなかった。義光の後をついだ家親と、同年生まれの異母弟義親とがお家を二つに割って争い、騒動をくりかえしたあげく、家親が義親をころし、家親も原因不明の死をとげた。

家親の後をわずか十三歳の源五郎義俊がついだが、彼にはお家ぐるみの騒動を処理していくだけの力がまだなかった。家老重臣たちが二派三派にわかれ、幕府へおたがいの非をうったえ合って泥沼の醜状をさらし、ついに幕府は最上家を改易処分にした。

最上藩は最上衆みずからの手によってほろび去った。盟約によって五藩がたちあがる理由も状況もなかったのである。

最上にかわって、二本松藩丹羽家が後の六藩連合にくわわったが、最上改易がはからずも後代にいたってとんだ禍いをおこすもとになった。最上家にのこった六藩連合の神文誓紙の写しが今になって、重大な問題をひきおこしてきているのである。

兵部がこのところ苦慮し、なやまされつづけているのは、このたった一本の巻物であった。この代物が政宗ののこした大いなる遺産ともいうべき奥州の悲願を粉砕するおそれがあった。

伊達藩では、代々藩王のほかに片倉小十郎と筆頭奉行にのみ政宗がたくした六藩連合の存在がひそかにつたえられてきた。しかし二代忠宗以降、代々の藩主たちは藩財政の逼迫とその対策という藩政の重大課題におわれるばかりか、あいにく政宗の遠大な野望の衣鉢をうけつぐべき器量と見識をそなえた人物がいなかった。

ようやく当代にして、片倉小十郎景家という器量人がでた。藩主がまだ若く、藩政に実権を持っていなかったのがかえって幸いした。

初代いらい、片倉小十郎の名は奥州各藩にきこえていた。政宗を薫陶し、奥州の覇者にみちびいた初代片倉小十郎景綱の名を奥州各藩の武士たちはわすれていなかった。

十年まえの天明三年にも、小十郎は六藩連合の趣意を実現すべく五藩にはかって、あるていどことははこびだした。が、その年奥州全域は未曾有の大飢饉におそわれ、伊達藩の野望は挫折のやむなきにいたった。

それからかぞえて十年め、伊達藩は今すでにのっぴきならぬところまでたちあがっていた。そのきっかけになったのは、昨年九月オロシア使節ラックスマンが根室に来航したことに端を発する。

ラックスマンの開国と通商の要求は幕閣を震えあがらせた。

幕府ではただちに〈異国船防備令〉をだすと同時に、とりあえず目付石川忠房と村上義礼の二人を根室へ派遣し、ラックスマン一行の応接にあたらせ、相手の真意などをさぐらせる一方、最大限に月日をかせぐよう命じた。前回安永七年に厚岸に来航したオロシア船同様、幕府の延引策にしびれを切らして帰国することを期待したのであった。

石川と村上はラックスマン一行を松前や箱館にまねいてもてなしをしつつ、のらりくらりと延引策を展開していった。

定信が、オロシア皇帝の国書と献上物はうけとらぬ、江戸への来航はみとめない、コーダユーとイソキチ二人の漂流民だけはうけとり、厚く一行の労をねぎらうということに幕府の方針を決定したのは、翌年五月の夏だった。

ラックスマンはそれでも通商の望みを捨てず、再三幕府の考慮をもとめ、ついに長崎入港の許しを得たが、六月末にいたってとつぜん一行は松前港を去って、帰国してしまった。

幕府ではオロシア使節が又しても延引策によって嫌気がさし帰国したものと安易にかんがえた。その安堵が大きいあまり、長崎入港の許しを得ながら、その望みをはたさぬまま帰国したオロシア側の意図について不審をいだく者がいなかった。

一方、奥州白石城にあって、ラックスマンの来航をきいた片倉小十郎は、その当初から大胆な密謀をはりめぐらした。兵部に命じて、腹心の新庄津太夫という者をひそかに根室へおくりこみ、同地に建てられたラックスマン一行の屋舎に潜入させたのである。

津太夫は危険をおかし漁師に身をやつして潜入をこころみ、ついにラックスマンとの面談に成功した。そしてまず第一歩として伊達藩との密貿易を提案し、その後にきたるべき奥州王国との大々的な通商貿易と、さらに奥州王国を発足させるための協力を要請したのであった。

ラックスマンは当初、津太夫にたいする答えを明確にしなかった。が、年があけ、春がすぎても依然幕府の意向がはっきりとさだまらぬ段になって、ようやく津太夫と真剣な討議をかわすようになった。

夏に入って、定信の意向が正式にラックスマンへつたえられたが、そのときにはすでに彼の胸中には幕府への不信が大きく羽根をひろげ、かわる相手として奥州伊達藩が明確なかたちで存在していた。

エカテリーナ号が長崎へむかわず、帰国の途についたことは、伊達藩の交渉がほぼ成功したことをあらわしている。ラックスマンはいったん帰国して、オロシア皇帝の裁許を得てふたたび来航することを約し、北海の彼方へ去ったのであった。

奥州外様六藩の足並みがにわかにととのいはじめたのは、ほぼそのときからである。五藩とも奥州王国発足に大いなる可能性をみいだしたのであった。

このときの立役者新庄津太夫は、このところ連日、兵部の用部屋に顔をだしていた。しかも

いったん用部屋に入ると、半日はでてこぬことがおおい。

ということは、兵部自身も対オロシア密貿易の準備と六藩連合の詰めに忙殺されているのだった。

今朝も、兵部が巳の刻すこしまえに用部屋へ入ると、すでに津太夫が待っていた。

「本日は、測量地図ができあがりましたので、持参いたしました」

といい、津太夫はさっそく数枚の大きな図面をとりだした。

「うむ」

津太夫が一枚一枚ひろげていった図面は伊達藩東北部に位置する海湾、海港の測量地図である。

「金華山、女川、追波、志津川、本吉、気仙沼に一応しぼってまいりました」

兵部はその各地図へ真剣な眼差をそそいでいった。

「密貿易をおこなうには、いずれも恰好の場所とおもわれる。これだけ沢山あると、かえって目うつりいたすな」

伊達藩の最良最大の港といえば石巻だが、ここは伊達藩の海の表玄関である。江戸、大坂への主要航路でもあり、港にはつねに数百石から千石積みまでの大船が輻湊しており、とても密貿易をおこなえるところではない。

それよりも金華山以北の三陸海岸は鋸の歯のように陸地と海が複雑に入りくんだ特殊な海岸線をかたちづくっており、港としては未開発で、あまり人目もなく、密貿易に適したところはいくらでもある。

津太夫は今年の夏、松前からもどってくると、すぐに測量技師をともなって、三陸海岸へ踏査と測量の旅へでかけ、先月（九月）もどってきたのである。

「おなじようなでこぼこの湾、入江をしておりましても、実際にその場へいってみますと、それぞれのちがった貌をもっております。湾のひろがり、海の深浅、荷受け、積み荷の便、不便、どことといっておなじところはありません。あらゆるところを考慮して、この六ヵ所をえらびました」

津太夫はまだ三十をでて間もない年齢だが、学識がふかく、覇気もあれば、どんな困苦にもたえぬけるたくましい肉体をもっている。彼はおよそ半年間、根室、松前などに潜入し、ラックスマンのもとへ隠密裡に出入りをつづけているうちに、オロシア語をなんとか理解し、かたことで話ができるようになっていた。オロシア貿易が実現した暁には、通商方の責任者になるべき人物であった。

兵部はなお注意ぶかく六つの湾の測量図に見入った。

密貿易の基地としては、湾の位置や地形ばかりでなく、仙台や石巻との距離が重要な問題になる。それが本格化した場合には、オロシア人の居留地もつくらねばならぬ。そのほかいろいろな面から仔細に検討しなければならなかった。

兵部自身はかねてから、女川、追波、志津川の三ヵ所を候補地としてかんがえていた。

「それについては、片倉様のご意向が重きをなすことになろう。なるべくはやくきめて、今度は

築港にかからねばならぬ。その測量と築港もそのほうにやってもらう」

六藩連合、対幕府政策、対オロシアとの交渉を勘案すると、早急に港を決定しなければならなかった。

「つきましては、お奉行に一つおねがいがございます」

そのとき津太夫が一膝乗りだすようにしていった。

「なんじゃ」

「港のこともさりながら、オロシアとの約束はまだ完全にととのったとは申せませぬ。ラックスマンはわたくしに約束をあたえてくれましたが、ペテルブルグにもどって万一皇帝の許しがでないこともかんがえられます」

「ううむ」

兵部が懸念していることもそれであった。もしオロシア密貿易が不成功におわれば、六藩連合が失敗に帰するおそれもある。

「わたしがオロシアへでかけていくのはいかがでございましょうか」

津太夫の言葉に兵部は一瞬啞然となった。津太夫はとんでもないことをいいだした。

「オロシアへでかける？」

「はい、ラックスマンが再度来航するのをただ待つよりは、そのほうがよろしかろうとかんがえました」

兵部は津太夫の顔につくづく見入った。兵部にはかんがえられぬことであった。

だが、津太夫はまぎれもなく本気でいっている。その顔には嘘や虚勢はみじんも見られなかった。

「オロシアまでどのようにしていく」

第一にオホーツク海を越える船もなければ、航路さえ知らぬ。

「本気でいく気になれば、どんな手立もございます」

津太夫は自若としてこたえた。

「それはそうだが」

兵部は津太夫の勇気と気魄におされた。

「オホーツクをわたるのに、なにも黒船や千石船でなくてもかまわぬでございましょう」

「うむ」

「七、八百石の船ならば、いくらでも手当がつきましょう」

「しかし……」

「はやい話が、コーダユーとイソキチもオロシアへゆき、各地をめぐって無事に帰国いたしたではありませんか」

「コーダユーらはオロシアへいったのではない。漂着いたしたのだ」

兵部は津太夫の途方もないかんがえにあきれた。

「漂着なら漂着でもかまいませぬ。ラックスマンからおよそ航路はきいております。もしその航路を見うしないましたときは、コーダユーがたどったとおりに漂着いたすつもりです」

無謀きわまりない行為だが、成功の可能性がないわけではない。それを成功させるのは、比類なき勇気と忍耐と運であろう。

兵部は津太夫の熱意につきうごかされ、思案に入った。

コーダユーとイソキチの二人は今年六月、松前でラックスマンから引きわたされ、現在江戸の番町にある薬園にとめおかれ、身柄は幕府に管理されている。

コーダユーは伊勢白子の船頭で、大黒屋幸太夫といい、イソキチは船子の磯吉であった。幸太夫は天明二年、磯吉ら十五人の船子とともに荷を満載して白子浦から江戸へむかって船出した。ところが運わるく遠州灘で暴風雨にぶつかり、荷をながしてしまい、それ以後あてどもない漂流をつづけた。

翌年七月、約八ヵ月後にアレウト（アリューシャン）列島のアムチトカ島に漂着し、そこで島民のオロシア人から好意的なあつかいをうけて四年間をすごした。その後幸太夫らはカムチャツカに上陸し、さらにオホーツク、ヤクーツクをへて、オロシアの首都ペテルブルグに到着した。

このあいだに九人の船子が死んだが、幸太夫は何度かエカテリーナ皇帝へ帰国嘆願書をさしだしたばかりでなく、とうとう皇帝に拝謁し、ついに長年の念願である帰国をゆるされたのであった。

津太夫は万一のときは、この幸太夫の例にならうというのである。

「おまえの熱意にはあきれもし、感心もいたした。片倉様もこれを聞けば、大変およろこびになられるだろう。だが、すこしかんがえさせてくれ。津太夫は伊達藩にとってかけがえのない人材なのだ。もしおまえを異国へおもむく途中か帰途でうしなうことでもあれば、とりかえしのつかぬことになるだろう」

兵部は感嘆と感謝のおもいをこめていった。

「わたしは無事にいってかえれる自信がございます。ぜひともおゆるしいただきとうございます」

「うむ、わかった。よくかんがえてみよう」

そうこたえたとき、兵部は自分の胸中ではほぼ津太夫のオロシア派遣を決断していた。

片倉小十郎を説得する自信もあった。

のこる問題といえば、派遣の時期であり、その以前に密貿易港を選定し、築港にとりかかることであった。

「できるだけはやくおきめねがいとうございます。幸太夫が漂流しはじめましたのは、十二月半ばごろだと申します。その時期をかけはなれますと、潮のながれがかわってしまうおそれがございます」

津太夫はすでにそこまでかんがえていた。

「津太夫、かたじけない」

兵部は部下にむかって礼をいったのだった。

津太夫が退出していってから半刻ばかりたったころ、あわただしい足音がちかづいてきた。

「江戸表から、鈴懸様のご使者が到着いたしました」

早見清右衛門が入ってきてつたえた。

「すぐにとおせ」

また難事出来か、と兵部はおもった。

伊達藩の江戸表には、奉行鈴懸主税助が公用人としている。いわば江戸家老といってもいい。若い藩主斉村の側にあって、鈴懸が諸事をきりまわしているのだ。

兵部のまえにあらわれた使者は至急を要する長旅であきらかに疲労困憊していた。

「江戸表からの急使にございます」

そういった声はややかすれ、顔は蒼ざめていた。

「早駕籠でまいったか」

「はいっ。鈴懸様のお言葉をおつたえいたします。このたび藩主斉村様の江戸屋敷留め置きが幕府から命じられました」

「なにっ、江戸屋敷留め置き……」

兵部は息をのみこんだ。斉村は明年三月帰国する予定になっていたのだ。

「左様でございます。幕府からおゆるしがあるまで、殿様のご帰国はみとめられなくなりました。それからさらに一つ」

「うむ」

「このたび江戸に大地震がおこり、江戸城西の丸の石垣、城門、櫓などが倒壊いたしましたにつき、その修築大工事の命令が伊達藩にくだりました。くわしいことは追ってつぎの使者がおつたえいたすでありましょう」

きいたあとしばらく兵部は返事をしなかった。できなかったのである。一瞬気の遠くなるようなおもいにおそわれた。

藩主の江戸屋敷留め置きは、江戸参勤をずっとつづけろという処置である。危険人物を人質にとっておくという昔ながらの幕府の外様大名政策である。

それにもまして難事は、西の丸の修築工事である。これは降ってわいた大災難事である。これもまた家康いらいの、有力外様大名いじめの奥の手であり、古来これに泣かされた大名の数はすくなくない。

下手な工事をうけ負った大名は一国の身代をつぶしかねぬ。

いつかはくると覚悟していたときが、予想していた以上にはやくやってきた。伊達藩としては殿様を人質にとられたうえに、その首に刃をつきつけられたにひとしい。

「わかった。至急対策をかんがえよう」

兵部は使者をさがらせて、用部屋に一人とじこもった。

これへの対策はすぐに頭の中にいくつか浮かんだが、一人でこの問題を熟慮する時間がほしかった。

半刻、一刻、二刻……、ついに下城の時間がちかづいても、兵部は用部屋からでてこなかった。

米戦争

晩稲刈りもほとんどおわって、江戸や周辺の田圃には稲の切株と藁塚や掛稲だけがのこる寒ざむしい季節がおとずれた。日脚は極端にみじかくなった。

小春日がつづいても、すぐ日がおちてしまうので、はたらく者にとってはこころせかれる時候である。町には新米も今年酒もでているが、いつもの年よりも出まわりがはかばかしくなかった。

例年だともう先月（九月）の末ごろから、米河岸伊勢町は滅法活気づいてくるのである。伊勢町堀に新米の俵をいっぱいにつみこんだ船が近国、遠国各地からぞくぞくと入ってきて、河岸の両側にびっしりと隙間なく立ちならんだ米蔵がどこもいっぱいになる。米河岸が荷揚げするのは新米だけとはかぎらないので、一年中伊勢町に活気のたえるときはないが、晩秋から寒の入りごろまでが最盛期である。

米問屋の主人たちはこの時期もっとも多忙になって、悠長にあそんでいられなくなるのが常である。

ところが今年は、今ごろになっても、今一つ米河岸のにぎわいが盛りあがらなかった。平常の

月とほとんどかわりないくらいである。

両国の富田屋には、相かわらず常陸屋勘兵衛が姿をみせていた。

「冗談でいってるんじゃあないんだ。わたしは女将を女房にしたいんだが」

お蝶はこの秋、萩見物を口実に常陸屋へまねかれ、勘兵衛の後添いにもとめられた。

そのときの勘兵衛の言葉がまだお蝶の耳の奥にのこっていた。

妾にほしがっているのだろうとおもいこんでいたので、よろこびは大きかった。後添いにもとめてきただけで、そのとき彼がいかがわしい振舞いにおよんでこなかったのも好感がもてた。

「結構すぎるお縁談ですので、すこしかんがえさせてくださいまし」

お蝶はそうこたえたが、いまだに正式の返事をしていなかった。

身分不相応なほどいい縁談であるが、承諾の決心をするにはまだ一つこころのこりなものがあった。お蝶はまだ百次郎にはかない期待をかけているのだ。

一度惚れて、裏切って、はからずも再会した男だけに、今度こそはその縁を大事にしてゆきたいとおもっていたところにおこった不意の縁談である。

勘兵衛からは一度それとなく返事の催促をされたが、言葉をにごしてたくみにすり抜けた。

勘兵衛はお蝶にとって、好感のもてる男であり、またもっとも大事な客である。私情と商売の両方でつき合っている。

彼ほどの男となると世間にそう大勢いるものではないし、またいたとしても簡単に昵懇になれるわけではない。どうしても彼の女房になりたいというほどの気持はないが、ことわってしまう

にはあまりにも惜しい縁談である。よしんばことわるにしても、なるべく長くつき合っていたい相手であった。

だからお蝶は、ぎりぎりまで返事をのばすつもりなのだ。今までも何人かの男にたいして、こうした態度をとってきた。

今度も、のらりくらりと目いっぱい一年くらいは返事をひきのばすことができるとみていた。女のずるい手段かもしれないが、これくらいのことができるようでなければ、女の細腕で店一軒やって世渡りしていくことはむつかしいのである。お蝶は体を餌にして男をひきつけておくことは性分からいってできないが、それ以外の女の武器は精いっぱい有効につかって生きてきた。少々男を傷つけることだってあるかもしれないが、これがお蝶の生き方である。

「今年はどういうわけだか、奥州米が出おくれているんだ」

この時季しばらくは勘兵衛の足が遠のくだろうとおもっていたところ、彼はそう仕事に追いまくられていない様子である。その理由は伊達領の米がこの秋からばったりと江戸に入ってこなくなったからだそうだ。

とはいっても、伊達の米は江戸町民のかけがえのない食糧であるから、おそかれ早かれ、船をつらねてどっと入荷してくるだろうとお蝶はおもっていた。なにしろ、伊達米が入荷してくれば江戸の米相場が三割方値下りする、といわれるほど伊達米は江戸の市場につよい影響力を持っている。

今年の夏、一時天候が不順で凶作が心配されたが、その後もちなおして凶作も不作も避けられた。だから伊達領に米がないはずがないのである。例年なみの収穫はあがっていた。

しかも大量の米を江戸に売らなければ、伊達の財政はたちゆかぬ。伊達藩は米で藩財政をささえている。

〈買米〉という特異な制度によって、年貢いがいの米も農民は勝手に処分することができず、藩のきめた値段で藩へ売りわたすことになっている。もしこれをやぶれば、〈密石〉の罪でおもい罰をうける。このきびしい制度が伊達藩をささえる太い命綱になっていた。

藩創設のころ、伊達藩はけっして米の産出にめぐまれてはいなかったが、政宗いらいの熱心な新田開発と治水事業によって、現在では仙北平野に一大穀倉地帯をつくりあげていたのである。表高六十二万石の伊達藩が内高百五十万石といわれるまでになったゆえんはここにある。

「おそくたって、この月の晦日ごろまでには、伊達米をつんだ船が白帆をつらねて鹿島灘を漕ぎすすんでくるだろう」

と勘兵衛もはじめは楽観していた。

ところが十月の晦日がしだいにせまってきても、伊達領の船が銚子に入ってきたという情報はまだきけなかった。

大体、江戸に一年間に入ってくる米は二百万俵くらいだといわれている。それを分類すると、大雑把にいって、幕府米、藩米、商人米にわけられる。

幕府では天領の貢租米はほとんど江戸にあつめ、浅草にある米蔵におさめ、旗本や御家人の蔵米、扶持米、江戸城内の食い扶持などにあて、のこった米は米問屋へ売って換金する。旗本や御

家人にわたった蔵米、扶持米も自分等の食い扶持以外は、札差の手で米問屋へ売りさばかれる。

天下諸藩の米は江戸藩邸などの食い扶持をのぞいて、やはり江戸、大坂へおくられて換金され、いわゆる納屋米と呼ばれる商人米はいろいろな経路をとおって、大坂、江戸にはこばれ、米問屋へ売りわたされるのだ。

江戸への搬入経路をわければ、海路、河川、陸路の三種類である。それを受けとる江戸の米問屋は、下り米問屋、地廻り米穀問屋、関東米穀三組問屋、河岸八町米仲買、脇店八ヵ所組米屋の五種類にわけられる。これら江戸における米屋の総数はおよそ四百軒にもおよぶ。

海路から直接江戸に入ってくるのは、上方からの下り米が中心であり、そのほかは木更津から上総米が、横須賀から相模米がはこびこまれた。

河川では利根川が圧倒的に多くつかわれ、ついで荒川と江戸川である。

陸路についていえば、中仙道筋の米が板橋に、奥州街道筋の米が千住に入ってきた。

いずれにしろ、海路と河川ではこばれる米のほとんどは一度は伊勢町に入ってくる。伊勢町は江戸における米の流通の出入口なのである。

「幕府と伊達藩がとうとう喧嘩をはじめたそうだよ」

お蝶が勘兵衛からそう聞いたのは、晦日のことだった。

「それで江戸にお米が入ってこないんですね」

お蝶はこれでようやく腑におちた。

「どういうわけで喧嘩になったのか理由は知らないが、伊達が幕府のやり方に腹をたてて、米の

江戸送りを止めているそうだ」

「道理で。このところお米の値がじりじり上っているんです。わたしのような商売をしている者には、すこしの値上りでもずいぶんひびくんですよ。その喧嘩はいつまでもつづきそうなんですか」

お蝶は眉根にかすかに皺をよせた。居酒屋だって酒を売るばかりではない。一膳飯屋もかねているし、ちょっとした料理も売る。

「米は伊達藩が持っているいちばん大きな武器だよ。伊達が江戸へ米をおくらなければ、江戸は大変な騒ぎになる。伊達があくまでもやりぬくつもりだとしたら、幕府だってよほどの覚悟がいるだろう。泥沼の大喧嘩になることは目にみえている」

「そこまできてしまったんですか。それじゃあ双方が大怪我をすることになりはしませんか」

「伊達はおもいきって兵糧攻めにでてきたんだよ。裏で幕府とのあいだによほどの事情があったんだろう」

「とばっちりを受けるのは、町の者たちですね」

「わたしんところだって商いが立たなくなる恐れがある。米の出入りがなくなれば、米屋はあがったりだ。伊勢町の米屋はみんなそうなる。伊達の米ばかりあつかってるわけじゃないが、なんといっても半分以上が伊達米だからね。ながいあいだ米屋をやってきたけれど、こんなことは前代未聞だよ」

「そうでございますね。旦那さまのところは、もっとも被害が大きいでしょう。どうなさるおつ

もりですか」

「もうしばらく様子を見ているしかないだろうね。伊達がどこまで本気で兵糧攻めをつづけるのか。幕府への威しでやっているのか、それとも本気で江戸を干乾しにする覚悟があるのかどうか。もしそうだとしたら、伊達だって領内に米がだぶついて、藩庫に金が入ってこなくなる。伊達にしたって、自分の首をしめることになるからな。成りゆきしだいじゃ両刃の剣だよ」

勘兵衛にはまだ切羽つまった色はあらわれていないが、困惑をおぼえていることはありありとうかがわれた。

お蝶もよもや江戸の町民が飢えるような事態にはおちいるまいとおもったが、楽観はゆるされない、と肌身に感じた。幕府と伊達の喧嘩は雲の上の出来事だが、彼女にとっては江戸に米がなくなることのほうが、はるかに重大事なのである。

十一月に入った早々、百次郎は早朝、源之助とともに行徳河岸から船にのって、江戸川をさかのぼり境河岸へむかった。源之助の腿の傷はもうすっかりよくなっていた。

この船はたった一夜で境河岸から行徳河岸に到着する乗合いのかえり船だ。

利根川と江戸川は関東各地と江戸とをむすぶ水路の動脈である。人の交通、物資の流通、文化の伝播などの役目をこの河川が昔からはたしてきた。いわば、江戸の生命線である。

利根川は往古は江戸湾にそそいでいた。徳川家康が関東に入国したとき、利根川の本流を東へむけ、銚子から太平洋へ押しだした。それは江戸周辺の広大な地域を水害からまもり、多くの新

田を開発し、さらに重大な目的は関東各地と江戸をむすぶ水運路をきりひらくためであった。

三百諸侯は年貢米を江戸へはこぶ必要があり、それには陸上よりも水路による輸送のほうがずっと便利であった。こうした廻米や物資の揚げおろしをするための船着場が〈河岸〉である。

河岸には河岸問屋や船積問屋ができ、大量の荷を滞留させる蔵が立ち、いろいろな商人があつまり、旅籠や茶屋などができて一年中にぎわった。

「幕府は伊達藩公の帰国を禁じたようだ。普通ならば明春三月が帰国の時期になっていた」

終着境河岸についたとき、船からあがって百次郎は源之助にひくい声で打ちあけた。境河岸の対岸関宿は利根川と江戸川の分流点である。百次郎は船に乗る直前、浦上弥太郎からそのことを聞いていたが、船内では乗合客がいるのでそれについては触れなかったのだ。

「幕府と伊達の喧嘩は、それでございますか」

「藩主を人質にとっておけば手も足もでないとみたのだ。伊達が米の江戸おくりを止めたのはそれに対抗する手立だよ。やれるものならやってみろ、伊達を甘く見るなよといういわば幕府への仕返しだな」

参勤交代は江戸参勤と帰国を一年交代でおこなうのが武家諸法度でさだめた原則である。

こうなると、表立って先に戦をしかけたのは幕府ということだ。

「幕府は伊達のこういう出方を予想していなかったのではありませんか」

「これまでの伊達ならば、きまって穏便策をとるところだ。あくまでも下手にでて帰国の歎願をくりかえしていたはずだが。このところで伊達はかわった。あきらかに今までの伊達ではなく

なったな」

「とことんやるつもりでしょうかね」

「そこまでの力はないと見るのが当然だろう。伊達は幕府の手ごたえを見るつもりなのではなかろうか」

「それにしても、伊達にもいささかの自信があるのでは……」

「大胆不敵というべきだな。幕府にとっても伊達の出方は思惑はずれだっただろう」

「伊達藩に一体どんな変化がおこったのでしょうか」

百次郎と源之助は小声でかわし合いながら河岸問屋下総屋へむかった。

ここは五万八千石、久世大和守の城下である。境河岸には河岸問屋、船積問屋が二十数軒あるが、下総屋は中でもっとも規模の大きな問屋であり、ここの主人が町名主をつとめている。

河岸通りの角地に面して、下総屋が大きな間口をひろげていた。そして裏手の中通りに面して旅籠下総屋の玄関があった。二軒とも主人は下総屋太兵衛である。

百次郎と源之助は船積問屋の店頭をとおりすぎて、中通りへまがり、旅籠の暖簾をくぐった。

百次郎は店の番頭に太兵衛を呼んでもらった。太兵衛は船積問屋の裏口から旅籠の玄関に入ってきた。四十半ばくらいの小肥りの男である。

「わたしは赤石百次郎という者だ。こちらは遠藤源之助」

ひくい声で名乗ると、

「うけたまわっております。わたしは下総屋太兵衛です。よろしくおねがい申します」

太兵衛は如才なく返事をした。

「ご主人、やっかいをかけるな」

「わたしどもにできることでしたら、お役にたちたいとおもいます。何なりとお申しつけくださいませ」

町名主をつとめ、さらに店二軒を経営しているだけに、世渡りの上手な男とみえた。

浦上弥太郎から老中松平伊豆守信明をとおし、久世大和守にたいしてある依頼がおこなわれていた。その依頼は久世家の家来から下総屋へ申しわたされていた。

「境河岸における船積問屋の荷受けと船積みの予定を、公儀のお役目によってしらべている。下総屋ばかりでなく、この河岸全体について知りたいのだが」

百次郎は用向きをあきらかにした。

「うけたまわりました。この河岸には船積問屋が二十五軒ございます。今夜のうちに各々へご用向きを申しつたえておきます。明朝にはすべてわかるように準備いたさせましょう」

「奥州米、わけても伊達米についての仔細を知りたい」

「承知いたしました」

太兵衛はこころよく応じた。町名主の権限によってそれくらいのことは無理なくできるのだ。

船積問屋には、荷受けと船積みの予定がまえもってくまれているのである。特別な場合以外は予定外の荷は荷受けもされないし、船積みもされぬことになっている。それでなくては米蔵の容量に限度があるし、船積みにも制限があるからだ。

その夜百次郎と源之助は下総屋に宿をとり、翌朝太兵衛のむかえをうけた。

境河岸が荷受け船積みをする物資は米のほかに麦、大豆、麻、綿、材木、鮮魚、塩魚、干鰯、〆粕などがある。けれども米が圧倒的に多く、関東各地の米の大半はこの河岸を経由して江戸に入る。

奥州の廻米のほとんどは銚子でいったん荷揚げされ、利根川のぼりの高瀬船、平田船につみかえられて、境河岸にいたり、ここから江戸川で江戸へはこばれるのだ。

それで百次郎は境河岸と銚子における荷受け、船積みの状態と予定を実地にしらべにきたのである。

下総屋については、伊達米以外の奥州米は例年どおり入荷されているが、伊達米は九月の末から一俵も荷揚げしていなかった。今月いっぱいに入荷する予定もなかった。だから下総屋の米蔵は九月末以来がら空きの状態だという。

太兵衛に案内されて、百次郎と源之助は河岸に面した下総屋の米蔵の中へ入っていった。広い米蔵の奥のほうに米俵がつみあげられている。

そして、相馬、高崎、米沢、倉賀野、栃倉……など発送地の名が札に書かれて米俵に差してあった。

「いつもの年でしたら、とてもこんなものではありません。大抵はこの蔵が七、八分はうずまっております。伊達米がこないので、この有様ですよ。伊達の米がこの時季にどっと入って、出ていかないことには河岸の活気もあがりませんよ」

太兵衛は憮然として言った。

「ほかの問屋もこんなものか」

「これからご案内いたしますから、おわかりになるでしょう。どこの問屋の米蔵もこの有様です」

「入荷してくるあてもないんだね？」

「そうなんでございます。なんでも、伊達様は幕府と喧嘩をなさっているんだそうでございますな。はやいところ仲なおりをしてもらいたいものです」

暗然とした太兵衛の態度には船積問屋の実感がこもっていた。

百次郎と源之助は太兵衛の案内をうけて、河岸にならんでいる各問屋の米蔵をのぞいてあるいた。問屋の主人たちは昨夜のうちに太兵衛の連絡をうけて、みな百次郎と源之助を待ちうけていた。

「これだけ見れば、あとはおなじでしょう」

およそ半分にあたる十余軒の問屋の米蔵を検分したところで、源之助がいった。

どこの蔵にも伊達米は一俵もない。入荷の予定もないことがはっきりした。

「いろいろ面倒をかけて、かたじけなかった。境河岸の有様はよくわかった」

百次郎と源之助は以下の検分を打ちきって、利根川下りの船に乗りこんだ。この船は乗合でも荷船でもなく、久世家が用意してくれた早船であった。

途中どの河岸にも寄らず、その日の夕刻には銚子浦に到着した。

銚子はいうまでもなく利根川の河口を占め、各種船舶の集散する関東最大の要地である。各種問屋は立ちならび、問屋商人の大きな倉庫がひしめき合っている。

奥州諸藩の蔵屋敷があつまり、役人を常駐させ、廻米の荷揚げや江戸送りの調節などをおこなっている。各藩各地の米が一度に江戸へ送られれば米相場に影響するので、蔵屋敷に荷を滞留させて、出荷の調節をはかったりするのである。

諸藩の廻米を実際にあつかうのは、御穀宿といわれる六人の商人である。銚子では御穀宿の商人が羽振りをきかしており、船積問屋たちを実際に支配している。

百次郎は笠間屋という御穀宿をたずねた。御穀宿六軒のうちで笠間屋はもっとも由緒のある古い店である。戦国時代、笠間屋の先祖は豪族であった。

笠間屋の主人忠左衛門にたいして、おなじく浦上の依頼が松平伊豆守をとおしてつたわっていた。

忠左衛門は百次郎と源之助の到着を待っていた。

「伊達様の米はばったりととだえております。今後もどうなりますのやら見当もつきません。伊達様の蔵屋敷の米蔵の中もほとんど同然だと申しております」

忠左衛門の返事はかねて予想したとおりだった。

銚子にある各種の米蔵の中は、南部、相馬、米沢、津軽、棚倉、磐城、平、新庄、笠原……などの米であった。

「これで当分のあいだ江戸に伊達米が入る見込みはないとみなければならぬ。このままで年を越

さなければならなくなるかもしれない」

暗鬱たるおもいで百次郎はいった。

「この年の瀬には、江戸に米騒動、打ちこわしがおこるかもしれませんね……」

源之助も声をおとした。

「そうなると、伊達の大量の米は一体どこへ消えていくのか？」

これがこのたびの調査でうかびあがってきた問題であった。

伊達は毎年およそ三十万石の米を江戸へおくっていた。その三十万石をそのまま伊達藩がかかえこんでしまったら、今度は伊達藩がおのれを干乾しにする結果となる。

「源之助、江戸へもどったら、その足で伝兵衛と大坂へむかってくれ」

かえりの船の中で百次郎はいった。

「やはり、大坂でしょうか」

源之助もおなじことをかんがえていたようだ。

「それだけの米を始末するところといったら、大坂いがいにないだろう」

「承知いたしました。いってまいりましょう」

源之助はしずかなうちにも決意をひめていった。

浪華の決闘

浪華大坂――。

天下の貨七分は大坂にあり、と人々にいわれているのは大坂が天下の台所であり、全国流通市場の要の位置にあるからである。

しかも大坂商人があつかう貨物の代銀の七分は、年間百数十万石におよぶといわれる蔵米である。この蔵米は安治川、尻無川、木津川の河口から船でさかのぼり、いったん中之島や堂島一帯にある諸藩の蔵屋敷におさめられ、米仲買の手によって売りさばかれる。

この取引きのおこなわれるところが、堂島の米市である。堂島が発展したのは、はじめ新地町割がなされ、新地営業策として、茶屋、遊所、食べ物屋がさかんに誘致されたからだ。

ところが米市ができてからは、茶屋、遊所などは川一つへだてた曾根崎へしだいにうつってゆき、堂島は純然たる商賈の町となった。そのため一方では曾根崎新地が遊女町、茶屋町として繁昌し、発展してきたのである。

寛政期のこのごろでは松平定信の緊縮政策、風紀粛正などがあって、公然とは遊所をおくことはできなくなったが、茶立女、髪梳き女、飯盛女などの隠し売女が茶屋や風呂屋、旅籠などにお

かれて、客のもとめに応じていた。

曾根崎と堂島とのあいだを蜆川がながれており、その両岸には振舞茶屋、泊り茶屋などがびっしりと櫛の歯のように立ちならんでいる。曾根崎側の下流には芸妓の置屋がいくつもあり、茶屋街の奥は旅籠、風呂屋そのほかの商家が繁昌している。

そのうちの一軒の旅籠住吉屋に三日まえから逗留をつづけている男の客がある。三十中ごろの年恰好で、商売は行商をしている。

朝大きな風呂敷包をかついで市中をあるきまわって、日暮れとともにかえってくる。いかにも勤勉に商いをしている感じの男である。

「あけみがいたら、今夜呼んでくれないか」

ところが、今夕もかえってきたときに、帳場の番頭にそうつげた。

商売には真面目でも、女がいないと夜をすごせぬ性質のようだ。これまで毎夜女の注文がつづいている。

あけみは住吉屋にながくいる飯盛女である。年はもう三十にちかく、器量もそうとりたてて目だつほどの女ではない。だがこの客ははじめての晩についたあけみが気に入ったのか、これで三日つづけての名指しである。店としてはいい客なのである。

名は伝兵衛。上方と江戸とのあいだをいききしている商人だと、本人があけみにかたった。が、その正体は、さみだれの伝兵衛である。

源之助とおなじ日に江戸をたったが、彼は速歩術に達しているので、ふつうなら半月かかると

ころを、わずか九日で大坂についてしまった。

それで源之助が到着するまで、市中で内偵をおこなっていた。伊達米三十万石の行方を追って、大坂へきたのである。伝兵衛が堂島に隣接した曾根崎に宿をさだめたのも、そのためだった。

堂島には大坂中はもとより、諸国の米商人が出入りしている。その連中が宿にし、また飯を食い、酒を飲んであそぶところといえば、たいてい曾根崎かいわいである。

彼等から噂をきくには、ここはもってこいのところであった。しかも伝兵衛は日中、内偵に出あるくばかりではなかった。毎晩女を相手にたわむれているのも、地元からの情報を仕入れようという下ごころがあるからである。

一風呂あびて、夕餉をすまし、しばらくたったころ、部屋の襖がしずかにあいた。あけみが、するりと部屋の中へ身を入れてきた。

「旦那さま、今夜も呼んでくれはって、おおきに」

あけみは閨ではいやがりもせず大胆な振舞をするくせに、ふだんの立居はしとやかである。みじかい期間だが、所帯をもった経験があるといっていた。

亭主があそび人で、多額の借金をこしらえ、それの始末にこまってあけみを新町の遊廓へ売りとばそうとした。その寸前に仲人のところに駆けこんで、離縁されたのだが、実家へはもどれず、食べるために茶屋の仲居になったがやっていけなくて、とうとう遊女とかわりない飯盛女に身をおとしたということだった。

「どうやら、あけみにおぼれこみそうだ。おまえなしでは夜がながすぎるというものだ」

愛想をいって伝兵衛はあけみをむかえた。世辞はあくまでも世辞にすぎないが、それでもいうのといわないのとでは女の気分がちがう。

「まあ、旦那さま、お上手いわはって」

あけみはそういいながらも、うれしそうにすり寄ってきて、ちょっと膝をくずして横ずわりになった。

「おれは蝶々かなにかのように、あっちこっちの花に手をだすのは好きじゃあない。一人におぼれていくたちなんだよ」

伝兵衛がさらにいうと、

「旦那さま、大好きやわ」

あけみは片腕を伝兵衛の首にまわしてあまえてきた。

紅白粉の匂いがつんと鼻孔をくすぐり、伝兵衛も満更でない気分になってきた。かるく抱いてやると、もうあけみは鼻にぬける声をだしはじめた。

「おお、寒っ、おこたであたためておくれやす」

あけみはつめたい手で伝兵衛の腕をとって、自分から火燵に入り、となりに伝兵衛の場所をつくった。

火燵の中であけみはすぐ手をかさねてきた。やわらかくて、しなやかな手をしている。

伝兵衛は空いているほうの手をのばして、あけみの膝へもっていった。細身ではないので、女

のそのあたりにはしたたかな手ごたえがあった。

伝兵衛は手ざわりをたのしみ、手を内側へもぐらすと、あけみはそれをたすけるように膝をわずかにひろげていった。さらにもぐらせていくと、あたたかい素肌にふれた。伝兵衛はそのぬくもりと肌の感触をしばらくあじわった。

いつしかあけみの肩がたおれこんできて、伝兵衛はかかえこむようなかたちになった。女の髪のにおいが鼻を刺激した。しかもあけみの手は胡座をくんだ伝兵衛の股間をしっかりととらえていた。

その手がうごきだすにつれて、伝兵衛は気分のたかまりとともに、昨夜の痴戯をそのままつづけているようなえもいわれぬ錯覚にとらわれてきた。あけみも内腿を十分ひろげており、指先をはわせると、あたりはもう十分うるおっていた。

指先は難なく体の中へ入りこみ、かすかなあえぎがはじまった。伝兵衛も陶然とした気分へみちびかれていった。

「ちかごろ、堂島をにぎわすような噂はないかね」

そうきいたのは、火燵から閨にうつって、一度まじわりをおえてからだった。あけみは身づくろいもしないまま、伝兵衛の胸の中にぐったりと抱かれていた。

「お江戸の米ひでりで、堂島の相場がおもろうなってきたんやないですか」

あけみは気だるそうにこたえた。

「それはもう先月からはじまってることだ。米商人があっとおどろくようなことはおこっていないか？」

「さあ……」

あけみはなかなかのってこぬ。

「そんなことが行商の役にたつもんなんだ。あったらばおしえてくれ」

「そないなことがあったら、大抵旅籠の人から耳に入るんやけど」

「たとえていうなら、一文字屋がなにか大事をしでかしたとか……」

伝兵衛はさそい水をむけてみた。

「一文字屋はんが大事するわけありまへんやろ。一文字屋はんはこのところ商売にしくじって、暖簾がかたむいてるいうくらいやから」

あけみの答えに伝兵衛はおどろいた。一文字屋は大坂における老舗であり、伊達藩の蔵元を長年つとめる両替商である。

「一文字屋がまさか……」

「まさかとはおもいますねんけど、まさかがようあたることがありまっしゃろ。一文字屋はんは大名貸やってますさかい」

伝兵衛は腹の中でうなり声をあげていた。目の鱗がおちるおもいがした。この三日間、堂島や中之島をあるきまわってついぞ耳にしなかった情報がいとも簡単にあけみの口からきけたのである。

「大名貸にはいつも踏みたおしの危険がつきものだが」

「それはどうか知りまへんが、先月あたりからとつぜんそんな噂がではじめましたんや」
「そうか……」
伝兵衛には感ずるところがおおいにあった。
大名貸はきわめて危険な商売だが、巨大な身代をきずきあげるにはこれにしくものはないといわれている。なにしろ貸しつける額が商人貸にくらべると比較にならぬくらい大きいうえに、その年の年貢米を担保にしているのだから、まず取りっぱぐれることはない。利息も高い。利息のほかに扶持米もくれる。
そのうえソロバンによわい武士が相手だから、なにかと商売はやりやすいのである。大坂の豪商といえば、ほとんど大名貸をやって身代をきずいたといわれるほどだ。
ところが、この大名貸にも唯一大きな難点がある。藩財政が二進も三進もいかなくなった大名が最後の手段に踏みたおしをすることである。
その大名は当然信用をうしない、以後金融に支障をきたすが、大坂の豪商といえども、これをやられると元金も利息もすべて取りっぱぐれ、大抵身代もつぶれてしまうのだ。
「一文字屋はんのお店は高麗橋筋におますよって、明日でものぞいてきてみたらええやないですか」
あけみはそういったが、そんなことが簡単にできるくらいなら苦労はいらぬ。伝兵衛は今まで、一文字屋を大坂における伊達藩の根城だとかんがえていた。
ともかく、伊達藩が江戸送りの三十万石の米にからんで、一文字屋となにかことをおこしたこ

とがうかがわれた。
「ちかくをとおったら、のぞいてみよう」
そういって伝兵衛はその話を打ち切った。

白い衣がちらっと、伝兵衛の視界をかすめた。
晩夏の花火の夜いらい、伝兵衛は白い衣には神経質になっている。はっとしてふりむくと、割烹着をきた若い料理人が二人つれだって振舞茶屋の勝手口からでてきたところだった。
伝兵衛は安堵してとおりすぎ、曾根崎から天満のほうへむかった。今日は源之助が大坂につく日である。
青物市場のにぎわいをとおりすぎると、天満橋の橋詰にでた。
天満橋は大坂の北と東の出入口であり、八軒屋が船着場である。淀川筋、大和川筋の船もここから先、市中へは入れないのである。市中の水路は茶船と上荷船の独占になる。
そのため、天満橋あたりはひろい水面を埋めつくすように諸船が輻湊している。
四半刻（三十分）ほど待つと、伏見からの乗合三十石船が到着した。
その中に浪人者になりすました源之助の姿があった。遠くから二人は目と目で合図をかわした。
「源さんがくるまでに、できるだけのことはしらべておいた」
「そうか、すまない」

二人は南の橋詰で再会の言葉をまじえた。

「やはり大坂とにらんだ百さんの眼力はあたっていたよ。大坂で伊達のうごきをいくらか知ることができた」

「伝さん一人にはたらかせちまって」

「いや、まだ内偵を開始したばかりだ。入口のところしかさぐっちゃいない。これからが大変だ」

「で、どんな様子ですか」

源之助は今まで長旅ではやるこころをおさえにおさえていただけに、目がかがやいている。今すぐにでもうごきだしたい気分でいるのがわかる。

「まあ、旅でつかれてるだろうから、昼餉でもやりながら」

伝兵衛は橋のちかくにある一膳めし屋ふうのところに源之助をみちびいた。これから旅へでていく者、かえってきた者、船頭、船人足らが腹ごしらえをしたり、一ぱい飲んでくつろぐ店である。だから朝から夜まで客の足がとぎれない。

二人は追いこみ式の小座敷のいちばん奥にあがった。

「伊達はどうも一文字屋を踏みたおしたらしい。むろんそれには三十万石の米のあつかいがからんでいるんだろう」

チロリの酒をやりながら、伝兵衛は小声ではなしだした。店の客たちはめいめいが話をしているので、かえってこういうところのほうが話をきかれにくいのだ。

「そうですか、一文字屋は蔵元を追いおとされたんですね」

「まだ表沙汰になっていないが、そういう臭いがしてるんだ。伊達はおもいきって荒っぽいやり方にでたようだ」

「大量の米を右から左へうごかすんだから、かなり乱暴なことをやらなきゃあおさまらないでしょう」

「後釜は升屋らしい。升屋平右衛門が今は伊達の蔵元になってるようだ」

「升屋？」

源之助にははじめてきく名であるようだ。

「升屋平右衛門は大坂北浜にある米商人で、古くから大名貸もやっている。伊達に出入りしはじめたのはもう古くからのことだそうだ」

「その升屋が一手に伊達米をひきうけたんでしょうか」

「そこのところはまだつかめてない。これから探索にかかるところだ。升屋がどれほどの米商人かよくわからないが、三十万石を一人で始末するのは少々荷がおもいのではないか」

「ともかく、一文字屋と升屋をさぐることですね」

伝兵衛と源之助の使命は三十万石の行方とからくりをさぐることだが、もしできるなら伊達の取引きをはばんでやろうという野心が二人の胸中にはひそんでいた。うまく成功してその米がすんなり江戸に入ってくれば、江戸の米ひでりをふせぐことができるかもしれぬ。

「これからさっそくかかりましょう」

源之助は若いだけにはやりたっている。

「一文字屋に出入りしている両替屋にようやくちかづく手立ができたところだ。相当つっこんだ話がきけるとおもう」

二人は腹ごしらえをしてから店をでた。

そして船場のほうにあるいてきた。

大坂の繁昌ぶりはきさしにまさるものだ。町に活気がみなぎっている。

上町と船場をつなぐ今橋のちかくまできたとき、

「あ……」

小声をもらし、伝兵衛は源之助を制して立ちどまった。

源之助も前方へ目をすえ、緊張感をみなぎらせた。橋のむこうから、まぎれもなく浄衣をまとった山伏が三人錫杖を手にしてこちらにむかってくる。

「伝さん、どうする」

まだ距離はだいぶあるが、ひくい声で源之助がいった。

「逃げるわけにはいかない」

源之助もおなじ気持なのだ。

山伏は山間を跋渉するものであるから、市中にいるときでも柴打ち（山刀）を帯びることをゆるされている。

二人は橋をわたりはじめた。花火の夜、襲撃をくわえてきた連中であろうとひらめいた。

山伏たちもためらうことなくちかづいてきた。

彼等は有髪である。本山派の山伏であることをしめしている。

伝兵衛と源之助は横にならんであるいた。源之助の懐中には百次郎からゆずられた短筒がひそめてあるが、とっさの今火縄の仕度がしていない。第一、大坂市中でそんなものをやたらに打ちはなつわけにはいかぬ。

山伏たちのいかつい目鼻だちがはっきりと見えてきた。蔵王山伏たちであると確信した。

橋の下からつめたい風が吹きあげた。

「いざというときはおれはまず真ん中のやつ、つづいて左側をねらう。源さんは右のやつをたのむ」

伝兵衛は正面へ顔をすえたまま、ささやいた。道場での剣術ならば源之助のほうが腕は上だが、修羅場となると伝兵衛の場数がものをいう。

山伏たちも横にならんでくる。

伝兵衛は正面からくる山伏の両腕へ視線をそそいだ。そのうごきと同時に右手が懐中の四方手裏剣をつかむ手はずである。

伝兵衛と源之助は橋のやや右寄りを、山伏たちはすこし左寄りをあるいている。橋のほぼ真ん中あたりで両者はすれちがうことになる。どちらかが道をよけなければ、伝兵衛と右端の山伏がぶつかり合うことになるだろう。

距離が三間ほどにちぢまった。

そのとき、源之助の横合いから、船人足ふうの男が追いこして、山伏たちの右手をとおりぬけ

ていった。

うごきがあるとすればこの時……、とおもったが、山伏たちはそのままちかづいた。

山伏たちのきびしい眼光が伝兵衛と源之助に油断なくそそがれている。

緊迫の数瞬がつづいた。

（……！）

両者はすれちがい、とおりすぎた。

何事もおこらなかった。右端の山伏がさりげなく道をよけたのである。

そして彼等は遠ざかっていった。蔵王山伏ではなかったのだ。

脂汗（あぶらあせ）が伝兵衛の全身をつつんでいた。源之助の顔にもじっとりと汗が浮いている。

「冷や汗をかかしてくれたな」

「てっきり修羅場になるとおもいましたよ」

二人はほっとして顔を見合わせた。山伏という山伏がすべて敵であるわけがないのだ。

「でもまだわからんぞ。この市中に蔵王山伏がひそんでいないとはかぎらぬ」

伝兵衛らが蔵王山伏の存在を知り、さらに晩夏の花火の夜奇襲をしかけてきた集団の正体がほかならぬ彼等だと知ったのは、大坂へ出立する直前だった。百次郎が浦上弥太郎に呼ばれて、その旨をきいたのだ。

浦上はその出所をあきらかにしなかったが、まちがいのない極秘の情報が幕閣のいずこかをつうじて入ってきたのだそうである。伝兵衛なりに、その情報の出所を松平定信であろうとふんで

いた。

それればかりではなく、そのとき奥州外様六藩のあいだに秘密連合という想像の枠をこえた新事態がすすみつつあることもつたえられていた。今回の伊達藩を中心にした異常なうごきが、ようやくその大規模な輪郭と奥の深さを浮かびあがらせてきたのだった。

事態がこのまますすむと、幕府と奥州の過半をしめる外様勢力とが正面から激突することは避けられぬ情勢になる。

翌日、暁（あかつき）におきて、伝兵衛と源之助はまだいくらか夜の気配がのこる市中へでていった。一文字屋に出入りしている両替商立田（たつた）屋と話をする段取りができたが、立田屋は早朝京へ旅だつ予定になっており、どうしても出立のまえに会いたかったのだ。

大川にかかる難波橋をわたって、船場へでた。

岸壁や桟橋には無数の茶船や上荷船が船体をやすめるようにもやっており、朝のはやい商人町もまだ活動に入っていなかった。

八百八橋――、といわれるだけに大坂は市中を縦横に川と掘割がながれる船と橋の町である。

伝兵衛と源之助はそこから東横堀（ひがしよこぼり）へでた。立田屋は東横堀の上流久宝寺橋（きゅうほうじばし）のちかくの南久宝寺町に店舗をかまえている。

思案橋の附近まできたとき、

「や……」

伝兵衛はとつぜんみじかい声をもらした。

前方の町角から不意に白衣の山伏が二人あらわれた。そしてこちらへむかってあるいてきたのだ。

「また、でたな」

と源之助もいったが、昨日のことがあるので、すぐに身がまえるようなことはなかった。ここ ろのうちにかなりの余裕があった。

山伏はお札や護摩の灰をくばりに市中をあるくことがある。伝兵衛はそれであろうとおもった。

「昨日の山伏じゃないか」

伝兵衛がそういったのは、両者の間隔が十間ほどにせまったときだ。顔と体つきがよく似ていた。

伝兵衛は安堵しかけたが、一応相手を注視しつづけた。

それに今朝は二人対二人であるという安心もある。いくら相手が荒修業をつみかさねた山伏でも、同数を敵にして負けるわけがないという自信があった。

「たしかに昨日のやつですよ」

源之助も見おぼえていてそういった。

そのとき、一人の山伏が背の笈へすっと手をのばしたが、それはまるで何気ない動作のように見えた。

源之助もことさらそれを警戒はしなかった。

つづいてもう一人の山伏もあるきながら笈へ手をやった。これもごく自然な所作であった。

その直後、伝兵衛の体を凍らすような恐怖がつきぬけた。

「危いっ、源之助！」

山伏がとりだしたのは、いずれも手弓だった。しかもすばやいうごきで彼等は矢をつがえた。

それと見た瞬間、源之助の体が大きく横へとんだ。

シュッ

するどい摩擦音とともに矢が飛来したのと、伝兵衛がすばやく路上に身を伏せたのが同時だった。一瞬でもおくれていたなら、伝兵衛の喉を矢がつらぬいていたはずである。

これは緻密に計算しつくされた攻撃であった。昨日、町中ですれちがったのは、今日にそなえてこちらを安心させるための伏線だったのだ。

「いくぞ！」

伝兵衛は瞬後に身をおこし、猛然と突進を敢行した。飛び道具をつかう相手にたいしては、接近戦をいどむのがもっとも効果的だ。伝兵衛は敵が第二矢をつがえるわずかな間隙をねらった。

源之助もはやくも前方へむかって音もなく疾走していた。その右手には、すでに抜き身の一刀がにぎられている。

伝兵衛も隠しもっていた忍び刀をぬきはなっていた。

見る見るうちに、前方に山伏の姿がせまった。

両人の手弓に第二矢がつがえられた。が、伝兵衛と源之助の果敢な突進を予期していなかった

狼狽の色が両人の顔にうかがわれた。

「やあっ」

源之助が右手の山伏の足元へむかって、体をたおしながら猛烈な滑走をこころみた。

伝兵衛は同時に空中へ高く跳躍した。

「やっ」

飛びながら伝兵衛は忍び刀を力いっぱいふるった。

手ごたえはなかったが、この奇襲攻撃は完全に相手の意表をついた。

左側の山伏は頭上を飛びこえる伝兵衛の忍び刀を身をしずめてかわすのが精いっぱいだった。

もう一人の山伏も身を横に転倒させて、源之助の足からの体当りをかろうじてかわした。

形勢はこの一瞬に逆転したのである。

手弓はもう無用の武器となった。伝兵衛は自分の最大の武器四方手裏剣を捨てることによって、相手の手弓を使用不能ならしめたのだった。

伝兵衛が忍び刀をひくくかまえて地を這うように突撃した。

「おうっ！」

山伏は手弓を投げ捨てて、敢然と柴打ちをふるって立ちむかってきた。

唸りを生じた柴打ちが伝兵衛の頭上をおそって、空を切った。

しかし伝兵衛の忍び刀もわずかのところではずされた。

「まだ山伏が隠れているぞ」

伝兵衛は念のために源之助へ声をかけた。伊達山岳党は集団をもって連携し合いながら攻撃するのを得意としているからだ。

源之助も柴打ちを相手に果敢な闘いをくりひろげている。

敵味方とも鍛練しぬいた高度な腕を持つだけに、簡単には相手をたおすにはいたらなかった。

「おう！」

伝兵衛は山伏の胸をねらって必殺の突きをくりだした。が、これもわずか一瞬のところでかわされ、逆に鬢すれすれに柴打ちの切っ先がかすめた。

伝兵衛はつづけざまに、山伏の頭部、頸部をめがけて忍び刀をするどくふるった。

相手は二度三度うしろへ飛びすさって、からくもこれを避けた。

源之助の相手はたじたじとなって防戦一方になっていた。

道の片側は堀端だが、反対側には町家の軒と二階の瓦屋根が何軒もつらなっている。

そのとき、伝兵衛の視界の隅を大鳥がかすめたような気がした。

「あっ……」

上空を見あげると、町家の二階の屋根からとなりの屋根へ飛びうつった白い影がある。それはあたかも大きな白鳥に似ていた。まぎれもない山伏の飛翔である。山岳地帯の岩場できたえた至難の業だ。

（一つ、二つ、三つ……）

をかぞえた。

源之助もすばやくそれを見てとっていた。

一瞬、白い影が宙空におどった。

大鳥が上空から羽をいっぱいにひろげて舞いおりるように、山伏は地上にふわりと降り立った。姿は白鳥のように優雅に見えても、その実体は大鷲の闘争心と凶暴さをそなえているのだ。

あと二つの白い影は大屋根の棟にとまって獲物をねらうように下を見おろし、手弓をつがえていた。

「逃げろっ」

伝兵衛はさけびつつ堀端の道を翔ぶように逃走した。

頭上から矢が伝兵衛の前と後にはげしくそそがれた。

白い浄衣がそれを追って突風のようにはしった。

大屋根から大屋根へ、棟から棟へ二つの白い影も伝兵衛の頭上を軽々ととんだ。

上と下から、伝兵衛と源之助は追われた。

「二手にわかれよう」

源之助がさけんだ。

前方が本町橋の十字路になる。

源之助は橋へむかって真一文字に逃げた。

伝兵衛は本町筋へ逃げこんだ。

町家がとぎれたところで、頭上の白い影が二つ、つぎつぎに地上へ身をおどらせた。

伝兵衛は振りかえりざま、四方手裏剣をつづけざまに投じた。

そのうちの一つにたしかな手ごたえを感じた瞬間、山伏の一人が膝を折って転倒した。

本町橋を疾走する源之助の姿が一瞬視界をかすめた。

本町橋をわたりきった先には、大坂西町奉行所がある。源之助はよんどころなくそこへ逃げこむつもりのようだ。

伝兵衛はそのまま逃走をつづけた。

町はようやく朝の気配につつまれてきた。

早起きの商家の丁稚が箒をもって店頭にでてきたとたん、とんだ修羅場を目撃し、肝をつぶして店内へ逃げこんでしまった。

伝兵衛はもう一度四方手裏剣を投じておいて、辻から辻へむかって懸命に逃げた。脚力は誰にも負けぬ自信がある。

逃げ切る自信は十分あった。

夜の雨

江戸に乞食や浮浪人の姿が目だつようになった。真冬のさなかだというのに、寺院の境内や繁

華街の路上に吹きさらされている乞食を目にすることがちかごろおおくなった。

これだけを見ても、江戸に深刻な食糧危機がちかづいていることをうかがわせる。米の値段が上りはじめて、ほかの食べ物まで値がつり上り、今まで食うや食わずでもなんとか糧を得ていた最下級の者たちがまずはじめにもちこたえられなくなったのだ。

富田屋の勝手口のゴミ箱も、前の晩に捨てた客の食べのこしなどは翌朝にはすっかりきれいになくなっていた。

本場米をつんだ伊達領の船は依然としてこの秋冬一艘も銚子湊に入ってこなかった。

伊勢町も今はすっかり活気をうしなっている。

幕府と伊達藩の暗闘は今や泥沼の状態におちいっていた。江戸を米ひでりにしようという伊達藩の意図は、今のところ確実に効果をあげている。

このままの状態がつづけば、今年は正月に餅をたべられる家はごく少数になるだろう。

酒も高値になって、お蝶も商売がやりにくくなっていた。今までも、そう楽な商売をしてきたわけではない。ところがちかごろは、客のほうも食べるのに精いっぱいで、酒を飲む回数が目だって減っているのだ。

町の中も、殺伐とした雰囲気がそこかしこに感じられるようになった。

お蝶もちかごろ少々気が滅入って、商売にも身が入らなくなっていた。富田屋をはじめてからずっと、ほとんど休みなく商売に打ちこんできただけに、このところ疲れをおぼえてきたのかもしれなかった。

だが、ほかにもっと大きな原因があることを、彼女自身が知っていた。ちかごろ勘兵衛がばかにしつこく縁談の返事を催促してきていることだ。

できるだけ返事をひきのばそうとおもっていたお蝶の思惑がくるいそうだ。

はじめからことわる気なら、なにも苦労はいらない。気持が半々で、決断がつきかねているから、煩悶がつづくことになる。

勘兵衛の後妻になってしまえば、これから安楽な生活が保障される。贅沢三昧を一生つづけられることになるだろう。

奥州の一寒村に生まれた貧乏百姓の小娘が江戸に売られてきてから丁度十年めで、おもいもかけなかった栄華を手に入れることになる。

だが、

（それで十分幸せか……？）

こころのうちにそう問いかけてくる自分の声がある。

その問いかけにたいしてお蝶は自信をもって返事をすることができなかった。栄耀栄華は手に入れても、もっとも大切なものをうしなうことになるのではないか、という本心からの声が胸の奥底からきこえてくる。

（百さんと一緒に生きていきたい。夫婦になれなくたって、情人でもいい。情人になれないのなら、今のままの女将と客の仲だっていい）

これがお蝶の本心なのだ。

百次郎はお蝶に何一つあたえてくれぬ男だが、彼が身ぢかなところに生きているというだけでもうれしいことなのである。恋とはこんなものかしらとお蝶はおもう。

その夜もそんなことをとりとめなくかんがえながら、身の入らぬ客あしらいをつづけていた。いくら思案をくりかえそうと、いずれどちらかをえらばねばならぬ立場である。

切羽つまった場合には、やむなく勘兵衛のほうをとるだろうという予感がお蝶にはあった。

「女将、どうしたんだね」

とつぜん間ぢかから声をかけられて、はっと我にかえった。

目のまえに当の勘兵衛がわらって立っている。今暖簾をわけて入ってきた勘兵衛に気がつかなかったのだ。

「あらあ、旦那さま」

とたんにお蝶は生き生きとした顔と声で応じた。

「浮かぬ顔をしてたようだが」

「世の中が暗くなって、とんと商売がやりづらくなっちまいましてね。旦那さまこそ、今日はおそい時間に」

お蝶はわらってごまかした。もう半刻ほどで火をおとす時刻である。

「急に女将の顔が見たくなってね」

「本当ですか、旦那さま。こころぼそい気持になってたところ、旦那さまのお顔を見たらとたんに元気に」

といった言葉は嘘でもお世辞でもない。信頼できるたのもしい客をむかえて、お蝶のこころもようやく活気づいてきた。

「いちばんむつかしいときに頑張るのが商売のコツというものだよ。そのときを乗りきれば、後はなんとかなるものだ」

勘兵衛も今がいちばんつらいところだろうが、彼には余裕が感じられた。虚勢を張っているわけでもなさそうだ。

「どうなんでしょう。お米は入ってくるんでしょうか」

「江戸は天下様のお膝元だよ。江戸が飢えるようなことになれば、将軍様が天下に恥をさらすことになる。いざとなったら、どんなことをしたって幕府は江戸へ米を入れるだろうとおもうよ」

勘兵衛は相かわらず楽観的である。

幕府はすでに備蓄用の米蔵をすべて開放していた。さらに諸藩に呼びかけて、蔵米をすこしでも江戸へ廻漕するよう督励していたが、諸藩の蔵米はほとんど例年どおり売り先がきまっており、ごくわずかしか幕府のもとめに応じることができなかった。

納屋米についても同様である。やはり江戸の町民が最大のたのみとしているのは、建米である伊達の米なのである。

「いつかは入ってくるでしょうけど、それまで辛抱ができますかどうか……」

「伊達にしたって、大量の米をそういつまでもかかえこんでるわけにはいかないだろうから、いろいろ経緯はあっても、そうおそくない時期に江戸へ入ってくるだろう。幕府と伊達との喧嘩の

成り行きしだいで、おそくもなれば早くもなるんじゃなかろうか」

そういう勘兵衛の余裕がお蝶にはたのもしかった。

伊勢町の米問屋の主人たちは、幕府ばかりをたのみにしてもおれなくなったので、それぞれ産地へでかけていって、すこしでも米を確保しようと狂奔しているところだ。ところが勘兵衛だけはすこしも動じないで、世の中のうごきをしずかに見まもっている様子である。

「お相伴させてくださいな」

「いいとも」

看板もまぢかいので、お蝶もチロリでやりはじめた。

客は勘兵衛だけになっていた。

あつい酒が喉から胃の腑へながれおちていくと、滅入っていた気分がすこしずつ消えて、しだいに晴れやかな気持になってきた。お蝶は根はくよくよなやんだり、かんがえこんだりするのは苦手な性質である。

今までの生き方もそうであった。これまで幾度となく人生の岐路に立ったが、その都度おもいきりよく決断して、くるしい時期をなんとかきりぬけてきた。

失敗したとしても、そうながく後悔したりはしない。一時は気持がしずんでも、きっかけさえつかめば、すぐに立ちなおれる。江戸で十年ものあいだここまでやってこれたのも、おもいきりのいい性質と幸運にめぐまれたたまものだとおもっていた。

「お酒がとても、おいしゅうございます」

お蝶はつづけざまに飲んだ。

「女将はうまそうに酒を飲むな」

勘兵衛が感心した。

今夜は喉のすべりがとくにいい。苦みがすこしも感じられない。このぶんだと、いくらでもいけそうである。

二人は酌をかわし合った。

まだ酔ってはいないが、お蝶はたまらなくいい気持になってきた。さきほどまでの滅入った気分がふっきれていた。

こころのうちで、一つの決断ができたからだ。そうなると重荷をおろしたような爽快な気分になってきた。

「おや……」

お蝶は外の気配に耳をかたむけていた。

「雨が降ってきましたね」

しずかな雨の音がきこえた。

「傘をかりてかえるとするか」

勘兵衛がそういって立ちあがろうとするのを、

「まだ、いいじゃありませんか」

「だってもう看板だろう」

「どうせ、わたしの店なんだから、看板なんて、あってもなくてもおなじことです。もうすこし、腰をおちつけて飲もうじゃありませんか」
「女将がその気なら、わたしはいくらだって」
「第一、うちには旦那さまにお貸しするような傘はおいちゃおりませんよ」
勘兵衛はようやくお蝶の意のうちを察したようだ。
「とんだ雨のたすけ舟だな」
勘兵衛はふたたびおちついて飲みだした。
縁談の返事をひきのばすのが困難だとさとったときから、お蝶は覚悟をきめていた。相手からしつこくもとめられ、せまられていやいや抱かれるのは気性に合わない。どうせのことなら、自分から抱かれてやろうとおもったのである。
抱かれることで、縁組をできるだけひきのばそうという態度にあらためた。
「旦那さま、今夜は雨ですが、なんとなく佳い夜ですね」
さすがにお蝶もしんみりとした気持になっていた。
「生涯最良の夜になるかもしれない」
勘兵衛は期待で胸がいっぱいにふくらんでいるのだろう。
お蝶はさらに盃をかさねていった。
「夜が冷えてまいりましたね。お部屋へうつりましょうか」
ころ合いをみて、お蝶はうながした。

部屋の中にはかよいの小女が用意していってくれた火鉢に鉄瓶がかけてある。お蝶は火鉢を片方に寄せて、夜具をのべた。
のべおわったとき、いつちか寄ったのか、勘兵衛が抱きにきた。
立ったままでお蝶は抱かれ、口を吸われた。口の中で男の舌がうごいた。
勘兵衛は女のあつかいが上手だった。いつのまにか舌を吸いだされ、男の口の中へはこばれていた。
お蝶もいつしか気持がたかまって、自分の舌をからめていった。吸いこまれるたびに、ずきん、ずきんと胸の鼓動がはげしくなった。
気がつくと男の手が帯へのびて、それを解きかかっている。
「待って……」
お蝶は顔をはなしてうったえた。
(どうして……?)
男の顔がきいている。
「自分でときます」
お蝶は帯紐をするするといていった。男に脱がされるのは好きではない。
やがて行灯の明りが、お蝶の長襦袢姿をうつしだした。
男が去っていった閨の中で、お蝶はものおもいにふけっていた。

勘兵衛へ体をあたえた感慨はあまりなかった。

いやいや抱かれたわけではない。お蝶も燃えた。熟れきった体が男のたくみな愛撫にこたえて、ひさかたぶりにみだれにみだれた。後悔の念はすこしもなかった。

お蝶が目ざめたのは、夜明けのころだった。雨はやんでいた。

だから勘兵衛がおきたのも知っていたが、言葉をかわすのが億劫なので、眠ったふりをしていた。

勘兵衛はお蝶の顔をのぞきこんでから、一人しずかに身づくろいをして、そっと部屋をでていった。

（こんな男だったら、後妻になるのもわるくはないな）

そのときお蝶はおもったが、すぐに富田屋をたたんで勘兵衛の後妻になるつもりはなかった。

（幸運なんて、そういつまでもつづくもんじゃない）

今まで生きてきた体験から、お蝶の体にはそういうかんがえがしみこんでいる。幸運のあとにはかならず不運がやってくる、と日ごろからおもっていた。

だから、富田屋を簡単には手ばなすことはできないのだ。

この店は長い苦労のあげくようやく手に入れたお蝶の根城である。富田屋さえあれば、今後どのような不運、不幸におそわれようともなんとかしのぐことができるだろうというおもいがある。

お蝶は一度体をゆるしたからといって、そのまま男にもたれかかっていくような女ではなかった。今なら、まだ引きかえすことだってできる。

それに勘兵衛にたいして、今になって少々感じはじめたことがあった。

（わたしをほしいのなら、妾か情人にすればいいのに……？）

これははじめからあった勘兵衛への疑問である。

女の身としては嫁にほしいといわれたほうがうれしいにきまっている。妾や情人とでは比較にならない。

けれども勘兵衛ほどの男ならば、器量、家柄、気立て、しつけ……すべてにいきとどいた申し分のない相手をいくらでももとめられるはずである。いくらお蝶に惚れたとはいっても、たかが居酒屋の女将ではないか。どうしてもほしいのならば、妾か情人にすればいい。

お蝶も人なみ以上に自惚れのつよい女であるから、今までは勘兵衛がぞっこん惚れて後添いにほしがっていると信じきっていた。それがいったん体をゆるした段になって気持があらたまり、なんとなく勘兵衛の気持に不自然さをおぼえはじめたのである。

（あの人の言葉をそのまま信じてもいいんだろうか）

ここにいたって男をうたがいたくはなかったが、女の用心ぶかさであらためて勘兵衛という人物をちがう角度からかんがえはじめた。

それに彼ほどの地位も財力もある商人が両国の中通りにある居酒屋にかよいつめるというのも、いささかそぐわぬ感じがあった。勘兵衛ぐらいの人物ならば、名のとおった料理茶屋が酒を飲むところとしてはふさわしい。

どれほど地位や財力のある者でも居酒屋で飲んでおかしいはずはないが、勘兵衛ほどかよいつめるというのはめずらしい。今までは自惚れていたので、すこしも不審をおぼえなかった。

お蝶はまだ勘兵衛の体温がのこっている夜具の中で、昨夜自分を抱いた男について冷静な観察をつづけた。お蝶はとことんおぼれこむ性質だが、いったん疑いをいだいて立ちどまると、前へすすめなくなるのだ。

にわかに勘兵衛が得体のしれぬ人物におもえてきた。疑いをいだきながらも、その男の愛撫に燃えた自分の肢体が何度も脳裡をかすめた。

かんがえだすと、かぎりなく疑いがふかまっていった。米ひでりの中で、勘兵衛ただ一人悠然としているのも不可思議な気がした。

浜御殿二重櫓

江戸城と芝海手とのあいだの雲行きが、緊張をはらんであわただしくなっていた。

芝海手にある伊達藩上屋敷からは連日のように公用人鈴懸主税助をのせた乗物が江戸城とのあいだを往復していた。鈴懸は江戸詰の奉行であり、他藩の江戸家老にあたる。

寛政六年の正月をむかえてからというもの、鈴懸の登城はいっそうひんぱんになった。幕府と伊達藩との険悪な関係が、そのまま江戸城と伊達藩上屋敷とのあいだのけわしい雲行きにあらわれていた。

鈴懸はこのところ毎日、老中松平信明から江戸城に呼びだしをうけていたのである。今日も鈴懸の乗物が五つ半（午前九時）ごろ上屋敷をでていったのを、百次郎は至近距離から見おくった。

百次郎と源之助とは旧冬中から、芝海手にある浜御殿で起き伏していた。

伊達藩上屋敷と会津藩下屋敷とがならんだ丁度まうしろに、堀をへだてて位置するのが浜御殿である。会津藩下屋敷と浜御殿とは橋でむすばれている。

浜御殿は海に突きでた六万五千坪の洲浜を埋めたてた長方形の地である。寛永のころ将軍家の御鷹場であったが、のちに紀州家の浜屋敷になり、さらに六代将軍のころから将軍家が下屋敷としてつかう浜御殿となったのである。

現在では浜御殿奉行のもとに、筆頭役、浜吟味役、浜御殿番、世話役など百数十人が常駐し、管理している。

浜御殿は南北に長い敷地を持ち、その北西に表御門、西の中央に中之御門、北東の隅に船番所があり、東のほぼ中央に水門がもうけてある。

ところが、旧冬、表御門と中之御門のほぼ中央、伊達藩上屋敷の真裏にあたるところに、櫓がつくられた。基礎を石できずいた二重櫓である。

名目は浜御殿警備のためといわれているが、真の目的が伊達藩上屋敷への見張りのためである

ことはあきらかだ。通常、大名屋敷では櫓をもうけることなどできないが、将軍家の屋敷であるためにできたのである。

櫓の二階からは、上屋敷の内部が裏側からほとんど見おろせる。しかも伊達藩側から浜御殿をうかがわれることがまったくない。

伊達の屋敷のどてっ腹に、中町奉行の前進基地がもうけられたといってもいい。

さらに、中之御門から会津藩下屋敷に橋がかけてあり、下屋敷の表御殿の屋根裏部屋からは、伊達藩上屋敷の表側をうかがうことができる。会津藩といえば、かつて将軍補佐をつとめた二代将軍秀忠の第三子保科正之を祖とする生っ粋の譜代二十三万石である。家格からすれば白河の松平をもしのいでいる。

伊達屋敷のすぐとなりにこの会津藩の屋敷をもうけたのは、当初から伊達を見張る幕府の目的があったとかんがえられる。このように伊達藩上屋敷は横と真後に幕府の〈目〉がついているといってもいいのである。

「鈴懸の登城は今日でつづけて五日になりますよ」

会津藩下屋敷の屋根裏部屋から、鈴懸の乗物を見おくって源之助はいった。

正月三ヵ日をすぎてから、鈴懸は毎朝ほとんどこの時刻にお城へ呼びだされてゆき、松平信明ら老中の質疑をうけて、七つ（午後四時）ごろ下城して屋敷にもどってくるのである。

幕府と伊達藩との暗闘と駆け引きは、今や泥沼の状態を見せはじめていた。伊達はいまだに江戸の兵糧攻めをつづけており、現在では江戸の米屋の店頭から米俵はすっかりなくなっていた。

米問屋の米蔵もほとんど空になったといわれている。今ある米といえば、米問屋や豪商らがひそかに囲い持ちしたべら棒な値段につりあがった闇米ばかりである。

伊達の兵糧攻めに対抗して幕府は、藩主斉村の江戸留め置きと課役工事で報復したので、表むきはともかく伊達の国元は大揺れにゆれはじめた。斉村の留め置きはともかく、江戸城西の丸の修築工事を拝命すれば、伊達の藩財政は大被害をこうむり、立てなおし不能におちいるおそれがあった。

ところが双方ともにぎりぎりまで相手をうかがい、みずから退く様子は見せなかった。おたがいに意地を張り合い、戦をも辞さぬかまえでぶつかり合っていたのである。

伊達には大胆不敵なまでの自信と戦意がうかがわれた。幕府の圧力にたいして一歩もひかずに対峙していた。

その強気な態度の裏には、奥州外様六藩の連合がほぼ成立したことを感じさせるものがうかがえた。幕府がひとおもいに伊達への武力行使ができぬのはそのためである。

伊達への一発の砲撃が、奥州外様六藩の決起をうながすことをおそれているのだ。幕政の初期ならばいざ知らず、現在もし奥州の外様勢力がいっせいに立ちあがったならば、幕府といえども簡単に討伐することは不可能である。

さらに、奥州で兵乱がおこっている最中に、もし西国方面で外様大名がうごきだしたら、天下はたちまち大乱におちいり、戦国時代にあともどりしてしまうおそれもあった。それで幕府は伊達藩への対応に苦慮しているのである。

伊達は幕府の立場や意図を読みとおしていた。だから、鈴懸主税助は連日、城中で老中らのきびしい質疑をうけながらも、弱気におちいることはなかった。昂然と相対することができた。

まして彼等の恫喝に屈するはずもなかった。松平信明、本多忠籌、戸田氏教、太田資愛、安藤信成といった幕閣の切れ者らを向うにまわし、伊達藩の立場を堂々とのべ、臆することなく奥州の事情を論じ、ひるがえって幕府の無理解をなげいたりしつつ、一歩もしりぞきはしなかった。

通常、幕府が大名に疑いをいだいた場合の詮議や吟味は評定所において三奉行（寺社奉行、町奉行、勘定奉行）立ち合いのもとにおこなわれるのがつねであるが、松平信明は鈴懸を丁重に城中の書院にまねいて、みずから審問にあたった。

むろん、三奉行の立ち合いなどはない。老中付きとして浦上弥太郎が終始その場に臨席し、審問の様子をつぶさにながめていた。

百次郎は浦上からもれてくる数すくない言葉のうちから、伊達対幕府の確執の実態を知るのである。

松平信明は、とりあえず、伊達にたいして、江戸町民百万人を饑餓からすくうために三十万石の米の廻漕を要請した。

それにたいして鈴懸は、伊達藩がおこなう米の廻漕の実体は藩の蔵元である大坂商人の手によっておこなわれるものであり、藩としてはいったん蔵元にゆだねた以上、とかくの指図はできぬものであると主張した。伊達藩は毎年蔵元から莫大な大名貸をうけており、年貢米のおよそ半分はその担保として蔵元におさえられているのである。

蔵元がどこでどういう商売をしようと伊達藩のあずかり知らぬところだと鈴懸は論じた。江戸に持ちこむよりももっと有利な市場があればそちらへ売るだろうというのだ。

鈴懸はこれまでシラを切りとおしてきた。そしてときに、藩主斉村の江戸留め置きについて、幕府の意図をききただしたりした。

鈴懸はいまだ三十代半ば、小柄な男だが、家中きっての出頭人である。才知と才腕、なによりも肚のすわった度胸を片倉小十郎に買われたのである。

そして、江戸城西の丸の修築工事をもし伊達一藩でやるとすれば、完成するまでに一年はおろか十年あるいは二十年の歳月がかかるであろうと人を食った返答をした。その不敵な返答の中には、万一戦になれば応じるだけの覚悟と準備がいつでも伊達にあることをあらわしていた。

鈴懸は伊達六十二万石を江戸で代表する立場にふさわしく、胸のすく弁舌としたたかな勝負度胸を発揮して、老中らを翻弄していた。

このような鈴懸にたいして、老中たちは奥州外様六藩の同盟の有無などききだせるはずもなかった。うごかぬ証拠をつきつけるのであればまだしものこと、いささかでも鮮明さを欠いたものならば、かえって鈴懸に逆襲をこうむり、天下に幕府の恥をさらすおそれがあった。

百次郎は浦上からつたえられるわずかな言葉から、双方のやりとりをほとんど正確に知ることができた。

鈴懸は伊達藩には江戸を兵糧攻めにする意図はないとシラを切り、同時に江戸の食糧危機をすくう手立がない旨を主張し、また一方で西の丸修築工事をまともには受けかねるとこたえている

のだ。が、その言葉の中には微妙な言いまわしと駆け引きがあった。幕府の出方しだいによっては態度を変える余地のあることをにおわせているのである。

「源之助、今幕府と伊達が戦をまじえれば、奥州の天地はどううごくとおもう」

鈴懸の乗物を見おくってから、百次郎は口をひらいた。

「奥州外様六藩と幕府の戦いになれば、形勢はなかなか……」

源之助はいいしぶった。

「簡単な数字からかんがえてみよう。主唱者の伊達が六十二万石、ついで佐竹の二十万五千石、上杉は十五万石、南部十万石、丹羽十万石、ついで津軽が四万六千石、表高で百二十二万一千石。それにたいして、譜代大名は十七家で九十九万八千石。しかも会津と白河をのぞけば、一万石二万石のクズのような小大名の寄せあつめだ。禄高からすれば、断然外様のほうがまさる」

「奥州だけを比較すれば、外様衆のほうが強力だといえましょう」

「外様六藩がもし連合すれば、奥州の過半は制圧され、ついに全奥州は敵方の手におちるだろう」

「さらに、陸奥がみだれれば、上方西国に騒ぎがおこるかもしれません」

「おれのみるところ、伊達は西国の騒ぎなどあてにしていない。おのれの力に尋常ならざる自信を持っている」

その自信がどこからくるものなのか、百次郎はいまだにはっきりとした答えをだすことができなかった。

それは江戸百万町民の食糧の大半をにぎっているといった程度の自信ではない。

もっとほかに何かがある。奥州の覇権を決定づける強大な何ものかがあるはずだ。百次郎はそれをずっと思索しつづけていた。

「伊達の領内にどえらい金山か銀山でも見つかったんでしょうか」

源之助は屋根裏部屋の中で、そんな夢のようなことを口にした。

屋根裏部屋といっても、けっしてせまいところではない。隅のほうは背をかがめなければあるけないが、真ん中あたりは背のびをしても手が梁にとどかぬくらいの高さだ。広さも十坪以上はゆうにある。

その北面からとなり屋敷が見おろせるのである。伊達屋敷は物音もなくひっそりとしずまりかえっている。

「あたらずといえども遠からずだろう」

百次郎は床に寝そべり、肘枕をついていった。

「そうでしょうかね」

「鉱山を見つけたわけではないだろう。だが、伊達はふんだんに金の生る木を見つけたと見るべきだ。それ以外にはかんがえられぬ。これからの戦いは金、銀、銭の戦争だ」

「大坂の豪商たちをおさえたか」

「大坂の商人は生やさしい連中とはちがう。いったんつかんだとしても、金もうけができぬとなれば、さっさと見かぎって去っていく。こんな気のぬけぬ相手はあるまい」

「それでは、なんでしょうか。伊達の後楯になっているものは」
「六藩連合がもし完成するとすれば、この伊達の金蔓がしっかりしたものとなったときだろう。ほかの五藩もその金蔓にありつきたいとねがってる」
「全奥州をささえるほどの太い丈夫な金蔓となると……」
「伝兵衛や金次にも簡単にはわかるまい」
伝兵衛と金次はちかごろ浜御殿にも、ここの屋根裏部屋にも姿を見せていなかった。
両人はそれぞれの持ち場につき、油断なく任務をおこなっている。佐竹、津軽、上杉、南部、丹羽の各屋敷への見張りの拠点がすでにできあがっていた。
金次は佐竹の上屋敷のなな前にある華蔵院の櫓門の内部にひそんで、上屋敷の内部を見張っている。芝源助町で金次がやっているあかね屋は番頭の九七があずかっていた。
伝兵衛のほうは桜田門の真正面にある上杉家上屋敷を、それに隣接する幕府御用屋敷の二階長屋に住みこんで四六時中見張っていた。
そのほか本所二つ目にある津軽越中守の上屋敷はその正面にある旗本屋敷、外桜田の南部美濃守の上屋敷は隣接する幕府御用屋敷、永田馬場にある丹羽侍従の上屋敷はその側面にある日吉山王大権現観理院にそれぞれ見張場所をもうけて、屋敷の出入り、内部の様子などを仔細に観察しているのである。人数のたりないところは杉村三太夫配下の同心たちが助勢にきていた。
もし異常な事態がおこったときは、すぐさま浜御殿の百次郎のもとにつたえられる手筈になっていた。

幕府では奥州の外様大名の大同団結を阻止するために、六家を分断し、それぞれの伊達藩とのむすびつきを断ち切ってゆかねばならなかった。
老中松平信明はひそかに五藩の江戸家老を個別に江戸城にまねいて審問し、疑惑を追及し、将軍にたいし忠誠をつくすべき旨の誓紙をとりたてていた。将軍への諸大名の誓紙は御代替りがあったときにおこなわれるものだが、五藩ではあらためて誓紙を提出していった。
たとえたった一枚の紙切れだけのこととはいえ、天地神明にちかう形の誓紙にはいかばかりかの拠り所があった。もしそれをやぶるときは、天罰がたちどころにくだるものとおそれられた。
しかも将軍への誓紙は伊達藩への強力な揺さぶりになるものとみられた。
江戸家老の審問は日替りでほとんど連日きびしくつづけられた。これが続行しているあいだは、すくなくとも五藩はうごきを封じられているのである。だからこれをきびしく執拗につづけていれば、ついに五藩はおいおい脱落してゆき、伊達は最後に孤立するという見方が幕府側にあった。
この日、昼ごろ。厳重な旅ごしらえをした二人の武士が、千住掃部宿のほうからやってきて、大橋をわたった。
両人とも精悍ないかつい顔をしており、体軀は見るからに頑丈そうである。目くばりにも隙がなく、腰もすわっている。旅の装束からすれば、勤番侍といったありふれたいでたちである。けっして目だつ風体ではない。
装束のよごれを見れば、長旅をかけてきたことがわかる。年齢は若いほうがおそらく二十代、

もう一人が三十代であろう。

両人はほとんど無駄口をきかなかった。街道や町の風物に視線をおくりながらも、きびしい姿勢をくずさなかった。

浅草御門のちかくまできたとき、奴凧を手にした童児がむこうから駆けだしてきて、この両人にぶつかりそうになった。童児はおもわず居すくんだ。二人の武士がなにをしたのでも、いったのでもなかった。立ちどまってよけただけにもかかわらず、童児は恐れをなして、べそをかきながら逃げていった。

二人はその後もほとんど言葉をかわすこともなく、江戸の町をあるきつづけた。日本橋をわたり、芝口へぬけ、伊達藩上屋敷にちかづいてきた。

「源之助、あれを見ろよ。いかついのが二人入ってきた。普通の勤番侍とはちがうな」

百次郎はとなり屋敷の屋根裏部屋の梁と桁のすき間から、二人の武士が上屋敷の表門のくぐりから入ってきたのをじっと見てとった。

「昨日につづいて、これで五人になりましたね」

源之助が応じた。

今日まで一ヵ月以上も毎日伊達の屋敷を見張りつづけて、百次郎も源之助も屋敷を出入りする者の顔を大抵見おぼえるまでになっていた。中間や奥女中らの顔もおぼえた。初めての者はすぐにわかるし、来客の場合も容易に判断ができるようになった。すこしでも様子や雰囲気にちがいのある者は、すぐに目につくのである。

昨日、伊達藩の勤番侍ふうの者が三人、やはり屋敷のくぐりを入ったが、源之助が彼等のわずかな異風ぶりをすぐさま目にとめた。普通の勤番侍とは一癖ちがった骨柄風采が、三人の様子にはおのずからあらわれていた。武芸者特有の気風が、おなじく武芸に練達した者にはつたわってくるのだ。

「なにかあるな」

昨日につづく今日のことで、百次郎はただごとではないとおもった。

「国もとから、腕におぼえのある武芸者たちがあつまってきているんでしょうか」

「五人だけとはかぎらん。明日も明後日もくるかもしれぬ」

伊達家中よりすぐりの腕達者が、江戸上屋敷にあつめられているような気がした。

（いよいよはじまる）

と百次郎はおもった。

「戦いの前ぶれだ。雨か風か、いずれかくるだろう」

確信をもっていった。

「わたしもそんな気がします」

「伊達にとっては、幕府との戦いをはじめるまえに、どうしてもしておかなければならぬことがある」

「……」

「これがすまなければ、伊達はおもいきりたたかえぬ」

「人質ですか」
「藩主の奥方お鶴の方と母公天祥院を上屋敷からつれだし、無事仙台へつれもどすことが、伊達の戦略の第一歩となるだろう」
百次郎は以前からそう読んでいた。
源之助も合点した。
伊達はついに戦いへの第一歩を大きく踏みだしたのだ。
「そんなことができるでしょうか」
「伊達はどうしたってやるつもりだ」
徳川幕府がはじまって以来約二百年、かつて諸大名が幕府とことをかまえるために江戸屋敷の人質を国元に無事回収したという出来事はいまだきかぬ。並大抵のことでないとわかっていても、伊達はそれを成功させるつもりでいるようだ。
昨日と今日上屋敷に入った武士は、人質回収の特命をおびた戦士であろうと百次郎は推察した。
百次郎は血肉がおどってきた。その戦士たちの前にたちはだかり、特命をはばむ役目が自分たちに課せられていると信じるからだ。
この日の夕暮れちかくなって、また一人の特命戦士とおぼしき武士が上屋敷に入った。
百次郎と源之助は無言でそれを見やった。一度に大勢おくりこんでは目だつので、ごく小人数ずつ、仙台をたって上屋敷に参集しているものと見えた。

「こちらも人手が必要になった」
「少々の人数ではふせぎきれないでしょう」
「伝兵衛や金次にはこちらへきてもらわなければならん。かわりの者を桜田御用屋敷と華蔵院へおくろう」
百次郎はかねて、こうしたときの用意を浦上へたのんであった。
翌日、また二人の特命戦士らしき武士が、上屋敷に吸いこまれていった。
そしてこの日、伝兵衛と金次が浜御殿をへて、ここの屋根裏部屋にやってきた。
「相手はなにがなんでも奥方と母公を仙台へつれもどすつもりだ。こちらは断乎それをはばまなければならん」
百次郎は伝兵衛と金次にいった。
逆にいうと、お鶴の方と天祥院を仙台へやらなければ、伊達は幕府にたいして実戦をしかけることができぬのである。
お鶴の方は今年が芳紀十七歳、斉村とは一つちがいの美貌の奥方である。斉村が自分で見そめ、どうしてもと一昨年奥方にむかえた姫であるので、やや病弱ではあるが、夫婦仲はこの上なくむつまじいと噂されている。
上屋敷奥御殿の深窓でくらすお鶴の方を、残念ながら百次郎も源之助も今まで一度ものぞき見ることができなかった。伝兵衛と金次がくわわって見張りをしてからも、お鶴の方を見ることはできなかった。

が、それよりも特命戦士と見られる武士の数は正月十日までに、とうとう十三人になった。

十日の夜、百次郎は久方ぶりに屋根裏部屋をおりた。そして橋をわたって浜御殿へもどり、表御門脇の二重櫓へのぼっていった。

この櫓の中も、床敷きだが、人が寝起きできるようにつくられている。部屋は前と後二つに間仕切りされていた。

奥の間に来客があり、百次郎を待っていた。

両人は言葉の挨拶は省略し、目と目を見かわして、うなずき合った。

客は浦上弥太郎である。

百次郎は自分と浦上とのあいだに、一間四方のくだんの江戸の図面をひろげた。その図面にはすでに、伊達藩の上屋敷と中屋敷、下屋敷、さらに菩提寺東禅寺が朱筆でかこんである。

「お奉行、人数をかりあつめていただきとうございます」

百次郎は行灯の明りのなかで、図面に視線をそそいでいった。

「そういってくるのを待っていた。人数ならいくらでもだそう。百か二百か」

浦上は、伊達が老中の審問や西の丸工事の下命などによって追いつめられて急なうごきにでてくるのを予想していた。

「すくなくとも二百。成り行きいかんによっては五百でも千でもほしいところです」

図面へ視線をおとしていた浦上が百次郎の言葉で顔をあげた。

「五百から千の人数が入り用か」

浦上は念をおした。

「伊達の人質が脱出するのをふせがなければなりません。しかも、陸と海双方にわたります」

「うむ」

浦上はきびしい面持ちでうなずいた。

「人質の脱出は伊達のみとはかぎりません。六藩連合がもし成れば、佐竹、津軽、南部、上杉、丹羽も人質の脱出をはかるおそれがあります。そうなるときにそなえて申しあげた人数です」

「よし、わかった。それだけの人数を用意しよう。徒士百人組、御小人、持筒同心、持弓同心、御先手同心などをくりだそう」

それはかつて中町奉行が一度もうごかしたことのない規模の人数であった。

「その配置をご相談いたしとうございます」

「うむ」

「まず第一に、六藩の上屋敷の周囲を目だたぬようにかためます。さらに中屋敷、下屋敷といえども油断はできません。気づかれぬよう警戒いたすことが肝要でございます。それから江戸の出入口を、陸と海とにわたって封じなければなりません」

百次郎は江戸の絵図面の各所に朱筆を入れていった。

「赤石、これは戦争じゃ。そのつもりでかかれ」

江戸の出入口といっても、その数は多い。四宿だけとはかぎらぬ。行き先が仙台だからといって、奥州街道だけを警戒すればいいというわけではない。水戸街道や脇街道にも目をくばらねば

ならぬ。

江戸仙台間の海上輸送を検問するとなると、いっそう困難なことになる。船番所をきびしくかためても、安心はできぬ。河川にも警戒が必要である。

「これだけきびしい警戒をいたせば、江戸脱出は無理でありましょう」

百次郎は江戸周辺にまでいくつも朱筆を入れた。

「左様、これだけの守りを突破して脱出するのは、まず困難だろう」

浦上は一応満足の態度を見せたが、

「しかし、このほかの秘策がたった一つある。それがうまくはこべば、ことはまことに簡単にすむのだが」

と百次郎がひどく気持をひかれる言葉をはいた。

「秘策が、ございますか」

元来、〈秘策〉などというのは、ほとんどが言葉上の問題である。もし本当の秘策があったとしても、それは実現不可能な場合がおおいものだ。

「あることはある。が、これがなかなかむつかしい」

「左様でございますか」

いいながら百次郎は浦上の秘策について想像をめぐらした。

おもいあたるものが一つだけある。

成功するならば、それはまさに秘策と呼ぶにふさわしいものである。

北国の狙撃者

江戸は初春をむかえたが、陸奥の山中はまだ身をこおらせるほどの寒さがつづいている。

雪の中に、濃霧のような湯の煙があがっている。見わたすかぎり周囲は雪だ。

野も山も谷も、まだ積雪にうずまっている。

風が吹きわたってきて、湯の煙を巻きあげた。

ここは雪の中の温泉郷・定義温泉である。背後に重畳と峰をつらねる奥羽山派も、まだ雪におおわれている。

温泉郷とはいっても、冬があけたばかりの湯治場にはほとんど人がいない。夏場にぎわう湯治場も秋がふかまるころ、客は山をおりてゆくので、翌年の春もおそくなるころまでは閑散としている。わずかに土地の者だけがひっそりとのこって湯の番をしているにすぎぬ。

孫七は山間に板がこいし、屋根をもうけただけの温泉に体をひたし、湯の音をきいていた。

孫七は湯治場の者たちが里へおりていくころ、船形連峰からここにおりてきて、彼らがもどってくるころ、ふたたび深い山の中へかえっていくのである。

孫七には家族というものがない。肉親もいない。昔はあったが、現在はない。

彼は一年のうち大半を深い山の中で猟にすごし、雪でうごけぬあいだ湯治宿の留守番をたのまれている。こういう生活をもう十年以上つづけていた。年齢はまだ不惑（四十歳）に達していないが、容貌だけ見れば五十くらいに見える。

定義温泉には湯治宿が十数軒ある。

冬のあいだ、孫七はほとんど誰とも口をきくことがない。猟をしている期間も、深い山中でほとんど人に会わぬ。人と口をきくのは獲物をもって里におりてきて売りあるく期間だけである。

キキイッ

そのとき山鳥が不意にとびたつ羽音がおこった。

ウウウ……

猟犬次郎のひくい唸り声がそれにつづいてちかくからきこえてきた。

「次郎！」

孫七が呼んだが、うなり声はやまなかった。

孫七は不審をおぼえて、耳をすました。

山鳥の鳴き声がまたおこった。

孫七はすばやく湯からあがった。

脱衣場に猟師筒がおいてある。そこは丁度湯治宿の入口になっている。

定義温泉は奥羽山脈のふかい山懐にいだかれるようにしてあり、湯治宿はなだらかな山道の山腹にたむろしている。脱衣場からは、麓の定義村が遠くに見はらせる。

雪にうずまった山道を這うようにのぼってくる黒い人影が見えた。この時期、山の湯治宿をおとずれてくるのは、よほどの物好きか、緊急な用のある者にかぎっている。

孫七は念のため、猟師筒に弾丸をこめて、火縄に火を点じておいた。

人影は黙々とちかづいてきた。

「おうい」

孫七は呼ばわった。

人影はきびしい旅のこしらえをし、菅笠をかぶり、雪沓をはき、合羽をきている。孫七にはおもいあたるものがなかった。

もう一度呼ばわったが、応答がないので、一応猟師筒をかまえた。

ようやく相手が、撃つな、と手ぶりで合図をおくってきた。

湯治宿のまわりは雪がかいてある。

「どこからきた」

まぢかまできたとき、孫七はたずねた。

「江戸から」

相手の答えが孫七をおどろかせた。

その言葉に孫七ははるかなおもいをよびおこされた。

「今時季、ここに人はいないぞ」

というと旅の男は孫七をじろじろとながめてきた。

「孫七という人をたずねてきた」
「ふむ」
「孫七という人がいなければ、長吉という人でもいい」
旅の男がそういったとき、孫七の顔色がわずかにかわった。
「長吉はこの山にはいない。やつがいるのは、一つむこうの山だ」
長吉もこの十年余春から秋までのあいだ、船形連峰を中心にして猟をしている男だ。
「じゃあ、あんたが孫七さんだな」
孫七はだまってうなずいた。
相手はふたたびしげしげと見入ってきた。
「何の用だ」
旅の男はそれにはこたえず、懐から手拭いをとりだして、それをひろげた。
晒布に藍染めの柄が入っている。このころの手拭いとしては洒落たものだ。柄は杉の木を三本えがいている。
孫七はじっとそれに見入った。
嘘ではないか、とはじめはうたがった。その柄には遠い昔の思いがある。
徐々にこころがうごいてきた。
「わかりますか、これが何だか」
たずねられて、孫七はかすかにうなずいた。そして心底からおどろきのおもいにうたれた。

孫七は一昔もまえのことをおもいだしていった。そのころの彼は猟師ではなかった。
「杉村三太夫様……」
孫七はつぶやくように口をひらいた。三本の杉はこの人物をあらわしていた。ずっと古い過去のことが孫七のまえにもどってきた。
「おぼえていますか、杉村様を」
「おれは、その人の命令でこの地に潜入したのだ。もう十一年もまえのことになる……」
「ずいぶん古いことですね」
「将軍も十代様（家治）のころのことだ。いらいずっと潜入しつづけている。おれは中町奉行同心奥野孫七だ」
孫七とおなじく中町奉行同心大野木長吉が伊達藩への潜入を命じられたのは、天明三年の春だった。
伊達藩に不穏のうごきがあって、中町奉行与力が伊達藩に潜行したが、その後消息がとだえたために、孫七と長吉はその消息をさぐるために潜入していった。けれどもその後はからずも天明の大飢饉がおこって、伊達藩の策動も頓挫してしまった。
しかし、孫七と長吉への帰国命令はくだらなかった。その後もひきつづき伊達領にとどまって藩内の様子をさぐれ、という杉村三太夫の命令がつたわったまま長い歳月をへてきたのである。その間音信はいっさい絶えていた。いうならば、置きわすれ同然にうち捨てられてきたわけである。

「杉村様はお達者か」
孫七には久しくわすれていた上司への懐旧の念がおこってきた。
「杉村様はお元気です。杉村様からの命令をつたえにきたしだいです。わたしは五年まえから杉村様の配下となりました。海野三郎太と申します」
旅の男はそう身分を明かした。
「うけたまわろう」
孫七がいうと、海野三郎太は念のために周囲を見まわした。
「片倉小十郎をころせ——。これが杉村様からの命令でございます」
「片倉小十郎をころせ……」
孫七は口の中でちいさくつぶやいた。そして遠くの雪山の峰を見やった。
片倉小十郎といえば、はるかに遠い存在である。
「いかがでございましょうか」
「いかような命令であれ、命令は命令だ。したがうのみだ」
感情をつゆ見せずに、孫七はこたえた。昔の習性がよみがえったのだ。
「では江戸へもどって、そのように報告いたします」
「長吉には、おれからつたえよう」
「そうしていただければ幸いです」
今まで想像したこともなかった使命をうけて、孫七はしばらく呆然としていた。

伊達が昨年ごろからふたたびうごきだしていたことは、孫七は山中の奥地にいながらも察知していた。その渦中に、孫七は否応なく飛びこまなければならなくなった。
「今日はここに泊っていくといい。今から山をおりるのは大変だろう」
孫七は海野三郎太へいった。

おなじ伊達領でも、山岳地帯と仙台城下とでは気候が一ヵ月はちがう。
月が二月にかわるころには、青葉城周辺の山々から雪がすべて消えた。その名のごとく草や木の緑が冴え冴えと城のまわりをおおっている。
城の周囲三方を広瀬川が蛇行し、本丸は高い山頂にあり、まわりは断崖と山林にかこまれている。要害堅固な城であり、ちかづくことをゆるさない。
大手門は東へむかってひらけている。その正面に広瀬川にかかる大橋があり、いわばこれが城の外門となる。
大手門から大橋のあいだに重臣の屋敷がならんでいる。築城いらい、仙台では広瀬川から西を〈川内〉と呼び、城の領域として、他国の者を寄せつけぬ。
川の東を城下としているのである。
二月に入ってから孫七は城下におりてきて、何日もあるきまわった。城下やその周辺を彼はこの十一年間で知悉していたが、あらたな目的のために念を入れてあるいてみた。
孫七は伊達領内の山岳地で猟をする一方、その獲物を仙台城下や他の領域に売りあるいて、さ

かんに伊達家中の情報を仕入れていたのである。

今度踏査してみて、孫七は城内潜入の経路を探索した。経路としては当初から二つかんがえられた。

竜の口と呼ばれる城の南面はふかい渓谷が切り立っており、ここからの潜入は不可能である。そうなると、西面あるいは北面のふかい山林地帯を踏みこえて二の丸に入りこむか、それとも城の正面から大橋の警備をつきやぶって潜入するかである。

搦手か、正面からかの選択になった。だが、どう探索してみても、警備がきびしすぎて、大橋からの侵入は無理だとわかった。

払暁。

孫七は筒袖に軽衫（伊賀袴）をはき、草鞋で足をかため、ほっそ頭巾をかぶって、城の北方大崎神社の境内にあらわれた。

腰に弁当をさげ、柴打ちをたずさえ、手荷物を背に負い、猟師筒を手にしているので、誰が見ても猟師とわかるいでたちである。毎年船形山へ入るときの恰好がこのようなものだ。

次郎はつれてきていなかった。境内にはまだ夜気が濃厚にのこっていて、朝の空気と五分五分にまじり合っている。

権現造によって知られる大崎神社の拝殿と本殿とが、うすら闇の中に黒々としずんでいる。孫七はここで一時をすごした。

桁行七間、梁間三間、単層入母屋造こけら葺きの正面の華麗な千鳥破風がしらじらと明けそめてきた大気の中に徐々に姿を浮かびあがらせてきた。

孫七は拝殿にすすみ、こころあらたに参拝をおこなった。彼は信心を持たぬが、命を的にした行動をおこすまえに、気持をおちつけるため事成就の祈願をたてたのである。

合掌をおえ、そこをはなれた。境内をでて、まっすぐ南へむかった。

しばらくいくと、来迎寺の堂宇が見えてきた。境内は広瀬川の流れにのぞんでいる。

附近にまだ人影は見あたらぬ。孫七は速歩をつづけ、たちまち川の岸まできた。

川幅およそ三十間。むろん橋はない。流れに手を入れてみた。身を切るようなつめたさだ。

孫七は背中に負った荷をといた。中からでてきたのは奇妙な形をした衣服である。仔鹿の皮をなめしたものでできており、首のない人形の形をしている。

孫七は着ている衣服を脱いでゆき、下帯一つの裸になった。そしてまず両足を鹿皮服の中へ入れ、胴の上まで持ちあげ、つぎに両手をとおした。

両足、両手は袋状になっており、首のところだけがあいている。首にやはり鹿皮でつくった紐がとおしてあり、それを両側へ引くと、首のところでぎゅっとしまった。

脱いだ着物を一つにまとめ、頭の上にくくりつけ、猟師筒を水に濡らさぬよう両手で高くかかげて、流れの中に入っていった。

そろそろと川の中をあるき、足の立たぬところにきたときは、蛙足で泳ぎ、とうとう川をわたりきった。

これで彼はまず他国者を入れぬ川内に踏みこんだ。

このころ暁は完全にあけきった。対岸に立つと、目のまえに川内三十人町の武家屋敷が立ちならんでいるのが見えた。

ここの区域をとおりぬけても二の丸の背後にでられるが、各木戸口に厳重な番衛がある。そこを突破していくのはやはり至難だ。

三十人町の横手からは丘陵になり、それが深い山林へとつづく。孫七は丘陵へむかってすすみ、山林の中へ分け入っていった。山林を大きく横につっきることができれば、丁度二の丸の背後にでられるのだ。

しかし山林の深さは予想していた以上であった。深い山中をすすむのは慣れている孫七だが、さすが城の防壁を役目とする山林だけあって、前進するのには難航した。

すすむほどに内部は密林のようになっており、太い幹や枝、葉、根、蔓類に歩行をはばまれた。朝だというのに、山林の中は薄暗闇といってよい。

しかもかなり急傾斜になっており、わずか十間ほどすすむのに、半刻（一時間）を要する有様だった。

山中で昼をむかえ、腰にさげた弁当の包みをといた。握り飯一個を食べ、のこりをつつんで、又前進を開始した。

ところが、相かわらず歩行がおもうにまかせない。柴打ちをふるって、枝や蔓をうちはらって、一歩また一歩すすむほかはなかった。

この山林を半日あればぬけられるとはじめに予測していたが、当てがはずれた。半分ほどしか

すすまぬうちに日暮れをむかえた。

日がおちては一歩もあるけぬ。日がくれるまえに手ごろな凹地を見つけ、木の枝や葉を敷き、そこに身を横たえ、一夜を明かした。

翌日は暁から行動を開始した。この日は慣れたためか、前日よりは歩行がはかどった。

山林をあくまでも南へむかったのでは、城の横手へぬけてしまう。山を二つ越えたところで、東方へ向きをかえた。ここからまっすぐ東へむかえば二の丸の背後へでられるという猟師の勘があった。

一時の間もおしんで、前進をつづけた。気がせいて、何度も足をすべらせて急斜面をころげ、木の幹や根で身をささえた。手や足にも多くの擦り傷や切り傷をつくった。

しかし、途中おそれていた城の番衛に見つかる心配はなかった。こんなところを見張っている者はいないようだ。もし見つかるか、出くわすかしたら、猟で山中の道をまちがえて、とんでもないところにまよいこんでしまったと言いわけするつもりだった。

この日、昼すぎごろ、山林の前方にぽっかりと青い空が見えた。ようやく山林をぬけでたのである。

前方の一角に二の丸の石垣が見えたとき、孫七はさすがに感動をおぼえた。

二の丸の石垣はそう高くはないが、白昼、よじのぼるわけにはいかぬ。孫七は山林の中で夕暮れがちかづくのを待った。

大気が灰色にくすんできたころ、孫七は山林をぬけだした。日がとっぷり暮れ落ちてからで

は、城中に潜入してから内部の様子がわからなくなるおそれがあった。

ころ合いをえらんで、裏に金具を打った草鞋にはきかえ、石垣にとりついた。高さは一丈くらいである。石と石との境い目にとりつき、草鞋の底の金具で身をささえ、すこしずつ這いあがっていった。

傾斜は急だが、呼吸とはずみでたくみにのぼっていった。

やがてのうちに、石垣をのぼりつめた。

孫七がおり立った二の丸は、東西百七十二間、南北百十一間の大公館で、藩主の居館であり、政庁でもある。本丸は高い山頂にあって、行きが面倒なので、二の丸が城の中枢部になっているのだ。

しかし孫七が目ざした潜入地点はここではなかった。彼の目的地といえば、大手門外、重臣屋敷の一画を占める寒河江兵部の屋敷である。

そこにいたるには二の丸をぬけて、大手門をくぐりぬけねばならぬ。目的地に到達するまで、まだまだ前途は多難である。

夕闇にまぎれて、二の丸をぬけることはできた。が、大手門を通過するのは至難であった。

この大手門は豊臣秀吉が朝鮮役のときにつくらせた肥前名護屋城の城門を政宗がたまわって船で仙台まではこんで組み立てたといういわくのあるものである。この守りのきびしい城門を正面から突破することは、孫七以外の者であっても無理であったろう。

孫七はやむなく二の丸につづく蔵屋敷にしのびこみ、そこの石垣をこえて大手門の外へ脱けだすことに成功した。そこはもう寒河江兵部の屋敷の前である。

孫七が城内の侵入地点として兵部の屋敷をえらんだのは、たった一つの理由からだ。大橋の西詰に片倉小十郎の屋敷があり、そこから大手門までは一直線である。大手門のなな前に兵部の屋敷がある。

すなわち小十郎は二の丸に登城するに際して、かならず兵部の屋敷の前をとおらねばならぬ。孫七の目的は兵部の屋敷から小十郎をねらうことであった。

宵闇にまぎれて、孫七は兵部の屋敷内にしのび入った。もし大橋をわたることができれば、城外からたった一丁半ほどの距離にすぎないが、彼はここに到達するまでに丸二日間を要した。

ねらう場所は玄関の屋上である。彼はひとまず玄関の天井裏にもぐりこんだ。

孫七はせまい天井裏で一夜を明かす決心をした。まず天井裏から屋上へでる経路を見きわめたうえで、太い棟や梁桁などの交差する天井に体を横たえた。

彼は小十郎の顔を何度か見たことがあるし、狙撃の腕には十分自信があった。この十一年を当地ですごしたことは、けっして無駄ではなかったのである。異常事態さえおこらなければ、明日一日のうちに小十郎を撃ちたおすことはできるだろうとおもった。

小十郎の屋敷から大手門まではわずか一丁余。ここの玄関の屋根からねらえば二十間以内の至近距離で小十郎をとらえることができる。

問題となるのは、小十郎を撃ちころしてからの自分の始末である。無事に逃げおおすことがで

きるか、それともとらえられるか、それ以前に自害して果てるか。暗闇のなかで目をとじ、孫七はさまざまな思索をつづけた。

彼にあたえられた命令は小十郎をころせというだけで、その後どうしろという指示はくだされていない。

〈生還を期するな〉

という意味だろうとおもった。

孫七は死そのものを恐れてはいなかった。彼にとっての重大な関心事は、中町奉行同心の立場と使命を最後までまっとうできるか否かということにつきた。この先何年も十何年も奥州にうち捨てられたままになっているよりも、重大使命をあたえられたことは我が身にとっても果報であった。

小十郎をもし撃ちたおしたならば、伊達藩と幕府との戦いは急転直下の展開になるだろう。この狙撃の成否に戦いの帰趨がかかっていることを彼は本能で察していた。

そうおもうと感動でふるえた。身にあまる使命といえた。

長吉には連絡がとれなかった。というよりも雪の中を一山こえていくだけの日数がなかった。この月の半ばちかくには小十郎が白石へおもむいていくことがわかっていたからである。小十郎も他の重臣たちと同様、自分の知行地と仙台城下とのあいだを一ヵ月ごとに参勤交代している。

それにまた、長吉の力を借りなくても、孫七一人で十分使命をはたすだけの自信があった。

眠っておこうとおもったが、さすがに緊張感と神経の高ぶりで、容易に眠りにおちることはできなかった。

一刻（二時間）ほどたつうちに、かすかに雨の音がしはじめた。昼間晴れあがっていたので、まさか夜半から雨になろうとはおもっていなかった。

（まずい……）

孫七は大きな落胆におそわれた。雨ではおもうように火縄がつかえぬ。

雨覆いの用意はしてあるが、一発必中を期すべきときに雨覆いをつかうのでは万全の自信が持てなかった。明朝まで雨がのこっているようだったら、今回は見おくらなければならぬ。

雨の音はしだいに大きくなってきた。落胆もますます大きくなっていった。おそらく明日は無理だろうとあきらめかけた。

一刻以上たったが、勢いはよわまらない。

（だめだ）

と観念しかけた。

単調な雨の音をじっときいているうちに、失望とともに緊張感がしだいにゆるんできた。

孫七はいつしかまどろみに落ちていた。

どのくらいたったであろう。孫七は目ざめて気がついた。

雨はまだ降りつづいている。

しばらくたつうちに、ふたたび眠りにおちた。この二日間の疲れがほぐれて、ここちよい眠り

がつづいた。

とつぜん彼は目ざめた。そして、耳をすました。

（……！）

雨の音はいつしか止んでいた。

欣喜雀躍するおもいで、むっくりと体をおこした。

屋根裏から外をうかがうと、細い隙間から払暁の空気がおぼろげにさしこんできた。雨は完全にあがっている。

五体にたちまち闘志がみなぎってきた。一度あきらめかけていただけに、いっそう気持をふるいたてられた。

孫七はただちに行動をおこした。今まで手をつけずにおいた最後の握り飯をたいらげて、天井裏から屋根の上へ這いでた。

ようやく明けそめてきたころである。まだ水気をふくんでいる瓦に足をとられぬよう、注意ぶかくすすんだ。瓦屋根がずっと周囲につづいている。

屋根は入り組んだ形をなしている。大屋根から傾斜してくる降棟のむこうに隅棟があり、その先に隅降棟と稚子棟がまじわっている。

そして玄関の屋根は重厚に両翼が反りかえっている。身を伏せて狙撃をはかるには恰好の場所といえた。

下からは気づかれる心配がない。上から俯瞰されるか、となり屋敷の屋根からでなければ、姿

をみとめられぬ。

前方は大橋から大手門にいたる幅のひろい一本道である。その背後には、五色沼とよばれる堀が横たわっている。

孫七は屋根の先端ちかくまですすんだ。前の道路が一望のもとに見おろせる。

しかも、屋根の棟がたくみに道路から孫七の姿をかくしてくれる絶好の位置が見つかった。

大手門の番所が見えるが、まだ宿直以外の姿は見えぬ。周囲の屋敷でも人がおきだしてきていなかった。

孫七はこころゆくまで雨樋に放尿してから、身を伏せた。

そして下の道路をのぞんで、自分の位置をさだめた。

片倉小十郎の屋敷の門も見えた。

つかいなれた猟師筒にはすでに火薬も弾丸もこめてある。

小十郎が登城するのは、およそ巳の刻（午前十時）である。それまで約二刻（四時間）ばかりの時間がある。

孫七はその二刻を屋根の上で待つことになる。猟でもおなじだが、獲物を撃つことは機会を待つことである。

長い時間待つことに耐えて、はじめて獲物を撃ちとることができる。失敗はゆるされぬとなればなおさらのことだ。

朝日がゆっくりと広瀬川の流れのかなたからのぼってきた。屋上からながめると、あちこちの

武家屋敷から炊飯の煙がたちのぼりはじめた。

城内に人影も見えてきた。

やがて城の太鼓が五つ（午前八時）をつげた。

（あと一刻……）

孫七は屋根の上に仰向けに寝て、時がすぎるのを待った。

白い雲が山の涯てから湧きおこって、悠々とながれていく。大小さまざまの形の雲を孫七はながめた。

ながれゆく断雲の一つに孫七はおのれの生涯を見ていた。人の命は一片の断雲とおなじだとおもった。過去のいろいろな出来事がおもいだされた。

小十郎狙撃に成功し、もしここを無事脱出することができたら、江戸へもどれるとおもった。希望がかいま見えてきた。この何年か、彼は江戸へかえることをあきらめ、陸奥の山地で朽ち果てることを覚悟していたのだ。

日がだいぶ高くなった。

前方の朝日が堀の水面をあざやかな色彩にかがやかせた。五色沼の名の由来はこれからおこったのだろうとかんがえた。

（もうすこし……）

孫七は仰向けからうつ伏せに体勢をかえた。

いよいよ火縄の先に火を点じた。そして猟師筒を稚子棟の先へわずかにつきだし、こころみにねらいをはかった。

大橋をわたって大手門へむかう武士の姿がひっきりなしに見えてきた。馬でいく者はいない。高位高禄の武士は供の侍をつれて、槍を持たせ、若党、中間をしたがえていく。

しばらく武士の登城姿に見入った。もうそろそろ小十郎の姿が見えるころだ。

孫七は念のために火薬、弾丸の装塡をたしかめ、前方へむけて猟師筒の位置をさだめた。

十年に一度くらいしかお目にかかれぬ大鹿を山中で射とめるような気持であった。なまじ相手を人間だとおもうと、ひるみの生じるおそれがあった。

片倉小十郎といえば、伊達藩最大の人物である。奥州最大の人物といっても過言ではないであろう。

あらためてそうおもったとき、かすかに孫七のこころがふるえた。

（きたっ！）

そのとき左手前方の片倉の屋敷の門がひらいたのが見えた。

武士が数人あらわれた。その中に、態度物腰のきわだった人物が目についた。

いうまでもなく小十郎景家である。地味な袴に小袖、大小をさしている。

槍を持った供侍が二人、近習らしき武士が二人、それに若党が一人ついている。小十郎の左右を槍持ちがかため、後に近習がしたがっている。

一行はこちらにむかってちかづいてきた。距離はまだ一丁ばかりある。

孫七は大きく息を吸いこんで、ゆっくりと吐いた。一行が兵部の屋敷の門前を通過する至近距

離のところをねらうつもりであった。

徐々に一行の面々の顔かたちが明確になってきた。

小十郎は悠然と歩をすすめている。今まさに人生の完成期をむかえた自信と余裕が五十年輩の面貌にうかがえるのである。あさぐろい顔には精悍さと気迫がにじんでいる。いかにも奥州人らしい骨太な風格がうかがえた。

孫七は十分つかいこんで黒びかりした筒口を小十郎へむけた。照門と照星をむすぶ延長線上に小十郎の顔をぴたりととらえた。

しかしまだ引金に指はそえなかった。ねらいをつけたまま、小十郎が至近距離に入るのをしずかに待った。

孫七には小十郎の顔だけが見えた。そのほかのものは視界から消え去った。

小十郎は一歩一歩しっかりとした足どりでちかづいてきた。顔の肌艶までが見えてきた。

孫七はあらためて照準線の先に小十郎の顔をとらえ、指をそっと引金にそえた。

一行は兵部の屋敷の前にさしかかった。ついに小十郎は至近距離の範囲内に入ってきた。

一瞬、呼吸をとめ、孫七はしずかに引金をしぼろうとした。

だがそのとき、不意に小十郎の顔が視界から消えた。小十郎のまえに近習がかさなったのである。

指先を引金にそえたまま、近習の顔がはなれるのを孫七は待った。が、一瞬はなれたかとおもうと、すぐに又かさなり、交互にその状態がつづいた。

筒口はその二人を追ったが、そうこうしている間に一行は屋敷の門前をとおりすぎてしまった。

ねらって撃てぬことはなかったが、万全を期するには不十分な状態であった。先込めの火縄銃であるから、撃ちなおしはきかぬ。たった一発が勝負なのである。

孫七はやむなくこの機会を見おくり、大事をとって小十郎の下城を待つことにした。

下城は申の刻（午後四時）である。孫七はふたたび屋根に寝そべったまま待った。

待つ苦しみに耐えた。

好天であるのが幸いだった。

日が真上にあがったころ、やや風がでてきた。少々の風は障害にはならぬ。孫七は無念無想の境地に入って、時がすぎるのをひたすら待った。

烏が数羽、ひっきりなしに頭上を舞っている。おなじ烏でも、一羽一羽によって鳴き声がことなる。しばらくのうちに、孫七は一羽一羽の鳴き声をききわけられるようになった。

太陽の位置が徐々にうつりかわってきた。だいぶ西にかたむいた。

孫七はひたすら視線を大手門へむけていた。

そのとき、孫七は自分の目をうたがった。

申の刻を待たず、いきなり大手門から小十郎の姿があらわれた。こういうことがあるから油断は禁物なのだ。登城したときと同様、槍持ち二人、近習二人、若党一人をしたがえている。

孫七はすぐさまむきなおって、火縄に点火し、猟師筒をかまえた。朝方とは方向が反対であ

る。

陽春の午後の日をあびて、小十郎はゆっくりとこちらにむかってちかづいてくる。

孫七は筒口を小十郎の顔面へむけ、鼻と口とのあいだにねらいをつけた。もうこの機会をはずすわけにはいかぬ。必殺の気迫をこめてねらいつづけた。

至近距離に入るのを待つまでもない。屋上から大手門まで半丁ほどしかない。まず撃ちもらすはずのない距離だ。

小十郎の顔がわらっている。近習と談笑しながらあるいているのだ。

その顔が一瞬のうちに粉微塵にとび散る光景が孫七の脳裡にうかんだ。

孫七は指先を引金にかけた。そして呼吸をとめ、しずかに引金をしぼった。

ダーン

かわいた銃声が轟然と城内にひびきわたった。

だが、小十郎の上半身が前にかしいだのは、その瞬前であった。

(あっ!)

孫七はこころのうちで驚愕の声をあげた。おもいがけぬことがおこった。銃弾が飛来するのを予知して、小十郎がよけたかのように見えた。

(こんなことがあるはずがない)

孫七は狼狽して胸中でさけんだ。

実際は、小十郎の草履の鼻緒が切れて、やや前にのめったのだ。

小十郎にとってはそれがおもいがけぬ僥倖となった。弾丸は小十郎のわずか頭上を飛び去っていた。

孫七はとっさに自分のとるべき態度がわからなかった。まるで予想しなかった事態であった。

城内に騒然とした空気がひろがってきた。

離れ座敷

夕闇にまぎれて、百次郎は単身浜御殿をでた。

掘割にかかる橋をわたって、となりの尾張家蔵屋敷の前にでた。そのさらに北どなりは浴恩園である。

百次郎は浴恩園の前まできて、そこをとおりすぎた。目的地はそこではなかった。

「伊達の精鋭部隊と蔵王山伏どもが徘徊しております。お気をつけて」

出がけに源之助から念をおされていた。

百次郎は短筒を懐中におさめてきたのであった。今まではどんな状況にたちいたろうとも、江戸市中での発砲をおのれにいましめてきたが、伊達の手だれがぞくぞく江戸に入ってきた今となっては、急場に際したなら発砲もやむをえぬとちかごろではかんがえをあらためていた。

今日の午後、百次郎は飛脚屋からお蝶の手紙をうけとった。
今夕どうしても会いたいという旨の便りであった。
場所は、築地南小田原町にある料理茶屋〈魚銀〉を指定してあった。
築地は江戸開府のころはまだ海だった。万治のころ、三十間堀の東南の広大な地を埋めたてて築地と称したのである。海にのぞんだ風光のすぐれたところである。
築地本願寺の横をとおりぬけて、南小田原町へでた。
本願寺橋の北詰に、魚銀はあった。
門があり、玄関まで長い苑路がつづいている。数寄屋づくりの広い庭苑を持った料理茶屋である。
母屋のほかに、庭苑内に離れがいくつもつくられている。お蝶はそのうちの一つの離れ座敷で待っていた。
「どうした風の吹きまわしだね。こんなところに呼びだしたりして」
料理茶屋の座敷というものは男女の密会にしばしばつかわれているのである。離れ座敷となるとなおさらだ。
「おいそがしいところを呼びだしたりして、相すいません」
お蝶はやや力のない表情で百次郎をむかえた。
百次郎は一見しただけで、お蝶の身の上になにかおこったのをさとった。それもかなりの重大事だと推量した。

「縁談かい」
当てずっぽにいったのだが、お蝶の表情からそれが図星だとわかった。
だがそれにしては、お蝶の顔は今一つ冴えぬ。
「わたしを後添いにほしいって男がいるんです。とてもいい人なんです」
「常陸屋っていう米屋じゃないか」
百次郎は富田屋の常連については、一通り顔を知っている。なかでもお蝶に執心している男が常陸屋勘兵衛であることも知っていた。
お蝶が返事をしなかったので、求婚の相手が勘兵衛だとわかった。
「いつまで待ってたって、百さんがわたしをどうにかしてくれるわけじゃなし、わたしも今が売りごろじゃないかとかんがえてるわけなんですが」
「まだ決心がつきかねてるとみえるな」
「所詮女は売りものだし、どうせ売るなら今が潮時じゃないかと」
百次郎は女の肚のうちがよく読めるときと、まったくわからぬときがある。今はお蝶の肚が素通しのようによく見えた。
お蝶はそういいながらもまだ迷いにまよっているのがはっきりとわかった。
「女の売りどきは本人がきめるしかないだろう。相手は申し分のなさそうな男じゃないか」
「そうなんです。わたしなんかにはもったいないような相手です」
「以前だまっておれのまえから姿を消したから、今度はまえもっておしえてくれたわけなんだ

な」

百次郎にはそういういい方しかできなかった。

お蝶を好きだが、嫁にはしてやれぬ。身分のちがいをいうのではなく、中町奉行与力には嫁は不用、いやあってはならないというのが彼のかんがえなのである。

それは兄夫婦の無残な結末をもっとも身ぢかなところから見ていたうえでの結論である。ちかごろでは、夏目新蔵の例がある。

中町奉行与力といえども他人が妻帯するのは結構だが、自分はしないときめたのだ。

妻や子にこころをのこしては存分なはたらきができぬし、妻や子にとっても、夫や父が職に殉ずることは悲劇である。おなみを見ていて、百次郎はつくづくとそうおもった。夏目新蔵の妻女の場合は、それ以上の悲劇であった。

「そんなつもりじゃありません」

それ以上女の口からいわせるのは男らしくないと百次郎はかんがえた。

お蝶はわざわざ料理茶屋の離れ座敷に百次郎を呼びだしたのだ。それだけでも彼女のこころのうちは明白である。

「おれは今夜はもどらぬつもりだ。できたら、ここにとまっていきたい。お蝶もつき合ってくれないか」

何年かぶりに百次郎はこういう言葉を口にした。すると自然に、その当時の感情がもどってきた。

「はい、わたしもそのつもりでした」

お蝶も素直に応じ、これをきっかけにして、彼女の態度からも硬さがきえた。

お蝶はごく自然に体を寄せて酌をしてきた。

「何年ぶりだろう」

盃を持ちながらきくと、

「足かけ五年ぶりです」

即座に答えがかえってきた。

百次郎はなごんだ気持になってきた。

「おれは一生嫁を持たぬつもりだ」

百次郎ははっきりといった。

「いいんです。百さんの気持はわかっています。女房になんぞしてくれなくてもいいんです。わたしも、これで気持のまよいが切れました」

「どう切れたんだね」

「縁談をおことわりする決心がつきました」

お蝶もさらりといった。

「そうか……。でも後悔はしないだろうな」

「百さんのせいじゃあないんです。やっぱりわたしは商売が好きなんでしょう。お店をたたんで人の女房になるのは性に合いません。わがまま者ですから、家事に一生をつぃやすのはご免で

す」

「うむ」

「これからも、わたしは一人で生きていきます。百さんのちかくにずっといられたら、それでしあわせなんです」

百次郎はいじらしくなって、お蝶の肩をひき寄せた。

お蝶の体がもたれこんできた。

彼女の鬢のにおいがなつかしかった。襟足の白さに、こころをそそられて、つよく抱きしめた。

「百さん……」

あえぐようにいってお蝶は顔をあげた。

百次郎はお蝶の朱い唇を吸った。まろやかで、とけていきそうなその感触をまだはっきりとおぼえていた。

自分で吸った以上のつよさで唇を吸いかえされた。さらにやわらかな舌をさし入れられた。

吸いこんでやると、奥へ奥へと入りこんできた。

百次郎はお蝶の襟元へ手をのばした。やわらかく、はずみのある胸にふれていった。

こころなしか、以前よりも量感を増したようだ。その肌ざわりは以前のままである。掌に吸いつくような感触がなつかしかった。

百次郎はゆっくりと乳房をもんだ。もむほどにお蝶のあえぎが荒くなって、あつい吐息が百次

郎の顔にかかった。

「好きよ、好きよ……、いつまでもはなさないで……」

お蝶は舌をぬき、今度は首筋に唇をはわせてきた。

百次郎はいとおしさがつのって、もう片方の乳房をつよく愛撫していった。

お蝶は鼻にかかる声をだしてあまえてきた。

もう誰にもこの女をわたしたくないとおもった。誰にもさわらすまいと決心した。

「百さん、ごめんなさい……」

耳もとでお蝶はささやいた。

近江屋九右衛門の妾になったことをいっているのだ。

「仕方がなかった。それがお蝶の人生だったんだから。でも、おれたちはこうして元にもどることができた」

「うれしい。百さんはあのころよりも、もっと、もっといい男になったわ」

「おまえも、ずっといい女になったよ。これからも、もっといい女になるだろう」

お世辞ではなく、それが百次郎の実感だった。

「ほかの女に惚れたりしないで。それから百さん、これからもずっと一生独身でいてくださいね」

お蝶はすかさず約束をせまってきた。

「それは、さっきもいったとおりだ。誰とも所帯を持たぬつもりだよ」

「そして、わたしをたっぷりと可愛がってください」
お蝶の襟元はみだれて、両方の形のいい乳房がほとんどあらわになっていた。
「百さん、吸って……」
蚊の鳴くような声でお蝶はいった。
いわれたとおりにしてやると、お蝶は声をもらして身をそりかえらせていった。
座敷の外はもう、宵闇につつまれていた。

浮世三斎

沖のかなたに、白帆が見えた。
はてしなくひろがる鹿島灘の蒼い海原に、一つ、また一つ……白帆が見えてくると、銚子湊の船着場一帯からどよめきがおこった。
「船が来たぞうっ」
「米が来た！」
「御穀船が見えたあ」
船着場には御穀宿、船積問屋、浜方問屋などの者から船頭、水主、小揚人足、その家族たちまでがでてきており、もう一刻（二時間）も二刻もまえから船の到着を今か今かと待ちわびていた。

白帆の数は見る見るうち水平線にふえていった。やがて鹿島灘の北方があたかも白帆でうずまるまでになってきた。
「とうとう来たなあ」
「本当にやってきた。半年ぶりだ」
「これで江戸も銚子も生きかえるぞ」
歓声はますます高くなり、感動の言葉がとびかった。銚子には諸藩の蔵屋敷も数多く立ちならんでいるが、そこの役人たちまでできて、喜びにくわわった。
銚子はなんといっても、関東諸国および東国と江戸とをむすぶ最大の中継地点である。大消費都市江戸を背景にして銚子の海運はなりたっている。江戸が衰亡すれば、銚子の活気もおとろえるのである。
江戸の食糧危機はすでに先月（二月）で極限の状況をむかえていた。各地に、打ちこわしのおこる不穏の空気がみなぎり、たまりかねた老中松平信明が伊達藩主斉村を城中に呼んで、会談をおこなった。
そして二月下旬、幕府と伊達藩とのあいだで、内々のうちに取引きがむすばれた。西の丸修築工事と斉村の江戸留め置きの撤回とひきかえに、伊達米三十万石の江戸廻漕が約束されたのである。

前回、松平信明が鈴懸主税助にたいして二十万石の廻漕をせまったとき、鈴懸はすでに蔵元の手へわたってしまった米はどうすることもできぬ、と要請をはねつけた。が、今回は藩主の下命として新規の蔵元升屋平右衛門が責任をもって江戸への搬入を請け負ったのである。

とはいっても、実際に米をつんだ船を見るまでは、銚子湊の者たちもなかなかそれを信じることができなかった。

巨大な白帆に風をいっぱいにはらませた数百石積みから八百石積みまでの御穀船が太平洋の荒波を乗り切ってぞくぞくと姿をあらわした。巨体を揺るがせるようにして港にちかづいてきた。船の姿をまぢかに見て、群衆の歓呼はさらに一段と大きくなった。群衆は船にむかってさかんに手をふっている。船端にでている乗組員らもそれにこたえて手をふる光景が見えた。

御穀船がこれほどの歓呼をうけたことはかつてなかったであろう。

港からは数多くの伝馬船が御穀船にむかって水すましのように漕ぎ寄せていった。これらの米は伝馬船でいったん陸揚げされてから、高瀬船や平田船に積みかえられて利根川をさかのぼり、さらに江戸川をへて江戸におくりこまれるのである。

これで伊勢町もやっと息を吹きかえすことになる。江戸町民たちは餓死をまぬがれる。利根川流域の船積問屋も船頭、水主たちもひさびさに活気をとりもどした。

米の陸揚げがはじまったのは、それから半刻（一時間）ほど後である。無数の伝馬船が御穀船と桟橋とのあいだをいそがしく往復しはじめた。人足人夫たちの活気で銚子湊はたちまち生きかえった。

やはり米は銚子においても最大量をほこる積荷であり、商品なのだ。伊達領の米がまったくうごかなくなれば、いずれ銚子湊も息の根をとめられることになる。

幕府と伊達藩とのあいだに和平がもたらされたとはいっても、江戸の食糧危機をすくうために幕府は伊達藩にたいして大きな譲歩をしたのであるから、米戦争で伊達藩は完全に勝利をおさめたといってもいい。反対に、幕府は最大の屈辱をのんだのである。

伊達米をつみあげた高瀬船や平田船が江戸川をくだってきたのは、三月の節句をすぎて間もないころだった。伊勢町でも久方ぶりに大量の米の入荷をむかえて、盆と正月を一度にむかえたような喜びとあわただしさにわきたった。神輿をかつぎだしたり、季節はずれの花火を打ちあげる者たちもいたほどだった。

伊勢町が活気づけば、江戸全体に元気がみなぎってくる。

連日にわたって、切れ目なく伊勢町河岸に米俵を積みあげた船が舳先を接するように入ってきた。米問屋の米蔵はたちまち満たされ、久々に伊勢町河岸に米俵の大きな築山が無数にできた。買いつけにきた江戸市中の米問屋や米屋の大八車でごったがえし、江戸の町々はにぎわいで満ちた。

折から、三月上旬といえば、江戸の町がもっともにぎわう時期とかさなった。この時期といえば、奉公人の出替りで近在近国から、男女の別なく、つとめ奉公の口をもとめる者たちがどっと江戸に入りこんでくる。口入屋がもっとも繁昌する時期である。

そのうえ御殿女中の宿下りがいっせいにこの時期におこなわれるので、美々しく着かざった若

い女たちが墓参りに、芝居見物に、花見にとでかける姿が往来の風景をはなやかにしている。このごろどの往来をとおっても、大抵御殿女中のあで姿が見られた。

それにくわえて、参勤交代の諸大名の帰国がこのころからはじまる。さかんな大名行列の道中があちこちで見られるようになる。

「伊達に一本とられちまいましたねえ」

浜御殿二重櫓の一室で、源之助が苦悩を見せて百次郎にいった。

「米の威力をまざまざと見せつけられた」

百次郎にも苦渋の色がある。彼も伊達の策戦がこうも見事に功を奏するとはおもっていなかった。

「三十万石もの米の威力というのは、やはり大変なものでしたよ」

「伊達の殿様にも逃げられてしまったからなあ」

西の丸修築工事はともかく、米とのひきかえに斉村の帰国を幕府がゆるしたことは中町奉行の戦略にとって最大の痛手となった。斉村はこの月の中旬には、盛大な供揃いをつらねて帰国の途につくことになっている。

それは幕府としてもっとも価値ある人質をみすみす手放すことになる。まだお鶴の方と天祥院とを人質にとっているとはいえ、藩主を国にかえすということは敵の士気をふるいたたせてしまう。

「これで伊達を勢いづかせたんではないでしょうか」

「和平とはいっても、おそらく一時的なものでしかない。伊達は機を見ておもいきった攻勢をしかけてくるだろう。こちらが受け身になってしまった」

百次郎の悩みはそこにあった。伊達を勢いづかせたばかりではない。六藩連合に二の足を踏んでいたほかの大名をも連合に踏みきらすきっかけをあたえたかもしれないのである。

「六藩をかたくむすびつけてしまったら、手に負えなくなるでしょう」

「そうなるまえに、こちらからおもいきった手を打たねばならん」

先月、青葉城内で片倉小十郎の狙撃に失敗した事件も、百次郎にとっては大きな痛手であった。これは伊達藩の野望を一挙につぶすための秘策として、浦上が杉村三太夫に密命をくだしておこなわせたものであった。百次郎はそれを浦上からきいた。

ことが失敗におわったことよりも、杉村三太夫が十一年も以前から伊達藩の探索にかかわり合っていたことのほうが百次郎には驚きであった。そのあいだ奥野孫七、大野木長吉という同心二人がずっと伊達領内に潜行しつづけていたことも驚異であった。中町奉行の仕事ぶりの懐の深さをあらためて知るおもいがした。

いずれ機会があったら、杉村からどうしてもじかにきいておきたいことがあった。兄千太郎の死にかかわることをいくらかでも彼は知っているのではないかとおもった。

杉村がある時期、兄とおなじ密命をうけていたことは事実のようだ。いっさい消息を知られぬままに陸奥の地に果てた兄の最期の様子が彼から多少は知ることができるかもしれぬと期待したのである。

そしてまた、当時杉村が探索して得た伊達の情報があればきいておきたかった。その中にはきっと役立つものがあるにちがいないからだ。百次郎はあらためて杉村という人物についてかんがえなおしていた。

伊達の様子にはその後かわったところは見られなかった。十三人の特命戦士たちのその後の動静についても知る手がかりがなかった。彼等は伊達藩上屋敷に入ってからというもの、ただの一度も屋敷外に姿をあらわしたことがなかった。それだけに今後の彼等の行動が不気味におもえてくるのだった。

三月中旬のある朝。

伊達藩上屋敷の表門の大扉が八文字にひらいた。そしてしばらくたつと、大名行列の先頭があらわれた。

道中案内の足軽を先頭にし、長い槍がつきでて、先箱がいくつもつづいてでてきた。その後に徒士が何人もしたがい、小姓がつづき、さらに挟箱の行列があらわれた。国元仙台へむかう伊達斉村の大名行列である。

百次郎、源之助、伝兵衛、金次は会津藩下屋敷の屋根裏部屋から、その大袈裟な一行を凝視していた。

ふたたび徒士の行列がでて、長刀がつづき、馬廻りがつぎつぎにあらわれた。その後に供頭、小姓がつづき、ようやく槍を左右にしたがえた乗物が姿をあらわした。この乗物の中に藩主斉村がいる。

ついで駕籠の者八人、小納戸、乗馬用口附、馬柄杓、鞭、水箱、乗替馬のあとにふたたび馬廻り。さらに徒士、小姓、草履取、長柄傘、手笠、挟箱、蓑箱、小使、供頭馬、弓、鉄砲、中押足軽……、と行列ははてしないつまでもつづいた。

大名行列といえばどこのものでも本来華美なものだが、とりわけ伊達の行列は政宗いらい派手さと豪華さで天下にきこえている。足軽、若党、中間をくわえれば、その人数は五千人をくだらない。〈伊達〉を華美、派手の同義語としてつかうようになったのも、この大名行列が起源である。

斉村の代になっても、伊達の行列は人の耳目をおどろかすものにかわりなかった。そこには〈奥州王〉の自負がいささかうかがわれるのであった。

天をつくばかりに高々と二本おっ立てた黒鳥毛の槍、猿毛の一本槍、先箱に染めぬいた竹丸に二羽雀の金紋が誇らしげに芝口橋へむかった。まして幕府が江戸に留め置こうとしたのを実力で押しかえして帰国の途についたのであるから、行列の面々の意気は揚々たるものがある。例年の行列よりも一段と勇壮に見えた。

行列の先頭が門をでてから四半刻（三十分）以上たっても、まだ最後尾の押足軽は門をでていなかった。

「これだけの人数を国へかえしてしまっていいんでしょうかね」

屋根裏部屋から行列の出発を見おくった源之助が不安を見せて、ため息まじりにいった。

「この人数をくわえて、伊達は奥州仙台にたてこもるかもしれぬ。藩主を国にむかえて旗をあげ

るつもりじゃないか」

百次郎もひしひしと圧迫感におそわれた。伊達領には天下随一をほこる三万人の家臣団がいる。そのうえ江戸にいた数千人がくわわれば意気軒昂たるものとなるだろう。

「伊達藩主を江戸で見るのはこれが最後じゃないでしょうか」

「藩主の帰国をゆるしたことは、幕府にとっての大きな賭けだ」

斉村は今回帰国すると、普通ならば一年間在国し、明年三月か四月には江戸にもどってくることになっている。けれども、斉村はもう二度と江戸の地を踏まぬ決意で帰国していったような気がしてならない。

この壮大な大名行列を見ていると、ひしひしとそんな感じがつたわってくるのである。

日本橋一帯は、わりあいに道路が整然としており、掘割にそって縦横にとおり、町割もきちんとなされているが、北へいって内神田あたりになると、とたんに道筋が入りくんでくる。町並も雑然とした感じになってくる。旧来の大路のほかに、町の膨張とともにできた横丁だの新道などがふえるのだ。

神田鍛冶町にも、大路と平行して南北にはしる下駄新道と薬師新道がある。このあたりには古くから鍛冶屋や鋳物師が大勢住んでいたといわれるが、ちかごろではほかのさまざまな職人たちも住んでいる。

薬師新道は鍛冶町一丁目から二丁目になったところで、不動新道という呼び名にかわる。道の

左脇に、古いお不動様があるためである。

お不動様の二軒手前に、絵師浮世三斎の家がある。

三斎がここに住みついたのは十年ほどまえからで、この数年彼は役者絵や美人画などをかいてかなり売れてきていた。ちかごろ盛名をはせている歌麿や栄之、春好などにはおよばないが、それでも江戸市中の錦絵問屋や絵草紙屋へゆけば、かならず店頭に三斎の作品が二、三点はかざられている。

年齢はもう五十前後で、筆は洗練されており、無駄なところがなく、こころもちのいい画境をもっている。師匠なし門人なしの絵師で、さほど仕事に追われることもなく、気に入った仕事だけをえらんで、悠々たる絵筆三昧に世をすごしているのである。

家族は四十過ぎくらいの上品な内儀がおり、子供はいない。

昼さがり、三斎の住居を一見して同業とわかる風采の初老の男がおとずれた。玄関で声をかけると、内儀が顔をだした。

「駿河台稲荷小路に住んでおります同業の者です。三斎師匠がご在宅ならお目にかかりたいと存じまして」

その男はいった。初対面の訪問である。髪はだいぶ白くなっており、顎にはやした髭も半白である。

内儀は一度奥へ入り、もどってきた。

「どうぞ、おあがりくださいませ」

と上へ招じた。

「ぶしつけにおたずねして、失礼申しあげます」

客はことわって、奥の座敷へ案内されていった。

その座敷は仕事部屋のつづきになっている。夫婦二人の暮らしだけに、住居の中はどこもきれいにかたづいている。

三斎が仕事部屋から座敷に入ってきた。

「お客さんに、もてなしはいらない。むこうへいっててくれ」

三斎は内儀にむかってそういい、座敷から遠ざけた。

内儀が座敷からでていくと、客は三斎のまえで顎へ手をやり、髭をとった。つけ髭であった。

さらに頭へ手をのばして半白の髪をとった。それはかもじであった。

その下からあらわれたのは精悍な男の顔だ。百次郎である。

「杉村様、とつぜんお邪魔をいたし、申しわけありませぬ」

百次郎はあらためてそういって、三斎のまえに手をついた。浮世三斎は中町奉行与力杉村三太夫と同一人である。世間向けの顔が浮世絵師なのである。

杉村は百次郎もおどろくほど絵師になりきっていた。三斎の絵師としての力はかけ値なしに三太夫の実力なのである。もし与力をやめたとしても、十分絵師としてやっていけるだけのものがある。

「いや、ようこそおいでになった」

とつぜんの訪問だが、杉村はこころよく百次郎をむかえた。

中町奉行与力が事前になんの挨拶もなくほかの与力の住居をおとずれることは滅多にない。だが、杉村の態度は屈託がなかった。彼はすっかり市井にとけこんでいる。

「お久しぶりでございます」

百次郎が杉村と会うのは、夏目新蔵の葬儀の日いらいである。

「なにか、事件がおこりましたか」

杉村はおだやかな目をむけてきた。

この人物が中町奉行きっての古強者であろうとは誰もおもうまい。風采や物腰にもその片鱗すらうかがわれぬ。

「杉村様配下の同心が陸奥において、片倉小十郎をねらったとうかがいました」

百次郎はまわり道をしないで卒直にたずねた。

「そのことだったら、いかにも残念なことをいたした。奥野は鉄砲の達人だが、不運だったとしかいいようがない。今一歩のところで撃ちもらした」

杉村もケレン味なくこたえてくれた。彼は最古参与力であるにもかかわらず、二十歳ちかくも年にへだたりのある百次郎にたいして言葉づかいは丁寧である。

奥野孫七は失敗し、とらえられるまえに、二発目の弾丸をこめ、自分の喉を撃ちぬいたのであった。

このときの有様は、鈴懸主税助があてこすりに老中松平信明にかたったのを浦上がききとって

いた。

「奥野孫七は十一年もまえから伊達領に潜入していたとか……」

百次郎がひたと相手の眸をみつめていうと、杉村はうなずいた。

「今なら、赤石どのにそれを打ちあけてもいいだろう。わたしが伊達藩探索の命令をこうむったのは天明三年だった。わたしは同心二人とともに伊達領へ潜入した」

杉村はあえてかくそうとはしなかった。

「それ以前に、伊達藩探索にむかった与力がいたはずですが」

百次郎はこの機をのがすまいと問うた。杉村の片言隻句、一瞬の表情からでもなにものかつかむことを期待した。

杉村は数瞬、間をおいた。

「赤石千太郎どの……あなたの兄上でしたな」

「はい」

「あなたの兄上はその前年、伊達藩探索の命令をうけて、かの地に潜入していたのです」

「左様ですか」

「千太郎どののはたらきによって、伊達藩にただならぬ密謀がくわだてられようとしていることがわかったしだいだ」

膝をただし、背筋をのばし、百次郎は厳粛なおもいできいた。

「密謀とは……？」

「はっきりいって、幕府への異心です。それも政宗公の遺志ともいうべき根のふかい謀りごとがはりめぐらされていた」

「……」

「古来、奥州は蝦夷が住んでいた異国でした。それが長い年月のうちに関東以西の国々によって切りとられ、したがえられていった。その恨みは今も奥州の人々のこころから消え去っていないでしょう。現在の奥州の人々は蝦夷の子孫ではないが、代々その恨みをひきついで生きている。いつか奥州は中央からはなれ、独自の王国をきずいて昔の姿にもどるべきだというかんがえを根づよくいだいています。かつて政宗公はこれを実現しようとはかり、力およばず失敗した。が、その衣鉢をつぐ者たちが代々伊達藩にいたというべきでしょう」

杉村は意外なほど言葉なめらかにはなしだした。

彼の話は大体百次郎が想像していたとおりであった。杉村はみずから探索にしたがったために、伊達藩の密謀の証拠ないしそれにちかいものに触れているような感じであった。

「奥州の王国というならば、伊達一藩の事柄ではなくなってまいりますな」

「そうかんがえるのが自然であろう。赤石千太郎どのはその証拠のありかをつきとめ、それを手に入れようとして消息をたってしまった。おそらく相手方にはばまれてころされたのでしょう」

「そうでしたか」

「わたしは千太郎どのが消息をたたれてから、伊達藩探索の命令をうけて、同心二人とともに陸奥へ入りました。いわば千太郎どのの任務をひきついだわけです」

杉村がここまで職務にかかわることを打ち明けてくれたのは、百次郎が彼の前任者の弟だからであろう。

「兄の死については？」

「千太郎どのの消息についてもわたしたちはできるかぎりさぐりましたが、ついにつかむことはできませんでした。お気の毒ですが、そのかわりに千太郎どのとおぼしき人物の死をたしかめる羽目になりました。〈直参の士ここに果つ〉、この九文字を奥州の地にのこして憤死した者がありますが、兄上いがいにあてはまる者がおりません」

「直参の士ここに果つ……」

口の中で百次郎がつぶやいたとき、激情が火柱のように体のうちをはしりぬけた。怒りとも悲しみとも名状しがたいものにつきあげられ、衝動にゆすぶられた。

「その場所できっと兄上はころされたのでしょう」

「その場所がどこか、おしえていただけませんか」

兄の最期の様子を知る手がかりがつかめるかもしれぬとおもってたずねた。

「情知らずなようですが、亡き者の消息を今さらたずねたとしても甲斐のないことです。亡くなった者は今さらかえりません。伊達領内とだけ知っておけばよろしいでしょう。それよりも赤石どのには、今重大な任務がおありになる」

おもいがけず杉村のきびしい答えがかえってきた。

「左様でございました。伊達藩探索がわたしの任務です。これをはたすことが、兄の無念をはらすことになるとおもいます」

兄の死は伊達藩に直接かかわりがあるとはいえ、今となっては私事である。重大任務を持つ身で私事に大きなこだわりをいだくことはやめよ、と杉村は後輩与力に助言をあたえてくれたのだ。

「千太郎どのにかわって、今度はあなたに頑張ってもらいたい。わたしも場合によってはまだいくらかは、お手つだいできるでしょう」

「兄がつかみかけた証拠はどうなったのでしょうか」

「残念ながら、それはわたしにもつかめなかった。その年、奥州全域は未曾有の大飢饉におそわれており、伊達藩も危急存亡においこまれ、密謀どころではなくなったのです。そしてその件は沙汰やみになってしまった」

杉村は苦いものでものみくだしたような顔でこたえた。

「奥野、大野木の両人も、その後証拠をつかめなかったのでしょうか」

「伊達はさぐってもさぐってもいきつくところのない、おそろしく懐のふかい藩です。二人ともよく頑張ってくれたが、ついに今までつかむことができなかった」

「左様でしたか」

そうこたえながら、百次郎のうちで闘志が燃えさかっていった。こころはまだ見たことのない陸奥の天地へとんでいた。兄にも杉村にもなしえなかったことを、かわって自分がなしとげようというあついおもいがこみあげた。

北の黙示録(上)
南原幹雄
© Mikio Nanbara 1987

講談社文庫
定価400円

昭和62年11月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫第一出版部宛にお願いいたします。 (庫一)

ISBN4-06-184103-3 (0)

それからしばらくして、つけ髭とかもじで変装し、百次郎は杉村宅を辞去した。

〈つづく〉

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

講談社文庫最新刊

宮尾登美子	天璋院篤姫(上)(下)	薩摩藩から十三代将軍の正室に入り、大奥の総帥として、激動の世に処した見事な生涯。	各460円
杉本苑子	胸に棲む鬼	王朝時代の男女の新鮮で生命力溢れる日々の暮しと、不条理で無惨な突然の死の物語集。	380円
津本陽	日本剣客列伝	剣の達人でもある著者が十人の剣豪を選び、実戦の様を鮮やかに再現した迫真の小説集。	340円
滝口康彦	謀殺	乱世に九州の雄だった竜造寺家、鍋島家にかかわる悲劇の数々を鮮烈に描く傑作短編集。	440円
南原幹雄	北の黙示録(上)(下)	伊達政宗が百五十年前に抱いた奥州独立の野望実現を目論む六藩同盟対中町奉行の暗闘！	各400円
柴田錬三郎	われら梁山泊の好漢(一)	天下泰平の宋、名だたる好漢百八人は腐敗政治を掃討すべく梁山泊に結集。柴錬水滸伝。	480円
中山あい子	紅椿無惨 唐人お吉	日米通商条約締結後、ハリスの許から暇の出たお吉がたどる数奇な運命を描く時代小説。	440円
阿井景子	火怨の城 信長の叔母	信長の叔母雪姫。戦乱の時代を生きる烈婦のめくるめく愛の業相と悲愴凄絶な生きざま。	340円
松野杜夫	麻雀を打つ剣豪	麻雀の味わいは、剣法・兵法の奥儀妙諦に通じる。剣豪が麻雀を駆使する空前の小説集。	480円

表示価格はすべて定価です

講談社文庫 最新刊

松本清張	カミと青銅の迷路 清張通史3	神話や青銅器の文様など多彩な題材をグローバルな視点で検証、日本文化の故郷を探る。	380円
童門冬二	武田信玄の人間学	戦国乱世を強烈に生き抜いた甲斐の名将信玄の複雑で尽きない人間的魅力と感動の生涯。	360円
佐々克明	明治リーダーの戦略戦術	近代日本の骨格をつくりあげた明治維新のヒーロー十一人に焦点をあて、人間像を描く。	320円
両角良彦	東方の夢	ナポレオンの最も華麗な戦いエジプト遠征を雄大な構想で描いた歴史ノンフィクション。	540円
北川晃二	黙してゆかむ 広田弘毅の生涯	文官でありながら東京裁判で絞首刑となった〝悲劇の宰相〟の信念と行動を解く歴史評伝。	540円
三浦綾子	イエス・キリストの生涯	「受胎告知」から「最期の審判」まで名画44点とエッセイでやさしく綴った〝キリストの生涯〟。	520円
鈴木達也	山口組壊滅せず	警備公安への偏重が刑事事件の捜査を大きく変えている！ 元警視監が書いた警鐘の書。	360円
内橋克人 佐高信	「日本自讃論」では未来は読めない	日本はリッチになったのに日本人の心はなぜプアなままなのか。鋭く迫る問題提起対談。	480円

表示価格はすべて定価です

講談社文庫 目録

夏樹静子 遠ざかる影
夏樹静子 家路の果て
夏樹静子 ビッグアップルは眠らない
夏樹静子 国境の女
夏樹静子 最後に愛を見たのは
中井英夫 虚無への供物
中井英夫 人形たちの夜
中井英夫 幻想博物館
中井英夫 悪夢の骨牌（かるた）
中井英夫 人外境通信
中薗英助 現代スパイ物語
中薗英助 モスクワ特急
中薗英助 亡命ロマンス特急
中山あい子 春の岬
中山あい子 水割りおかわり
中原誠 中原将棋勝局集
中沢けい 海を感じる時
中沢けい 野ぶどうを摘む
中沢けい ひとりでいるよ一羽の鳥が
長井彬 原子炉の蟹
中津文彦 黄金流砂
中津文彦 喪失荒野
長島茂雄 燃えた、打った、走った！
内藤國雄 内藤将棋勝局集
内藤国夫 坪内寿夫・経営とはこうするんや
南原幹雄 首一万両
南原幹雄 修羅の絵師
中島梓 文学の輪郭
中島梓 ベストセラーの構造
中川靖造 日本の半導体開発
長田順行編 ワンダー暗号ランド
南條範夫 細香日記
永井次代 いっしょうけんめい生きましょう
永井道雄編
中西進 狂の精神史
長尾三郎編 サハラに死す
西本鶏介編 現代日本児童文学傑作選(1)(2)
西村京太郎 天使の傷痕
西村京太郎 名探偵なんか怖くない
西村京太郎 D機関情報
西村京太郎 殺しの双曲線
西村京太郎 名探偵が多すぎる
西村京太郎 ある朝海に
西村京太郎 脱出
西村京太郎 四つの終止符
西村京太郎 おれたちはブルースしか歌わない
西村京太郎 名探偵も楽じゃない
西村京太郎 悪への招待
西村京太郎 名探偵に乾杯
西村京太郎 七人の証人
西村京太郎 ハイビスカス殺人事件
西村京太郎 炎の墓標
西村京太郎 特急さくら殺人事件
西村京太郎 変身願望
西村京太郎 四国連絡特急殺人事件

西村京太郎　午後の脅迫者
西村京太郎　太陽と砂
西村京太郎　寝台特急あかつき殺人事件
西村京太郎　日本シリーズ殺人事件
西村京太郎　L特急踊り子号殺人事件
西村京太郎　寝台特急「北陸」殺人事件
西村京太郎　オホーツク殺人ルート
仁木悦子　猫は知っていた
仁木悦子　粘土の犬
仁木悦子　林の中の家
仁木悦子　穴
仁木悦子　冷えきった街
仁木悦子　二つの陰画
仁木悦子　赤と白の賭け
仁木悦子　灯らない窓
仁木悦子　緋の記憶
仁木悦子　赤い猫
仁木悦子　陽の翳る街
西村寿行　咆哮は消えた
西村寿行　帰らざる復讐者
西村寿行　わが魂、久遠の闇に
西村寿行　蒼茫の大地、滅ぶ全二冊
西村寿行　赤い鯱
西村寿行　黒い鯱
西村寿行　白い鯱
西村寿行　碧い鯱
西村寿行　緋の鯱
西村寿行　怨霊孕む
西村寿行　癌病船
西村寿行　捜神鬼
西村寿行　鬼狂い
西村寿行　魔界
新田次郎　笛師
新田次郎　聖職の碑
新田次郎　風の遺産
新田次郎　鷲ケ峰物語
新田次郎　密航船水安丸
新田次郎　風の中の瞳
新田次郎　武田勝頼全三冊
日本文芸家協会編　歴史ロマン傑作選全九冊
日本推理作家協会編　ミステリー傑作選　既刊十七冊
新美南吉　花のき村と盗人たち・ごんごろ鐘ほか九編
新美南吉　ごんぎつね・最後の一枚ほか十四編
西村望　無宿人の墨縄
西村望　地鳴りの家
西川勢津子　勢津子お遊びクッキング　おばさんの
西澤潤一　「十年先を読む」発想法
西田豊穂　蝶の切手
西田通弘　語りつぐ経営　〈ホンダとともに30年〉
C・W・ニコル　風を見た少年
C・W・ニコル　松田銑訳　ザ・ウイスキーキャット
野田秀樹　ミーハー　〈この立場なき人々〉
能見俊賢　血液型ビジネス読本
能見俊賢　血液型しつけ学

半村良　妖星伝(一)～(六)
半村良　魔女街
半村良　幻視街
半村良　邪神世界
半村良　戸隠伝説
半村良　うわさ帖
半村良　黄金の侏儒宮
半村良　アクナル・バサックの宝
半村良　げたばき物語
畑山博　海に降る雪
畑山博　いい女・いい出逢い
橋本治　桃尻娘
橋本治　その後の仁義なき桃尻娘
橋本治　恋愛論
林京子　祭りの場
原田泰治　わたしの信州
原田武雄　原田泰治　泰治が歩く
林育男　ビートルズで英語を学ぼう
原田康子　素直な容疑者
原田康子　日曜日の白い雲全二冊
原田康子　鳥のくる庭
羽仁進　青春を生きる
羽仁進　羽仁進の動物天国
原百代武則　天全八冊
林青梧　満鉄特急あじあ物語
林真理子　星に願いを
平岩弓枝　おんなみち全三冊
平岩弓枝　花嫁の日
平岩弓枝　結婚のとき
平岩弓枝　結婚の四季
平岩弓枝　わたしは椿姫
平岩弓枝　花祭
広瀬仁紀　銀行壊滅
広瀬仁紀　株価操作
広瀬仁紀　偽装倒産
広瀬仁紀　偽装取引
広瀬仁紀　薩南の鷹
平山郁夫　一本の道
平岡正明　山口百恵は菩薩である
平尾和雄　ヒマラヤ・スルジェ館物語
樋口清之　日本人の歴史(一)～(四)
広岡達朗　意識革命のすすめ
藤沢周平　雪明かり
藤沢周平　闇の歯車
藤沢周平　春秋の檻　獄医立花登手控え①
藤沢周平　風雪の檻　獄医立花登手控え②
藤沢周平　愛憎の檻　獄医立花登手控え③
藤沢周平　人間の檻　獄医立花登手控え④
古田足日　宿題ひきうけ株式会社
藤村正太　孤独なアスファルト
福沢諭吉　土橋俊一校注　福翁自伝
福沢諭吉　土橋俊一校注　学問のすゝめ
藤本義一　鬼の詩　お嬢さん、上手な恋をしませんか
藤本義一　上手な恋をしませんか

古川　薫　暗殺の森
藤本　泉　時をきざむ潮
深田祐介監修　スチュワーデスの本
深田祐介　さらりーまん野戦学
深田祐介　新さらりーまん野戦学
深田祐介編　深田祐介の最先端ウーマン学
深田祐介　さらりーまん指揮官学
古井由吉　雪の下の蟹・男たちの円居（まどい）
福永令三　クレヨン王国の十二カ月
福永令三　クレヨン王国の花ウサギ
藤門弘　宇土巻子　カントリー・ライフのすすめ
古谷三敏　男のウンチク学　全二冊
舟崎克彦　舟崎靖子　トンカチと花将軍
藤本ますみ　知的生産者たちの現場
船戸与一　山猫の夏　全二冊
別宮貞徳　複眼思考のすすめ
星　新一　エヌ氏の遊園地
星　新一　ノックの音が
星　新一　盗賊会社
星　新一　声の網
星　新一　おみそれ社会
星　新一　なりそこない王子
星　新一　おかしな先祖
星　新一　ごたごた気流
星　新一　きまぐれ体験紀行
星新一編　ショートショートの広場
本多勝一　ニューギニア高地人
本多勝一　カナダ・エスキモー
本多勝一　アラビア遊牧民
本多勝一　麦とロッキード
本多勝一　日本人は美しいか
本多勝一　旅立ちの記　全二冊
本田靖春　ニューヨークの日本人
本田靖春　私戦
本田靖春　村が消えた
本田靖春　不当逮捕
本所次郎　転覆
堀江邦夫　原発ジプシー
堀越二郎　零戦
本田宗一郎　私の手が語る
堀　淳一　地図から旅へ
堀　淳一　消えた鉄道を歩く
堀ひろ子　サハラとわたしとオートバイ
保阪正康　大学医学部
真木洋三　出向を命ず
丸山健二　夏の流れ・正午（まひる）なり
丸木位里　丸木俊　原爆の図
松下竜一　豆腐屋の四季
松下竜一　ルイズ〈父に貰いし名は〉
松下竜一　潮風の町
松本常男　ビートルズ海賊盤事典
升田幸三　升田将棋勝局集
増谷文雄　この人を見よ ブッダ・ゴータマの生涯〉
松田道弘　トリックのある部屋〈私のミステリ案内〉

松田道弘　おもしろゲーム実戦本
前田寿夫　市民版防衛白書
松尾雄治　人はなぜ強くなければならないか　勝つために何をすべきか
松本清張　草の陰刻
松本清張　黄色い風土
松本清張　黒い樹海
松本清張　連環
松本清張　花氷
松本清張　火の縄
松本清張　彩色江戸切絵図
松本清張　紅刷り江戸噂
松本清張　遠くからの声
松本清張　北一輝論
松本清張　ガラスの城
松本清張　棲息分布　全二冊
松本清張　小説帝銀事件
松本清張　落差　全三冊
松本清張　大奥婦女記
松本清張　風紋
松本清張　天保図録　全五冊
松本清張　松本清張社会評論集
松本清張　写楽の謎の「一解決」
松本清張　神と野獣の日
松本清張　中央流沙
松本清張　随筆　黒い手帖
松本清張　殺人行おくのほそ道　全二冊
松本清張　湖底の光芒
松本清張　奥羽の二人
松本清張　増上寺刃傷
松本清張　塗られた本
松本清張　邪馬台国　清張通史①
松本清張　空白の世紀　清張通史②
松谷みよ子　ちいさいモモちゃん
松谷みよ子　モモちゃんとプー
松谷みよ子　モモちゃんとアカネちゃん
松谷みよ子　黒い蝶・花びら
松谷みよ子　おおかみの眉毛
松谷みよ子　ジャムねこさん
松谷みよ子　オバケちゃん
松谷みよ子　まえがみ太郎
松谷みよ子　ちびっこ太郎
松谷みよ子　龍の子太郎・ふたりのイーダ
松谷みよ子　小さいアカネちゃん
松谷みよ子編著　日本の伝説　全二冊
松谷みよ子　日本の昔ばなし　全三冊
松谷みよ子編　昔話十二か月　全二冊
眉村　卓　かれらの中の海
眉村　卓　ぼくのショートショート　砂時計
眉村　卓　ぬばたまの…
眉村　卓　六枚の切符
眉村　卓　二次会のあと
眉村　卓　不器用な戦士たち
丸谷才一　笹まくら

丸谷才一　横しぐれ
丸谷才一　たった一人の反乱 全二冊
丸谷才一　日本文学史早わかり
前川恵司　〈在日〉の生活の中で 韓国・朝鮮人
三島由紀夫　剣
三島由紀夫　絹と明察
三島由紀夫　太陽と鉄
水上勉　湖の琴
水上勉　北国の女の物語 全二冊
水上勉　火の舞い 全二冊
水上勉　野の鈴 全二冊
水上勉　石を抱いた樹 全二冊
三好徹　六月は真紅の薔薇〈小説・沖田総司〉 全二冊
三好徹　五人の棋士
三浦哲郎　拳銃と十五の短篇
三浦哲郎　踊子ノラ
三浦哲郎　おろおろ草紙
宮城まり子　ねむの木の子どもたち 正続
宮城まり子編　としみつ
三浦綾子　ひつじが丘
三浦綾子　自我の構図
三浦綾子　死の彼方までも
三浦綾子　毒麦の季
三浦綾子　岩に立つ棘
三浦綾子　青い愛に遠くあれど
三浦光世　太陽はいつも雲の上に
三浦綾子
宮尾登美子　一絃の琴
宮尾登美子　女のあしおと
宮尾登美子　花のきもの
皆川博子　トマト・ゲーム
皆川博子　奪われた死の物語
皆川博子　知床岬殺人事件
見延典子　もう頬づえはつかない
見延典子　いつのまにか晴れた空
宮沢賢治　銀河鉄道の夜・風の又三郎 ほか四編
宮崎康平　まぼろしの邪馬台国
宮本輝　二十歳の火影
宮本輝　命の器
光岡明　機雷
三輪和雄　空白の五分間
三輪和雄　いのちある限り
宮下孝晴　佐藤幸三　文・写真　モナ・リザが微笑む
三石由起子　ダイアモンドは傷つかない
南山宏　宇宙から来た遺跡
三根生久大　キミは核を見たか
三國連太郎　白い道 〈法然と親鸞とその時代〉全三冊
宮野澄　正しきものは強くあれ〈人間・土光敏夫とその母〉
宮崎緑　はい、ニュースキャスターです
村上元三　佐々木小次郎 全二冊
村上元三　源義経 全五冊
村上元三　水戸黄門 全八冊
武者小路実篤　友情
椋鳩十　マヤの一生

棟方志功　板画・奥の細道 棟方志功・版画　保田與重郎・歌
保田與重郎　炫火抄
村上龍　限りなく透明に近いブルー
村上龍　海の向こうで戦争が始まる
村上龍　コインロッカー・ベイビーズ 全二冊
村上龍　龍アメリカン★ドリーム
村上龍　龍ほか 村上龍・香月利一編　ビートルズってなんだ?
向田邦子　眠る盃
向田邦子　夜中の薔薇
村上春樹　風の歌を聴け
村上春樹　1973年のピンボール
村上春樹　羊をめぐる冒険 全二冊
村上春樹　カンガルー日和
村上春樹　夢で会いましょう 糸井重里
向田直幹　モンマルトル/モンパルナス〈パリ美術散歩〉
村山元英　わが家の日米文化合戦
村松友視　サイゴン・ティをもう一杯
村松友視　上海酔眼
村上信夫　帝国ホテル料理長の楽しいフランス料理
室伏哲郎　企業犯罪
室伏哲郎　高級官僚
村山リウ　説き語り「源氏物語」
森村誠一　高層の死角
森村誠一　虚構の空路
森村誠一　密閉山脈
森村誠一　鉄筋の畜舎
森村誠一　黒の事件簿
森村誠一　虹への旅券 パスポート
森村誠一　恐怖の骨格
森村誠一　ロマンの寄木細工 モザイク
森村誠一　骸の花
森村誠一　偽造の太陽
森村誠一　死の媒蝶
森村誠一　致死眷属
森村誠一　裂けた風雪
森村誠一　姦の毒
森村誠一　魔の少年
森村誠一　空洞の怨恨
森村誠一　終身不能囚
森村誠一　影の分岐
森村誠一　完全犯罪の座標
森村誠一　腐蝕の構造
森村誠一　ピラミッド社会の底辺から
森村誠一　相死相愛
森村誠一　解体死書
森村誠一　太陽黒点
森村誠一　空洞星雲
森村誠一　凄愴圏
森村誠一　東京空港殺人事件
森村誠一　神より借りた砂漠
森村誠一　致死連盟
森村誠一　垂直の死海
森村誠一　青春の源流 全四冊
森村誠一　社奴

森村誠一　捜査線上のアリア
森　鷗外　阿部一族・山椒大夫・高瀬舟ほか八編
森　政弘　「非まじめ」のすすめ　正続
森政弘編「非まじめ」対談
森本哲郎　読書の小径
森本哲郎　夢二の小径
両角良彦　1812年の雪
森　清　町工場からの発想
盛川　宏　釣りバカ料理帖
盛川　宏　釣ったら食べなきゃ
森　毅　ものぐさ数学のすすめ
森　毅　居なおり数学のすすめ
森　瑤子　夜ごとの揺り籠、舟、あるいは戦場
諸井　薫　夕餉の仕度の匂いがする
森　祇晶　勝つための参謀学
山岡荘八　徳川家康　全二十六冊
山岡荘八　桑田忠親　歴史対談　徳川家康
山岡荘八　織田信長　全五冊
山岡荘八　豊臣秀吉〈異本太閤記〉　全六冊
山岡荘八　源頼朝　全二冊
山岡荘八　日蓮
柳田邦男　大いなる決断
柳田邦男　ガン回廊の朝(あした)　全二冊
柳田邦男　日本の逆転した日　全二冊
柳田邦男　発想の現場
柳田邦男　事実からの発想
柳田邦男　日本は燃えているか　全二冊
柳田邦男　フェイズ3の眼
山口　瞳　血涙十番勝負　全二冊
山口　瞳　単身赴任
山口　瞳　同行百歳
山口　瞳　婚約
安岡章太郎　海辺の光景　ほか六編
安岡章太郎　走れトマホーク
山田風太郎　妖説太閤記　全二冊
山田風太郎　戦中派不戦日記
山村美紗　マラッカの海に消えた
山村美紗　葉煙草(シガリロ)の罠
山村美紗　花の寺殺人事件
山村美紗　ガラスの棺
山村美紗　三十三間堂の矢殺人事件
山田正紀　ヨハネの剣
山田正紀　風の七人
山田正紀　ツングース特命隊
山田正紀　アフロディーテ
山田正紀　闇の太守
山村正夫　裂けた背景
山村正夫　陸奥(みちのく)こけし殺人事件
安本末子　にあんちゃん
安田二郎　マネー・ハンター
山口洋子　愛する嘘を知ってますか
山口洋子　山口洋子の慕情対談
山口洋子　愛されかた知ってますか
山口洋子　プライベート・ライブ

山口洋子　ドント・ディスターブ
山口洋子　ところで、もう一杯　①—③
山口洋子編　歌上手になる本　平尾昌晃の
山口洋子編　歌上手になる本　猪俣公章の
山口洋子編　歌上手になる本　曽根幸明の
山口洋子編　歌上手になる本　鈴木淳の
山口洋子編　歌上手になる本　市川昭介の
山本夏彦　二流の愉しみ
山際淳司　ベースボール・スケッチブック
山崎正和　室町記
矢原秀人　実践ドライブ・テクニック
矢原秀人　完全ドライブ・テクニック
矢田喜美雄　謀殺下山事件
山口昌男　道化の宇宙
山本　脩　とっておきの旅100選〈東日本編〉〈西日本編〉
山本七平　小此木啓吾　日本人の社会病理
山田智彦　ザ・マーケット　全三冊
矢口高雄　釣りキチ旅日記
山川健一　みんな十九歳だった
山川健一　鏡の中のガラスの船
結城昌治　死者におくる花束はない
結城昌治　公園には誰もいない
結城昌治　死の報酬
結城昌治　死体置場は空の下
湯川秀樹　自己発見
吉川英治　宮本武蔵　全六冊
吉川英治　新書太閤記　全八冊
吉川英治　三国志　全八冊
吉川英明編著　吉川英治の世界
吉行淳之介　星と月は天の穴
吉行淳之介　闇のなかの祝祭
吉行淳之介　暗室
吉行淳之介　鞄の中身
吉行淳之介　街角の煙草屋までの旅
吉村　昭　日本医家伝
吉村　昭　北天の星　全二冊
吉村　昭　ふぉん・しいぼるとの娘　全三冊
吉村　昭　赤い人
吉村　昭　海も暮れきる
吉村　昭　孤独な噴水
吉村　昭　間宮林蔵
吉田　満　鎮魂戦艦大和　全二冊
横尾忠則　なぜぼくはここにいるのか
横尾忠則　わが坐禅修行記
横田順彌　脱線！たいむましん奇譚
横田順彌　対人カメレオン症
横田順彌　奇想天外殺人事件
吉野秀雄　やわらかな心
吉田ルイ子　ハーレムの熱い日々
吉田ルイ子　自分をさがして旅に生きてます
吉田ルイ子　吉田ルイ子のアメリカ
米長邦雄　米長将棋勝局集
横澤　彪　テレビ式〈ヒットを生む発想と行動〉
李　恢成　またふたたびの道

李恢成　見果てぬ夢　全五冊
李進熙　好太王碑の謎
連城三紀彦　戻り川心中
連城三紀彦　変調二人羽織
連城三紀彦　密やかな喪服
連城三紀彦　敗北への凱旋
渡辺淳一　病める岸
渡辺淳一　秋の終りの旅
渡辺淳一　解剖学的女性論
渡辺淳一　氷紋
渡辺淳一　神々の夕映え
渡辺淳一　長崎ロシア遊女館
渡辺淳一　雲の階段　全二冊
渡辺淳一　ロマンチシズムとしての未来
和久峻三　仮面法廷
和久峻三　多国籍企業殺人事件
和久峻三　逆転法廷
和久峻三　断罪
和久峻三　午前三時の訪問者
和久峻三　アリバイは両刃の剣
和久峻三　悪の扉　全二冊
和久峻三　死刑台の女
渡辺剣次　ミステリイ・カクテル
渡部昇一　クオリティ・ライフの発想
渡部昇一　知的対応の時代
渡部昇一　知的風景の中の女性
和田誠　シネマッド・ティーパーティ
和田誠　落語横車
和田誠　日曜日は歌謡日
脇英世　ニューメディア時代の知的生産の技術
脇英世　パソコン新世紀
わたりむつこ　はなはなみんみ物語
わたりむつこ　ゆらぎの詩の物語
わたりむつこ　よみがえる魔法の物語
鴨長明　川瀬一馬校注　方丈記　現代語訳付
高橋貞一校注　平家物語　全二冊
吉田兼好　川瀬一馬校注　徒然草　現代語訳付
森野宗明校注　伊勢物語　現代語訳付
松尾芭蕉　阪倉篤義校注　おくのほそ道　現代語訳付
中西進校注　万葉集　全訳注原文付　全四冊
中西進編　万葉集事典
川瀬一馬校注　和泉式部日記　現代語訳付
川瀬一馬校注　蜻蛉日記　現代語訳付　全二冊
親鸞／唯円　梅原猛校注　歎異抄
道元／懐奘編　山崎正一校注　正法眼蔵随聞記
世阿弥編　川瀬一馬校注　花伝書（風姿花伝）
金岡秀友校注　般若心経
天野鎮雄校注　孫子
孔子　木村英一訳、校注　論語
木村英一訳　野村茂夫補　老子
清少納言　川瀬一馬校注　枕草子　全二冊

昭和62年8月15日現在